

白楊先生

僕のひげについての抗議は少々困る實は時々ほめる人があるがまだとれと命じた人はない。これあるは君より始まる。

僕フロック・コートを五十四圓で新調したら、急に演舌がやつて見度なつた。

天長節に一着の上麻布迄行つたらもう演舌はしないでもよくなつた

四四六

明治三十九年十一月七日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

君が手紙をかく僕が手紙をかく而して互に連發すれば手紙で疲弊して仕舞ふ。そこで今度は一寸短かい奴をかく。

サボテンの元勳四方太がアン火を賞めたから面白い。大方自分に出来ないからだらう。天絃は比較的眞面目な人だ。僕は長江先生も天絃先生も兩方知つてるから兩方へ賛成する。尤もあんなに議論する程のものはないね。田舎へ行くのもいゝ。然し敗北して行くのは御免だね。御釋迦さんの様に自ら王位や美人をすて、行くなら賛成だ。居たゝまらないで、人からつゝきやられた杯といふのは一生の耻辱だ。人は何といふてもよい自分がさうでなければ。然し自分でさうしては一分が立たない。矢張り東京にゐるが、いゝ。東京にゐるみんなを眼下に見下すがいゝ。そんなに君よりえらい人が澤山ゐるものぢやないよ。飯だつて三度食へれば夫で澤山だ。

子を生ませたつていゝさ。僕なんか何人も製造して嫁にやるのに窮してゐる。然も細君にさう惚れてる譯でもないんだから出來て見ると少々汗顔の至りだ。大方向でもさうだらう。

泣く小説を御注文だが僕に出來ればいゝ。とにかく早く取りかゝりたいものだが中々いそがしい是から一風呂這入つてくる。(藝苑まだ見ず)

十一月七日

金之助

白楊育兒院長殿

四四七

明治三十九年十一月九日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

昨日は御出かと思つて居たら東洋城の注進で顔がはれたと云ふ譯で髮結床も油斷のならないものと氣がつきました。昨日は大分大勢來ましたしめて十三四人です。東洋城と三重吉が大に論じてゐました。紅緑のアンクワを四方太がほめた。森田白楊は散々わるく云ふた。あのチャイは僕も嫌だ。通篇西洋臭い。燒直し然としてゐる。然し田舎の趣味がある所が面白いと思ひます。

文章談はほんの一口でつまらんものです。

正月には非人情の反對即ち純人情のものがかきたいが出来るか、出來損ふか、又は出來上らないか分らない。文債が多くて方々から尻が來て閉口です。

坊ちやんは依然として廣告されてゐるま「す」ね。どうか正月分は(もし出來たら)此醜態を免がれたいと思ふ。

僕今度は新體詩の妙な奴を作らうと思ふ。

文界は依然として芋を揉んでゐる。其なかに混^原ちて奮闘するのは愉快ですね。皮がむけて肉がたゞれても愉快だ。僕もし文壇を退けば西都へ行つて大學で濟まして講義をしてゐます。然し折角生れた甲斐には東京で花々しく打死をしたいですね。

吉原の酉の市なんか僕も見たかつた。

一三日漫然とあるきたい。手紙をかく丈でも随分骨が折れる 以上

十一月九日

金

虚子先生

四四八

明治三十九年十一月九日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

今日は長い手紙をかゝなければならんで四五本かくと一寸一仕事だが返事をよこせといふから上げる。昨日は客に接する事十三四人一寸驚ろいた。然し知つた人があゝ云ふ風に寄つてみんなが遠慮なく話をするのを聞いてゐる程な愉快はない。僕は木曜日を集會日と定めたのをいゝ事と思ふ。

君は一人でだまつてゐる。だまつても、しやべつても同じ事だが、心に窮屈な所があつてはつまらない。平氣にならなければいけない。うちへ来る人は皆恐ろしい人ぢやない。君の方でだまつてるから口を利かないのだ。二三度顔を合せればすぐ話が出る。實は君の様なのが昨日の客中にもあるのだが夫が構はずに話しをしてゐるから面白い。君も話せば面白くなるのである。中川といふ人はやさしい人である



が三重吉君は御仰の通中々猛烈な所がある。あの兩人は親友である。色の白い顔は東洋城といふ俳句家である。あれもあれぎりの好人物である。せびろ連は尤も大人しい連中であつとも氣兼ねをする男ぢやない。君かりに俳句の會へでも出ると假定し玉へ知らない人は幾人でも居る。僕も昔は内氣で大に耻づかしがつたものだ。今でもある人はさう思つてゐる。所が大違ひ外部こそ同じだが内心はどんな人の前でも何とも思はない。學校杯で氣に喰はない教師杯が居ればフンと云つて鼻であしらつてゐる。夫で澤山なのだよ。世の中にエライ人が無暗に多いと思ふから耻づかしくなつたり。極りがわるくなるので。自分の心が高雅であると下等な事をする物などは自然と眼下に見えるから些つとも憶^原する必要が起らないものさ。

こんな氣餒を吐くのも木曜日に君を話させ様と思ふからさ。又來る時は大に辯じ玉へ忙しいから是で御免を蒙る 以上

十一月九日

夏目金之助

小宮豊隆様

四四九

明治三十九年十一月十一日 午前八時—九時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓昨日一寸伺ふのを忘れましたがね小生の原稿は十二月二十日頃迄でいゝでせうか、その所を一寸確めて置きたい實は色々用事があつてね 早くは出來さうもないです。

生田長江といふ人が四方太さんの所へ行つたら先生大氣餒で漱石も一夜をかいてゐるうちはよかつたが近頃段々墮落すると云つたさうだ。四方太先生はこんな元氣はない人だと思つてゐた。えらい事になりま

した。僕は秋晴や秋曇をかいて満足してゐられる様になりたい。其方がどの位個人として幸福か知れない。僕がかくのは冗談にかくんぢやない。まづくても下手でも已を得ずかくのである。冗談なら文章をかゝすに教師丈でひまがあれば遊んでゐる。

小生今後の傾向は先づ四方太先生の墮落的傾向であります。甚だ厄介ですな。小生が好んで墮落するんぢやない。世の中が小生を強ひて墮落せしむるのであるか。恐惶謹言

十一月十一日

金

虚子先生

左千夫の手紙に云つてゐる事は僕にわからない。四方太の駄洒落を攻撃してゐる所は小生は駄洒落とは認めない。僕はあすこへ應用して貰ふ積りで文章談をしたのではない。

あれが駄洒落なら大抵のものは駄洒落だ。然し秋晴や秋曇は墮落的傾向を帯びないから僕には一向感じがない。何をかいたのかわらない。あの儘白紙を代りにしても同じ事だ。四方太がきいたら定めし怒る事だらう。

四五〇

明治三十九年十一月十一日 使ひ持歸 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

今日は早朝から文學論の原稿を見てゐます中川といふ人に依頼した處先生頗る名文をかくものだから少少降参をして愚癡たらしく讀んでゐます。

今四十枚ばかり見た所へ赤い冬瓜の様なものゝ臺所の方から來て驚ろきました夫に長い手紙があるので愈驚ろきました。赤冬瓜の事は一二行であとは自我説文學説だから愈以て驚ろきました。御意見は面白く拜見しました。大分御謙遜の様ですがあれはいけません。然し文章について大意見があるとは甚だ面白い是非伺ひ度と思ひます。

アン火は感じがわるいですね。佛蘭西あたりのいか様ものを脊負ひ込んだのでせう。

四方太は白紙文學、僕は墮落文學、君はサボテン文學三重吉はオンラン憂ひ式夫々勝手にやればいゝのです。夫で逢へば減茶に議論をして喧嘩をすればいゝと思ふ。所が四方太先生は議論をしませんよ。だからいやだ。

天下が僕の文を待つは甚だ愉快な御愛嬌で難有く待たれて置いて大に驚ろかす積りで奮發してかきませう。東洋城のオバサンが二百十日をほめたさうだから面白い。僕は人の攻撃をいくらでもきくが大概採用しない事にしました。其代りほめた所は何でも採用すると云ふ憲法です。

何だかムヅ／＼していけません。學校などへ出るのが惜しくつてたまらない。やりたい事が多くて困る。僕は十年計畫で敵を斃す積りだつたが近來是程短氣な事はないと思つて百年計畫にあらためました。百年計畫なら大丈夫誰が出て來ても負けません。

木曜に入らつしやい

ハムは好物だから大に喜んで食ひます

二十日迄にかきます

十一月十一日

夏目金之助

虚子先生

三九八

四五二

明治三十九年十一月十二日 午後三時—四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓先日は御令兄がわざわざ御出被下た處生憎親類のものが有用事で名古屋から來てゐた所へ又々外の來客があつてすぐ御歸りで甚だ失禮しました。どうか又御出下さい。

昨夜服部が猫の中篇の見本を持つて來ました。始めて體裁を見ました。今度の表紙の模様は上巻のより上出來と思ひます。あの左右にある朱字は無難に出來て古い雅味がある。(上巻の金字は悪口で失禮だが無暗にギザ／＼して印とは思へない。)總體が淋しいが落ち付いてゐると思ひます。扉の朱字も上巻に比すれば數等よいと思ひます。ワクの中にうまく嵌つてゐる様に思はれます。

鶉籠の三枚の扉は先達持つて來ましたが何れも駄目だから歸しました夫からまだ持つて來ません。何をしてゐる事やら

淺井の畫はどうですか。不折は無暗に法螺を吹くから近來繪をたのむのがいやになりました。先〔は〕御禮まで 草々頓首

十一月十一日夜

夏目金之助

橋口 清様

どうも忙がしくて困ります。こんないゝ天氣に一寸とも出られません。「女學世界」の記者が來た

から追ひ歸してやりました

四五二

明治三十九年十一月十六日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區飯田町六丁目二十三番地瀧田哲太郎氏へ

拜啓讀賣新聞文壇擔任の義につき昨夜考へながら寐て仕舞つた。夫故別段名答も出來ぬ

先づ一寸思ひ浮んだ事を云ふと月に六十圓位で各日に一欄もしくは一欄半宛かくのはちと骨が折れる。尤もやつて見んから分らんが多分いやになるだらう。

僕が各日にかけて高等學校か大學をやめる。どつちをやめるかと云へば大學をやめる。

大學は別段難有いとも名譽とも思ふて居らん。今迄三年半に余としては一人前の仕事をして居る。やめたとて職に堪へぬとは云はれない。

高等學校は授業が容易で文學上の研究及び述作の餘裕を作るに便だからやめぬ。のみならず今の所では猶やめない。高等學校の教師のあるものは生意氣である。生徒のあるものも生意氣である。ある教師は余がやめればいゝと考へてゐるらしい。余がやめれば、あとから、すぐ運動して這入らうと思ふてゐるものもあるらしい。こんな奴等を増長させては世の爲めにならんからやめぬ。生徒は何の考もなく只輕跳にして生意氣なのである。然しこんな生徒を征伏しないで學校を出ては余は生涯心持ちがわるい。世の爲めになる事を自分の安きを得る爲めに逃げた様で甚だ不愉快である。だから高等學校は決してやめぬ。尤もそのうち職員のあるもの若しくは生徒のある〔もの〕と衝突して事件が急に發展して出るか居るか二つに極める場合が起るかも知れぬ。余はそんな事があればいゝと心待ちに待つてゐる。然しさうして出るなら格別それでなければ出ない。騒動を起して出るにしても僕の代りに這入りたがつて居るものは決して入らせ

三九九

ない。

大學をやめれば八百圓の収入の差がある。よし讀賣から八百圓くれるにしても毎日新聞へかく事柄は僕の事業として後世に残るものではない（後世に残る残らんは當人たる僕の方で左右する譯には行かぬ。然し苟も文筆を以て世に立つ以上は其覺悟である）只一日で讀み捨てるものゝ爲めに時間を奪はれるのは大學の授業の爲めに時間を奪はれると大した相違はない。そこで僕は躊躇する。

よし夫でも構はんとする。然し讀賣新聞は基礎の堅い新聞かも知れぬが大學程堅くはない。尤も大學でいつ僕を免職するかも知れぬ。僕の眼中には學生も學長も教授もないから、其位の事はいつ僕の頭の上へふりかゝつて来るかも知れぬ。然し其懸念を度外視するときは大學の俸給は讀賣よりも比較的固定して居る。竹越氏は政客である。讀賣新聞と終始する人ではなからう。一反の約束である程度の機械的文學欄を引き受けた所で竹越氏と終始して去就する様に融通の利く文學者ではない。ある時ある場合に僕は一人で立場を失ふ様になるかも知れぬ。竹越氏が如何に勢力家でも如何に僕に好意を表しても全然方面の違ふ文學者を生涯引きすつてある譯には行かぬ。

又それ丈の覺悟を以て最初から入社するには僕の方で夫丈のモチーフがなくてはならん。「僕は教育界に立てぬ人だから、退かなければならん」とか「是非共新聞紙上で自家の説を發表して見たい」とか何かそこには未來の危険を犠牲にする丈の強烈な事情がなくてはならん。所が今の僕には左程の事情がない。夫からよし以上の理由を念頭に置かすして御依頼に應ずるにした所で到底文欄が僕の當初の所期の様に行くものではない。讀賣には讀賣に附屬した在來の記者も居る。僕が文欄を擔任すれば僕の近しい人の文字をのみ載せて、在來の人の文字を閉却する様になるかも知れん。さうすれば苦情が起る。其他色々の事で苦情が持ち上がる。

もし僕の待遇をよくして月給を増して僕の進退を誘ふとすれば僕も少しは動くかも知れん。然し未來の危険は依然として元の通りである。のみならず比較的僕が過分の月給をとれば社中に又不平が起る。島村抱月氏の日々文壇と同様の事情が起るに極つてゐる。

今度の御依頼に就て尤も僕の心を動かすのは僕が文壇を擔任して、僕のうちへ出入する文士の糊口に窮してゐる人に幾分か餘裕を與へてやりたいと云ふ事である。然し事情を綜合して考へると夫も駄目である。以上の理由だからしてまづ當分は見合はず方が僕の爲めだらうと思ふ。 早々頓首、

十一月十六日

夏目金之助

瀧田哲太郎様

四五三

明治三十九年十一月十六日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

〔封筒表左側下に「御降り在中」とあり、裏に「十一月十六日夜八時半」とあり〕

〔初めの部分切れてなし〕

もうやめます。陳列すると際限がない。仕舞へ行く程ゾンザイになる。一二分に一句位宛出来る。此うちで尤も上等な奴を二つ許りとつて頂戴。

あしたは明治大學がやすみになつて嬉しいから、御降りを一寸作りました

十六日夜

金

EOI

虚子先生

四五四

明治三十九年十一月十七日 午前十時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ「はがき」
巢鴨の奥に御引移りのよし拜承淋しい處がよろし。

冬籠り染井の墓地を控へけり

四五五

明治三十九年十一月十八日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓昨夜は失敬。あの沼津行の事で考へたが一寸分らない。
今朝數藤斧三郎君が来て校長落合氏の方にはよい候補者がないから大學出の方で頼みたいと云ふ
昨夜話した通り太田善男に此事を話した。返事はまだ來ない。
今朝數藤君に富山縣魚津に居る北郷二郎の事も話した。
そこで僕は數藤君に是丈の事を受合つた
君と太田君がもし意があるならば校長落合氏に面會して見る様に通知して置く事。
校長は神田三崎町の森田館に居る。朝早くか夜ちと遅くでないと居らんさうだ。明後二十日の午後二時
の瀛車^原で歸るさうだ。
北郷へも意志を聞く事を受合つた。
候補者を三人出したのは少々氣が多過ぎるかも知れんが候補者の方でも行くか行かぬか分らんのだから

仕方がない。

昨夜不忍池畔の君の身の上話をきいた時は只小説的だと思つた。今朝になつて見ると何だか夢の世界
に逍遙した様な氣がする。

どうしても沼津行は斷然やめぬ方がいゝ一寸校長に逢つて見るがいゝ。

今日ある人に俳書堂で編輯人が入るといふ事をきいたから月給をきいたら四十圓位は出すだらうと云ふ
からともかくも聞いて貰ふ事にした。然し頗る危ない

先づ用事迄 草々

十一月十八日

夏目金之助

森田白楊様

四五六

明治三十九年十一月二十一日 午前十時—十一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ

拜啓五條氏書面拜見致候實は數藤斧三郎氏よりの依頼にて三名ばかり候補者を出し候うち二名は斷はり
先方にて望まぬ様子よつて残る一名富山縣魚津に居る北郷と云ふ人に電報にて問合せたる所行きたしと
の希望にて其方まとまりたるあと故仕方なく候五條氏は聞き込んですぐ拙宅へ參られ、ば相談も出來たも
のをと存候こんな事に紹介も何も入るものに無之候死活の問題に禮儀は古來より無之候。戦争には道德さ
へ無之候。

君が御出ならいつ御出でになつてもよろしい。ちと遊びに來て下さい。但今週は木曜の外は長い御話し

は出来かね候。創作をしてゐる譯には無之講義を作らうと思ひ批評すべき作家の作物をよみ始めたる所いやはや眼が二つでは一年もかゝりさうにて甚だ閉口致し候 以上

二十一日

金之助

芥舟兄

四五七

明治三十九年十一月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓傳四先生の原稿は先程送りしました。手を入れると申しても大變ですから大體あれいでせう。校正の時でも氣がついた所を直してやつて下さい。ホト、ギスの趣向はないのだがどうも長くなりさうで、さうして頗る複雑な奴が書いて見たい。所がどうも時間が足りませんがね。そこが困ります。もし充分の時日があつて趣向が渾然とまとまれば日本第一の名作が來年一月のホト、ギスへあらはれるのだが惜しい事です。

いそがしくて困ります。昨夜は大變面白かつた。毎木曜にあゝ猛烈な論戦があると愉快ですな。

四五八

明治三十九年十一月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より府下東郷町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ

拜啓中學世界の臨時増刊にある十三年前の英文科學生の寫真中にあるのは正に僕である。後列の左から二番目に美髯を蓄へてゐるのが僕です。一番目は山川信二郎といふ男である。混同しちや困る。あれは卒

業したてのほやくで髭も生やし立てのほやくの所を不忍の長蛇亭の前で寫したのである。

同號にとし女といふ人が當世の文學者を評したなかに僕の事丈夏目先生といつて他の人は皆雅號を以て呼んでゐるのは、全體何物ですか。男がかりにあんな事をかいたものかと思つたらさうでもない様だ。何で商人の家に生れて云々とある。而して僕の作を愛讀するとかいてある。かう云ふ異性の知己を得た僕は幸福である。實を云ふと創作をやる時にかつて女の讀者を眼中に置いた事がない。女の十中八九迄は僕の作に同情を有して居らんと信じてゐる。其なかにこんな人がひよこりと出て來ると一寸驚ろかされる。而して風葉天外一派を罵倒して居る見識家だから猶驚ろく。どうか西村君に逢つたらあのとし子さんの事をもう少し聞いて置いてくれ玉へ。序に大に感謝の意を表したいものである 先は夫迄 不一

十一月二十三日

夏目金之助

野上豊一郎様

四五九

明治三十九年十一月二十五日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

猫を早く上げやうと思つたが下女がぐづくして遅くなつた。風邪をひいても僕の講義丈出席してくれらる杯は甚だ難有い。元來僕の講義はそんなに面白い筈はないのだから風邪をひいたらゆつくり葛湯でも呑んで寐てるるがい。僕がやすんだのは病氣ぢやない。去ればと云つて君が病氣だから夫に對して休んだ譯でもない。只やすんだのさ。靈の感應で僕がやすむなんて事があるものか。左程に僕を信仰してくれるのは難有いが君がそんな傾向を發達させると飛んでもない事になるよ。僕だからまだいゝが女が相手だと

君は遂に其女の爲めに食ひ殺されて仕舞ふ。あぶない。君の様な性質の人は可成反對の性質を養成しなくてはいけない。君も年頃だから今に戀をするかも知れない。其時に靈の感應なんぞばかり振り廻はしてると小宮豊隆なるものは地球の表面から消滅して仕舞ふ。僕も君位な年には靈の感應を擔いである位だ。而して其「御」蔭でもつとえらくなる所をこんな馬鹿になつて仕舞つた。以來は決して靈の感應を擔いぢやいけない。ことに女に對して擔いぢや大變な事になる。世の中には感應を擔がせてひそかに冷笑する様な怖い女が澤山居る。僕だつて靈の感應を利用して君を嬉しがらせる位は出来る。然しそんな罪な事はしないから君もやめなくつちやいけない。さうして葛湯を飲んでね、日向へ寐て發句でも作つてるが、直つたら木曜に來給へ。先達ては大勢來て皆々議論をして面白かつた。

僕忙がしくつて困る。人に出來る事だと君にすけて貰ふがさうはゆかない。

君はあまり神經質だから今のうちにもう少し呑氣になつて置き給へ。今のうちに呑氣になるのは譯はない。僕がして上げるから毎木曜に必ず出勤し玉へ 以上

十一月二十四日夜

夏目金之助

小宮豊隆様

四六〇

明治三十九年十一月三十日 午前十時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稻田南町三十番地大澤方片上伸氏へ

拜啓御手紙を拜見しました。新年の早稲田文學へ執筆の義につき再應の御照會實は甚だ御氣の毒に存じて居ります。有體に申すと早稲田の方は逃れた積りで居りました。是から大學の講義が切れたから今年分

を少々かき夫からホト、ギスの約束を果すうちに今年の記事は出來なくなる事と存じます。ホト、ギスの方も漸の事で十二月二十日「迄」待つて貰ひました。夫から學校の試験をして文學論の校正をして大晦日迄働く積りであります。

其代りホト、ギスのあとでは屹度早稲田文學へかく積りで居ります。どうかあしからず思つて下さい。木曜に御暇なら御遊びに入らつしやい。此間は中井君（趣味の）が來てゐました 以上

十一月二十九日

夏目金之助

片上伸様

四六一

明治三十九年十一月三十日 午前十時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ

拜啓未だ御面會の機を得ず候處愈御清適奉賀候陳者今般はセロン茶一罐御惠投にあつかり難有拜受仕候。御宿所を檢するに濱武氏と御同宿の様に見受けられ候がもし御朋友にても候や御洩し被下度候

吾輩ハ猫デアル中編幸手元に持合せ候故御禮として進呈仕候間御受納被下候は、幸甚に候。先は右御挨拶迄 草々頓首

十一月二十九日

夏目金之助

久内清孝様

四六二

明治三十九年十二月二日 午後十二時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

僕ノウチノ堀ハ奇麗ニナツタ

登録の件色々御骨折多謝。登録は二十圓かゝるさうだ。誰か偽版でもこしらへた時にすればそれでよいと云ふ漸だからやめた。登録をする本は殆んどないさうだ。先は御禮迄 艸々

四六三

明治三十九年十二月二日 本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鉦太郎氏へ

寒氣漸く烈敷相成候處愈御清勝奉賀候御近著畫道一般御惠投にあつかり拜受難有御禮申上候拙著「猫」中篇幸手元に持合せ居候間一部供御高覽候御笑草とも相成候はゞ幸甚に候

鳥井素川先生の手翰拜讀致候實は年末にて色々の用事幅濶手が五六本有つてもやりきれぬ體裁その爲め諸方よりの依頼も乍遺憾謝絶致候位故到底「朝日」の方も御たのみ通りに隨筆ものを綴る譯に相成かね候右御氣の毒ながら不惡御諒察の上鳥井君へ宜しく御斷わり被下度先は右當用のみ申述候余は拜眉の上萬々可申述候 以上

十二月二日

金之助

不折賢臺

坐下

四六四

明治三十九年十二月四日 午後六時—七時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

拜啓明後日は千鳥の作者が新作をもつてくる由どうか御出席の上朗讀を願ひたいものですが如何でせう
十二月四日

四六五

明治三十九年十二月五日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より仙臺市第二高等學校齋藤阿具氏へ

拜啓堀の修繕難有存候諸今日學校にて承はる處原勝郎の後任として君が第一にくるかも知れぬとの事。そこであらかじめ伺つて置き度候

一若し東京へ御轉任の時は當家へ御這入りなせれ候や
一もし小生が此家を出ねばならぬならば君が東京轉任決着次第御報知を受けて御着前に相當の家を探したし

一出来るならば此うちを以前の如く借りて居りたし
右用事迄草々得貴意候 以上
十二月五日

夏目金之助

齋藤阿具様

四六六

明治三十九年十二月七日 本郷區駒込千駄木町五十七番地キヨシヨシ・ロマンズ氏

57, Sendagicho, Hongo. 12. 7. 06

Dear Prof. Lawrence,

All the work I do in my classes falling on me, and my students having no share in it, I can possibly form no idea whatever as to their ability in their special line of studies, till they present their theses at the end of their academic career. I have run through the list you sent me and have found that some of them included in it are quite unknown to me. Others I know personally, but our intercourse are not so frequent as to make me bold enough to give any decided opinion about them. Thus I am quite powerless in the way of helping you in the matter, If it is absolutely necessary for me to test their eligibility, I must, as you suggest in your letter, have recourse to an examination. But then you are going to give them one, and Mr. Lloyd another. I think those two examinations are enough to show them at the best advantages. I should not object holding mine, if it would help them in giving them fair chance. As it is, I am rather inclined to dispense with it and leave it to you and Mr. Lloyd to decide their competency for the admission to the Eng. Seminar. I should be very much obliged to you, if you are so good as to let me know the names of successful students in the coming examinations.

Yours very sincerely,
K. Natsume

四六七

明治三十九年十二月八日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松

山彦の評落手拜見一々賛成に候然しデカダン派の感じは假令如何なる文學にも散點せざれば必竟駄目に候。ボードレル杯申す輩のは遂に病的の感に候。三重吉の方が餘程上等に候。君の方のデカダンは結構に候。但眞の爲めに美や道徳を犠牲にする一派に候。夫もよろしく候。僕文學論にて之を論ぜんと思ひし所時間なく其儘に相成居候。

ホト、ギス未だ手を下さず今度は今迄と違ふ方面をかゝうと存候然し趣向纏まらず二十迄^原に出来さうもなし實はハムレットを凌ぐ様な傑作を出して天下のモ、ンガーを驚ろかしてやらうと思へども歳末多忙の上いくらえらいものを出しても決して驚ろかぬ性根を据つた讀者のみ故骨折損と存じ御やめに致し是から學校のひまにポツ／＼墮落文學を五六十枚かゝうと存候 以上

十二月八日

金

白 楊 様

四六八

明治三十九年十二月八日 午後(以下不明) 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町福榮館鈴木三重吉

拜啓別紙山彦評森田白楊より送り來り候御参考の爲め入御覽候ホト、ギスを書き始めんと思へど大趣向にて纏らず切ればカタワとなる、時間はあらず困り入候 艸々

十二月八日

夏目金之助

鈴木三重吉様

四六九

明治三十九年十二月八日 午後十一時―十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ 「はがき」
宮城縣角田に六十圓と四十圓の英語教師の口あり誰か心當りはなきか。堀川では雙方不都合と思ふ如何

四七〇

明治三十九年十二月九日 午後二時―三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より仙臺市第二高等學校齋藤阿具氏へ
拜啓御手紙拜見愈東京へ御轉任のよし結構に存候従つて小生現住家屋引拂の件委細承知致候早速家屋捜索にとりかゝり可申候。然し適當の場所見當り候迄はどうか御勘辨を願ひ度と存候。小生が千駄木に居りたきは失禮ながら今の家が氣に入りて外に移るのがいやになつたと申す譯に無之。他に少々理由有之。もし大兄が東京へ參られぬ以上はいつ迄も御厄介にならんと存候處所有主たる大兄が入れ換つて御住居となれば懇願の餘地も無之不得已次第至急立退の用意可仕候。只家屋拂底の今日、色々書籍類も澤山有之どこへでも立ち退くと申す運びに至らず候故其邊の御容赦にはあづかり度と存候
へッ、イは小生のものに候。車屋からへッ、イを借りた覺は無之候

右御返事迄 艸々

十二月九日

夏目金之助

齋藤阿具様

四七一

明治三十九年十二月九日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區久堅町七十四番地五十二號菅虎雄氏へ 「はがき」
僕の家主東京轉任につき僕追ひ出される。よき家なきや。あらば教へ給へ。

九日

四七二

明治三十九年十二月九日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ 「はがき」
僕の家主東京轉任につき近々追ひ出される。よき家あらば見當り次第御報知を乞ふ

九日

四七三

明治三十九年十二月九日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區靈町二十七番地鳳鳴館中川芳太郎、鈴木三重吉へ 「はがき」
僕の家主東京轉任で僕は追ひ出されるにつきよき家あらば見當り次第教へて下され
白楊先生の批評を見たりや

九日

四一四

四七四

明治三十九年十二月十日 午前十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
拜啓愈本日曜からホト、ギスに取りかかりました。學校があるから廿日迄に出来るかどうか受合へない。然し出来る丈かいて見ませう。時があれば傑作にして御覽に入れるがさうも行くまい。廿一日の朝には全部渡さなくてはいけませんか。一寸きかして下さい。正月發行期日が後れても職人が働かないから同じ事でせうか。

僕の家主が東京へ轉任するに就て僕に出ると云ふ甚だ厄介である。今時分轉任せんでもの事であるのと思ふ。然し向は所有権があるから出なければならぬ。君どうですか、いゝ所を知りませんか。あつたら移りたいから教へて下さい。あれば今年中に移つて仕舞ふ。 頓首

十二月九日夜

夏目金之助

虚子先生

座下

四七五

明治三十九年十二月十日 午後二時—三時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ
啓上

三重吉先生が封入の手紙をよこして君に送つてくれといふから御覽なさい。三重吉は嬉しいとかスカートとか云ふ字を無暗に使用する男だ。而して先生僕に對して大に嬉しがつてゐる。僕もこんな御弟子があれば本望の至りだ。耶穌の御弟子でも孔子の御弟子でも此位なものだらう。殆んど恐縮の至りだ。かうやつて君の手紙を三重吉に渡して三重吉の手紙を君に渡すのは丸で色の取持をしてゐる様なものだ。昔の小説にある女髮結の亞流だと思ふ 艸々

十二月十日

金

白楊様

昨日から小説をかき出した二十日迄に出来ればいゝが。今度の小説中には平生僕が君に話す様な議論をする男や、夫から經歷が（人間は知らず）君に似てゐる男が出て来る。自然の勢何となしにさうなるのだから君や僕の事と思つちやいけない

四七六

明治三十九年十二月十一日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
正義組拜見趣向はいゝですがあれでは物足りませんね。あれをもつとキユツと感じさせなくつては短篇の生命がありません。悪口を申して失禮です。こんなものは今の小説家がみんなやります。而してもつとうまくやります。是よりは寫生文の方がよい様に思はれます。然し屑籠へ入れる必要はないでせう。寺田が短篇をよこしました。是もあまり感服しません。然し他人はほめるかも知れない。とにかく御覽

四一五

に入れます 以上

十二月十一日

金

虚子様

四七七

明治三十九年十二月十一日 本郷區駒込千駄木町五十七番地よりチヨン・ロレンス氏へ

57, Sendagicho, Hongo. 11th Dec. 1906

Dear Prof. Lawrence,

I am very much obliged to you for your letter, accompanied with the list of the successful candidates. Enclosed herewith, I return it signed, as is requested. I am very sorry I have done nothing toward helping you in the matter, despite the considerateness on your part to submit it before you have taken any decisive step in it.

Yours very sincerely,

K. Natsume

四七八

明治三十九年十二月十六日 午後四時—五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ [はがき]

欠び御出来のよし小生只今向鉢巻大頭痛にて大傑作製造中に候。二十日迄に出来上る積りなれど只今八

十枚の所にて。豫定の半分にも行つて居らぬ故どうなる事やら當人にも分りかね候。出来ねば末一二回分は二十日以後と御あきらめ下さい。

小生立退きを命ぜられ是亦大頭痛中に候

今度の小説は本郷座式で超ハムレット的の傑作になる筈の所御催促にて段々下落致候残念千萬に候

四七九

明治三十九年十二月十六日 午後十一時—十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ [はがき]

只今頗ル艶ナ所ヲカイテヤル

表題ハ實ハキマラズ。

「野分」、位ナ所ガヨカラウト思ヒマス。ドウデセウ。中々人がキタリ、何カシテ一氣ニ書ケナイ

四八〇

明治三十九年十二月十九日 午後五時—六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區豊町二十七番地鳳鳴館中川芳太郎へ

御手紙拜見僕今明兩日中に長いものをかき上げるので七顛八倒の苦しみ御察し被下度家は大概きまつた。落雲館や車夫のない所をさがして下さる御好意は難有いがあんなものはいくら有つても構ハナイ。早晩夏目先生に降参するにきまつてるんだから降参をさせる様な場所に居る方が社會の爲めである

文學論の校正が舞ひ込んで来た是は君の所へ行くのを間違つて僕の所へ来たのだらう。

鈴木は病氣をしたさうだ。僕のうちでも家内中インフルエンザ下女は寐てるる細君も起きたり寐たりしてゐる。僕丈助かつた。僕が助からないと天下の大文章が出来損ふ所であつた。萬歳萬歳。向鉢巻の大頭

痛は度々経験するが仕舞にいやになる。もう小説は御やめといふ氣にさへなる。何だか腹が痞へて苦しくつて書き上げる迄は眼が血走つてる。眠たがる僕がちつとも眠くない。夜通しでも起きてゐられる。左様なら

十二月十九日

夏目金之助

中川芳太郎様

四八一

明治三十九年十二月二十二日 午後五時一六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本市内坪井町百二十七番地奥太一郎氏へ

御手紙拜見其後は御無沙汰實は大多忙にて始終齷齪致し居りたるために候學校も何だか○○○○○○○○○○
○○○○○○○○と存候右については○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
り候小生は東京にて孤獨校長が變つても學長が變つても頗る呑氣に候考へると東京は廣い所に候。其代りスリや胡魔の灰は至る所に散在致居候然し彼等は到底平面以下のものなれば其上に住む吾等には何等の痛痒を與ふるものにあらざる故安心なものに候

拙著御愛讀被下候よし難有存候鶉籠御所望につき一部差上候是は正月に賣出す筈に候其うち御地へも参る事と存候

何か面白い事を報道せんと思へども何にもなき故是にて御免蒙り候さうく侯野義郎の事は面白く候あの男は多々羅三平を以て自ら目し而も大不平なので頗る厄介に存候漸く正月に相成候年々同じ様な事を致して年々墓に近づき候スリ、ゴマノ蠅は生涯スリ、ゴマノ蠅で一命を終り候 呵々

十二月二十二日

金之助

奥様

四八二

明治三十九年十二月二十二日 午後五時一六時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

君は長い手紙をかいたね。漸くホト、ギスを済ましたから今日は用事其他の手紙をかく是が六本目である。手紙も六本位かくと疲れる。木曜の晩は小説が一章残つて大に勉強しやうと思ふと午後から色々な人がくる入れ代り立ち代り(鈴木、中川も来た)大抵は十分位で歸した。然るに最後に至つて債主俳書堂主人虚子が車を驅つて原稿を受取りにきたのは一番辟易した。僕はまだ書き上げてゐない。それから書き放して見直してない。それで不得已虚子先生に半分朗讀を頼んであまり可笑しいと思ふテニヲハを一寸直したらもう十時過ぎ、そこへ中央公論の瀧田先生がやつてくる。何でも十一時頃になつた。それだから君が來ても矢つ張り同じ事であつた。くればよかつた。

僕引越をしなければ年末に諸先生を會して忘年會を開かうと思ふが手紙を出してさうして客を呼んでさうして引越で見合せちや面白くないから控へてゐる。何でも先達て東洋城が自から臺所へ出て指揮を司どると云つてゐるが先生どうするかしらん。

僕瓦斯會社出張所の前を通つて見世にあるランプが欲しくなつた。札を見たら十五圓である。今に瓦斯でも引く家へ這入つたら此ランプを買ふ事に致さう。鶉籠が出来た。今度來たら一部上げ様。

僕をおとつさんにするのはいゝが、そんな大きなむす子があると思ふと落ち付いて騒げない。僕は是でも青年だぜ。中々若いんだからおとつさんには向かない。兄さんにも向かない。矢つ張り先生にして友達なるものだね。

おとつさんになると今日の様な気分で育文館の生徒なんかと喧嘩が出来る譯のものぢやない。世の中に何がつまらないつて、おとつさんになる程つまらないものはない。又おとつさんを持つより厄介な事はない。僕はおやぢで散々手コソツタ。不思議な事はおやぢが死んでも悲しくも何ともない。舊幕時代なら親不孝の罪を以て火あぶりにでもなる俸だね。君は女の手を生長したからそんな心細い事ばかり云ふ。段々自分で心細くして仕舞ふと始終には世の中がいやになつていけない。君の手紙を見て思ひ出した。今度僕のかいた小説をよんで御覽。あれは天下の心細がつてるものによませやうと思つて書いたものだ。あれを讀んでどんな感じが起るか聞きたいと思ふ。

僕は是で色々な人から色々な自分の身の上を打ちあけた手紙や何かを受取る男だ。人にそんな事の云へるうちは人間がつまり純粹なのである。其代り自分で自分の云ふ事を大袈裟に誇張する事がある。自分は當時はそれ程と氣がつかないでもあとからさう思ふ。君もさうだ。今に細君でももらふと大愉快になるかも知れない。つまらん事をかいて長くなつた。是から一寸晝寐でもしやうと思ふ。何だかだるくていけない。

十二月二十二日

夏目金之助

小宮豊隆様

四八三

明治三十九年十二月二十三日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
拜啓蝶衣（高田四十平）君の所ハ淡路釜口デスカ

四八四

明治三十九年十二月二十四日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區翠平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕
小生駒込西片町十番地へ来る二十七日晴天ならば轉宅興行に付何卒御來援の〔程〕偏に奉願上候
興行元

夏目漱石

四八五

明治三十九年十二月二十四日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ〔はがき〕
天氣ならば二十七日轉宅願くは御賛成の上御來援被下度候
轉宅先は西片町十ロノ七ノアタリ御出張先は千駄木ニテヨロシ

四八六

明治三十九年十二月二十四日 午後三時―四時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町福榮館鈴木三重吉へ〔はがき〕
天氣ならば二十七日轉宅の筈どうか手傳に來てくれ玉へ。西片町十ロノ七ノアタリナリ。但シ千駄木へ

御出張ヲ煩ハシタシ

十二月二十四日

四八七

明治三十九年十二月二十六日 午後四時―五時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
廿七日引き越します
所は本郷西片町十ノ七
であります。中々まづい處です。喬木を下つて幽谷ニ入ル

四八八

明治四十年一月一日 午後七時―八時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區翠平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕
拜啓來る三日木曜につき御來駕願度候。だれか來て夕食の支度をする有志者があさうです
一月一日

四八九

明治四十年一月一日 午後七時―八時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ〔はがき〕
拜啓來る三日木曜には誰か來て夕食の御馳走をする筈につきひるから御出を乞ふ
一月一日

四九〇

明治四十年一月一日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
拜啓來る三日木曜日につき大に諸賢を會し度と存候かねて松根東洋城が御馳走を周旋するといつてゐた
から手紙を出して置きました。どうか來てませ返して下さい

四九一

明治四十年一月二日 午前六時―七時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田寅彦へ〔はがき〕
拜啓來る三日木曜にて例の人々來りて御馳走をこしらへて、たべる由手傳ふなら晝から食ふなら夕方御
出被下度候

四九二

明治四十年一月六日 午後四時―五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
〔はじめの部分切れて無し「畑打」の句なるべし〕
まづ此位な處に候御旅行結構に候三日には大勢あつまり頗る盛會に候。小生野分をかいたから此次は何
をか、うかと考へ居り候。何だか殿下様より漱石の方がえらい氣持に候。此分にては神様を凌ぐ事は容易
に候。人間もそのうち寂滅と御出になるべく。それ迄に色々なものを書いて死に度と存候 以上
一月四日夜

虚子先生

四二四

四九三

明治四十年一月六日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外田中村五十四番地木村方伊津野直氏へ
拜啓わざ／＼御手紙にてうれしく拜見致候閑靜なる御住居をトされ候由結構狩野君より毎々京都はよい所だ是非こい／＼といはれ候小生も行き度候。一ヶ月ばかり遊んで東京へ歸つたら嚙面白からうと存候竹藪の中杯は東京では到底住めず候。舊臘齋藤阿具氏仙臺より東京へ轉任にて千駄木の住居を追ひ出され二十七日に漸く表面へ引き越し候夫から毎日々々來客やら片付けやらで大騒ぎ實は仕事が大分あるのに何もせぬうちに休暇もなくなる次第何につけてものび／＼せぬは東京の生活に候。新居も鼻がつかへる様な所に候ホト、ギス賣切れの由。東京にても二三日中に賣り切れたる様子。餘分があると送つて上げたけれども出版社の方にも種切れ故如何とも致しがたく候。狩野君には東京にて兩三度逢ひ候。京都にてゆつくり御勉強の程願上候先は右御返事迄 草々
一月六日夜

夏目金之助

伊津野様

四九四

明治四十年一月十一日 午後十二時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區豊町福榮館鈴木三重吉へ 【はがき】
日曜には十一時半に拙宅へ御出の事但し隨意の時間に九段へ御出で夏目の席ときいてもよろしく候

四九五

明治四十年一月十一日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ 【はがき】
日曜の能見物には僕等が十一時過ぎに君を誘ふから待つて玉へ。夫とも一人で先へ行つて夏目の席と聞いてもよし

四九六

明治四十年一月十二日 午後十二時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ 【はがき】
寒水村をよみました。君のかいたもので一番小説に近いものである。趣向が面白い。さうして是といふ不自然がない。結構であります。一字一句に苦心するよりあの方が遙かにいゝ。早々萬歳

四九七

明治四十年一月十二日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區竹早町森卷吉へ
拜啓呵責を讀んだ
あれは大變骨を折つた短篇である。其骨折は文章にある。文章のうちでも句法及び句切りにある。一句一句の内容よりも寧ろ前者である。而して其骨折り方は非常に堅い齒の立たない様なものを作り上げた。あれは文の口調から云ふと僕のかいた幻影の盾や一夜に似て居る。妙な事に僕は僕の癖を眞似た文章を嫌ふ。僕の他人と共通の所を眞似たものでなく僕の癖をわざ／＼眞似た作に對すると其人の個性がない様な氣持ちがしていくら善く出來ててもほめる氣にならない。是が第一の不滿の點である。

四二五

夫からあゝ云ふ文體は時代ものか空漠たる詩的のものには適するかも知れぬが世話ものには不適當である。

世話物は主としてある筋を土臺にする。筋でなくてもあるものを捉へて、其あるものを讀者に與へやうとする。所があゝ云ふ風に肩が凝るやうにかくと筋とかあるものとかを味ふ力がみんな一字一句を味ふ爲めに費やされて仕舞ふから自分で自分の目的を害する事になる。

だから文體をあつてしまふ筋とか、ある人情とかをキューとあらはす爲めにはもつと筋を明瞭にしなればならない。或は人に感じさせやうとする人情をもつと露骨にかゝなければならぬ。所が君の短篇の筋は茫としてゐる。女の呵責も矢張り原因結果の不明瞭に伴つて一向ひき立たぬ。それだから文章をもつと容易にするより外に改良の途はない。

もし又文章をあつて生かせ様とするならもつと頭も尾もなく構はない趣向にして仕舞ふが、詩的な空想とか、又は官能に丈うつたへる様なものにしさへすれば文章を味ふ事が出来る。

文章に意を用るれば肝心の筋が猶分らなくなる。筋をたどれば文章の一字一句が晦澁になる。君は知らぬ間に讀者を苦しめてゐる。

單に詩的な作物と人情ものとをかね様としてさうして讀者の方向を迷はせたからかうなつたものと思ふ。○最後に文章で云ふと面白い句もあるが前云ふ通り重に口調や句切りの方に意を用ゐて内容に重きを置いて居らん。平凡な想を妙な口調で述べたに過ぎぬ場所さへある。だから呵責の一篇は單に文章ものとしてみてもえらくない。

○最後に文章は儲置いて筋、趣向、人情の方から云ふとはもつと明瞭に長くかくか又は裏からかいてももつと自然に近い様にかゝなければ人を感動せしむる事は出来ん。あの女が無暗に一人で苦しんで居る様

に思はれる、苦しみが突飛で作者が勝手次第に道具に使つてゐる様に見える。凡ての人間が頭も尾もないダーク一座の操人形の様に見える。あれではいけないよ。

○して見ると呵責は單に文章としても餘りえらくない。單に人情ものとしても猶よくない。而して片々が片々を邪魔をする様に組み合はされてゐるから其結果は猶いけない。

○僕の解剖は正しい。普通の人はあれを讀んで何だか可笑しいと思ふ。而して何が可笑しいか分らずに仕舞ふ。君は其等の評をきくと不平に違ひない。不平かも知れないがさう云ふ評が適當である。君の不平を或る點迄和げやうと思つて僕はこゝ迄解剖して御覽に入れたのである。

○一番最後に呵責の一篇に於て尤も取るべき點があるなら文章である。而して其文章は遂に漱石の癖所を真似たものである。従つて漱石以上に成功した文章でも天下はそれ程動かない。君の損である。真似をされた漱石自身さへ好まぬ以上は他人は猶更である。文は人間である。君は漱石とは違ふ人間であるから自然にかけば屹度漱石と違つたものが出来る。それが君の文章である。どうか此後作物をやる時は其積でやつて貰ひたい。

○僕は遠慮のない事をいふ。君を失望させる譯ではない。君が正しい點から出立して一個の森卷吉として成功せん事を望むからである。以上

一月十二日

夏目金之助

森 卷 吉 様

四九八

明治四十年一月十六日 午後四時—五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より魏町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ (はがき)
寅彦が枯菊の影を送つて來ましたから廻送します。今度のホト、ギスに僕の轉居を廣告してくれませんか

四九九

明治四十年一月十七日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下東郷町上駒込三百八十八番地内海方野上八重へ

明 暗

- 一 非常に苦心の作なり。然し此苦心は局部の苦心なり。従つて苦心の割に全體が引き立つ事なし
- 一 局部に苦心をし過ぎる結果散文中に無暗に詩的な形容を使ふ。然も入らぬ處へ無理矢理に使ふ。スキ間なく象嵌を施したる文机の如し。全體の地は隠れて仕舞ふ。
- 一 而して此裝飾は机の木とある點に於て不調和なり。會話は全然寫真にして地の文は殆んど漢文口調の如き堅苦しきものなり。(余の文體のあるものに似たり)然し警句は大變多し此警句に費やせる勞力を擧げて人間其もの、心機の隠見する觀察に費やしたれば是よりも數十等面白きものが出来るべし
- 一 明暗は若き人の作物也。篇中の人物と同じ位の平面に立つ人の作物なり。自から高い處に居つて上から見下して彼我をかき分けた様な作物にあらず。夫故に同年輩以上の人の心を動かす能はず
- 一 大なる作者は大なる眼と高き立脚地あり。篇中の人物は赤も白も黒も悉く掌を指すが如く雙眸に入る。明暗の作者は人世のある色の外は識別し得ざる若き人なり。才の足らざるにあらず、識の足らざるにあらず。思索綜合の哲學と年が足らぬなり。年は大變な有力なものなり。「明暗」の作者は今より十年後に至つて再び「明暗」をよむ時余の言の詐りならざるを知るべし

- 一 去れども世には年ばかり殖えて一向頭腦の進歩せぬものあり。十中六七迄はこれなり。余の年といふは單に世に住むといふ意ならず。漫然と世に住むは住まぬと同じ。余の年と云ふは文學者としてとつたる年なり。明暗の著作者もし文學者たらんと欲せば漫然として年をとるべからず文學者として年をとるべし。文學者として十年の歲月を送りたる時過去を顧みば余が言の妄ならざるを知らん
- 一 女主人公一人より成る小説なり此女主人公がもつと判然と活動せざる可らず。是を圍繞する附屬物の人間も亦今一層躍然たらざるべからず。幸子を慕ふ醫學士の如きはどうも人間らしからず。之に對する幸子も大分は作者がい、加減に狭い胸の中で築き上げた畸形兒なり。
- 一 讀んで成程と思ふ程に出來ねば失敗なり。明暗は成程と迄思へぬ作なり。著者のみ無暗に成程と思つてゐる。此著者の世間が狭い證據なり。人世の批評眼が出來上らぬ證據なり。觀察が糸の如く細き證據なり
- 一 明暗の如き詩的な警句を連發する作家はもつと詩的な作物をかくべし。而して自己の得所が充分發揮せらるゝ様にすべし。人情ものをかく丈の手腕はなきなり。非人情ものをかく力量は充分あるなり。繪の如きもの、肖像の如きもの、美文的のものをかけば得所を發揮すると同時に弱點を露はすの不便を免がるゝを得べし。 妄評多罪

- 一 しばらく實際に就て御參考の爲め愚存を述べん
- 一 幸子といふ女が晝の爲めに一身を獻身的に過ごすといふはよし。然し妙齡の美人がこんな心を起すには起す丈の原因がなければならん夫をか、なければ突然で不自然に聽える
- 一 兄が嫁を貰ふのを聽いてうらめしく思ふのはよし。此うらめしさを讀者に感ぜしむる爲めにはあら

かじめ伏線を設けて兄と妹の中のよき所、よき加減を讀者に知らしめざるべからず。然らざれば是又突然にて器械的也。作者一人が承知してゐる様に思はれる

一 女が男の戀をしりぞける所は夫でよし。退ぞけて後迷ふもよし。只力量足らざる爲め悉く作者が勝手に製造せる如く見ゆ

一 女が自分の畫のまづきに氣がつく處アツケなし。突然としてレレレーションの如く自分の畫のまづきを知る。作者は夫でよしとするも讀者の腑には落ちず

一 女が遂に降参して醫學士に靡かんとする時自己の不見識を考へて無理に昔の主義を押し通す所よし。全篇にて尤もと思ふは此所なり。何故といへば前に伏線がある故なり。是丈は突然にあらず。作者の勝手にあらず。かゝる女の心理的狀態として如何にもかく發展しさうに思はるゝなり

一 かゝる變な女を描く事は一方から云へば容易なる如くにて一方からは非常に困難なるものなり。變人なる故普通の人と心理狀態の異なる所以を自づから説明せざるべからず。之を説明さざる限りは讀者は成程と思へぬ也。然も其説明たるや全篇を讀むうちにいつといふ事を知らぬ間に説明せざるべからず。是尤も手腕の必要なる所なり

一 趣向は全體として別段の事なし。あしく云へばありふれたるものなるべし。只運用の妙一つにて陳を化して新となす。作者は惜しい事に未だ此力量を有せず。

最後の一節の如きは尤も女主人公の性格を發揮すると共に吾人の同情を彼女の上に濺がしめ得る好シチュエーションなるにも拘はらず。左のみ感服せず

明治四十年一月十八日 午後零時—一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

「縁」といふ面白いものを得たからホト、ギスへ差し上げます。「縁」はどこから見ても女の書いたものであります。しかも明治の才媛がまだ曾て描き出し得なかつた嬉しい情趣をあらはして居ます。「千鳥」をホト、ギスにすゝめた小生は「縁」をにぎりつぶす譯に行きません。ひろく同好の士に讀ませたいと思ひます。

今の小説すきはこんなものを讀んでつまらんといいふかも知れません。鰻汁をぐらく煮て、それを飽く迄食つて、さうして夜中に腹が痛くなつて煩悶しなければ物足らないといふ連中が多い様である。それになければ人生に觸れた心持がしない杯と云つて居ます。ことに女にはそんな毒にあたつて嬉しがる連中が多いと思ひます。大抵の女は信州の山の奥で育つた田舎者です。鮪を食つてピリ、と來て、顔がポーとしなければ魚らしく思はない様ですな。

こんななかに「縁」の様な作者の居るのは甚だたのもしい氣がします。これをたのもしがつて歡迎するものはホト、ギス丈だらうと思ひます。夫れだからホト、ギスへ進上します。

一月十八日

金

虚 子 様

明治四十年一月十八日 午後零時—一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ一寸申し上げます。

君が衣食に困る事をたのまれせぬに少々心配して居た處先日俳書堂主人が子規遺稿を出版するに付いて適當の人がほしいと云ふからあたつて見た所。一週間(一ヶ月)を其方に費やして編輯に従事し其他は毎日十六頁乃至三十二頁の校正をして先づ一年事業として月々貳十五圓位なら出せると云ふ。夫から虚子にも話しをしたら誰ですかといふから實は森田ですが是は此方であてにする丈で向ではいやといふかも知れませんがと答へた。すると虚子が森田君は俳句の心掛があるでせうかといふから。まあないでせう然し校正位は出来るだらうといふたら。いや出版の上でこんな間違があつたと人の噂に上る不都合さへなければいゝのですと申した。

近頃君の事情は知らぬがもし差し當つて困るならやつて見たらどうであらう。氣があるならば俳書堂主人(靱山仁三郎事築地二丁目住)及び高濱虚子(富士見町四ノ八住)に面會して見たら如何。是はあまり威張つた仕事でなし且つ薄給故強ひて勧める譯にあらず只僕の老婆心からいふのである。逢ふ積りなら僕から兩人へ手紙を出してもよし又は突然行つて僕からきいたと云つてもよろしく。いづれにも一寸手紙で返事を下さい。以上

一月十八日

夏目金之助

森田米松様

HOII

明治四十年一月十九日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓春陽堂の編輯員本多直二郎氏新小説紙選句の件につき御目にかゝり御話し申度由につき御面會被下

候へば幸甚に存候先は用事のみ餘は拜眉千萬 不一
一月十九日

夏目金之助

高濱様

HOIII

明治四十年一月二十一日 午後六時—七時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町二丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓庄野宗之助君の宿所を一寸御報知願度と存候 以上

一月二十一日

HOIV

明治四十年一月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町二丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓先日は遠路の所をわざわざ御來駕被下候處實にいやはぞんざい千萬なる接待ぶりにて甚だ以て恐縮致候實はさしかゝつた用事を明日に控へて其方で時間が必要なりし爲め御引きとめ申す譯にも行かず。歸らうと仰せらるゝを左様ならと御歸し申候。

そこで其節一寸御話しを致した庄野君の畫の事を一寸手紙にて問ひ合せ候處賣るなら百圓と申候。さうして買はうと云はれる方には少々高價かも知れぬと申す返事が参り候。小生畫の相場は知らず。畫工を踏み倒すのは無論嫌であなたに無暗なものを壓しつけるのも固より厭に候。只あれなりにして置いては何だか氣が濟まぬ故御通知丈は致し候

右不取敢御詫旁御報迄草々如斯に御座候 以上

一月二十三日

夏目金之助

渡邊和太郎様

傳君によろしく御申傳被下度候

五〇五

明治四十年一月二十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓其後は御無沙汰を致しました。色々用事ばかり多くて一向出られませんが。今日學校にてモリス君が先達て書いて頂いたブックプレートを版にしたいがいゝ人を教へてくれ。滅多な人にたのんで折角の筆致を無茶苦茶にされてはかいて貰つた甲斐がないと申候。それ故橋口君に聞き合はしてもらひませうと答へて置きましたから何分御面倒でも教へて下さい。或はモリス君からあれを其儘あなたの所へ送つてそれを彫刻家の方へ廻していたゞいて出来上つたあとから費用を本人から拂はせる様に致せば猶モリス君の爲めには便宜かと思ひますがそれ丈の御面倒が願へるものでせうか。

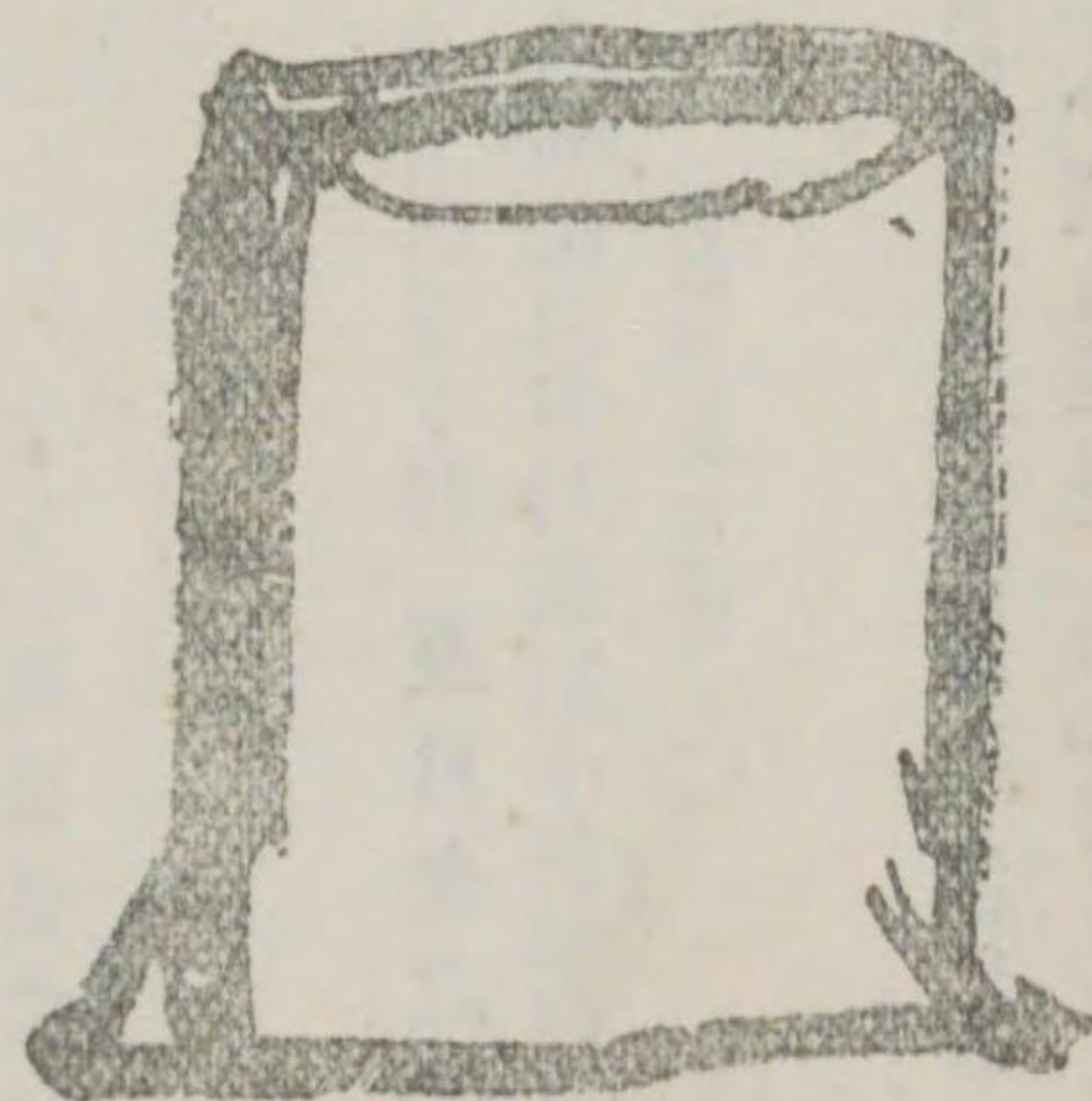
其次に私の御願が一つありますがね。僕はインキ壺を二つ（黒と赤）青銅か何かで鑄出して見たいと思ひますが御存じの學校出の方でこんな事に趣味のある方でひまにこしらへてやらうと云ふ様な奇特な人はありますまいか。謝禮は澤山は出来ません。二つで五圓位で出来れば結構だと思ひます。

カタは支那的趣味でわからない篆字位が出て居る事を希望します。大きさは此位かも少し大きくてよろしい蓋がついて、据りが丈夫なのがよろしいと思ひます。二個が一つにくつゝいても別々に離れて居ても意匠の都合でどうでもよろしい。どうもインキ壺と申すものは俗なもので毎日机の上を見る度にいやな心持になります。

先は用事迄 艸々頓首

二十三日

金之助



橋口 清 様

五〇六

明治四十年一月二十五日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

尊書拜見庄野氏の畫の價は仰せに従ひ今一應き、直し可申候歌舞伎座御親切に御誘ひありがたく候實は先度も艸山氏より誘はれ候へども多忙の爲め謝絶致候行きたい事は行きたく候へども去年から持ち越しの用事山積残念ながらよす方に取り極め申候間他を代りに御誘ひある様願度候

先は用事迄 草々

一月二十五日

渡邊和太郎様

夏目金之助

四三六

五〇七

明治四十年一月二十七日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ
拜啓庄野君に七十圓に負けぬかといふたら一厘も引けぬといふて來ました。僕は其手紙のうちに藝術家の氣骨があらはれて居るのを見て非常に氣に入りました。彼は貧乏である、しかも自己の畫を百圓より一厘も負からぬと云ふ。其裏面には自分の畫にそれ丈の勞力の價を認めぬものは買つてくれなくてもよいと云ふ氣概が躍つてゐる。たのもしい男であります。あれだから下宿にくすぶつて情けない生活をしてゐるのであります。私はあなたに買つてくれと勧めはしません。只負からぬといふて來た事を御報知する許りであります。今日の芝居は定めて面白いでせう

先は用事迄 草々

一月二十七日

夏目金之助

渡邊和太郎様

五〇八

明治四十年一月二十七日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より豊町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
虚子君二月の能(九段)の席上等をとつて頂く譯に行きませんか今度も連れて行つてくれといふ人があ

る。モリスも取りたいと申します。都合はつきますまいか

五〇九

明治四十年二月四日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ
拜啓畫の事につき庄野氏に再應き、合せ候處別紙返書參り候間入御披見申候畫は小生宅に有之いつにても御渡し可申代價は都合によりては小生御預りの上本人へ渡してもよろしく候
右用事迄 草々頓首

二月四日

夏目金之助

渡邊和太郎様

五一〇

明治四十年二月十日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕
昨九日夜若竹に朝大夫君を拜聽の序一寸御誘ひ申候處御外出。朝大夫君は到底義太夫を以て目すべからず。寒風凜々馬鹿を見候。

十日今日内丸最一郎君來り只今迄談話時に午後五時

五一一

明治四十年二月十日 午後十二時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

四三七

拜啓過日御送附の手形百圓正に落掌直ちに庄野氏へ廻送致候處早速禮狀をよこし申候。右にて金の方は一先づ片づき候間左様御承知被下度候儲畫の方は御都合迄小生方に留置申候間御序の節御受取願上候。あれが人の預りものとなると鼠が出てかぢりはせぬかと心配に候。舊臘より持ち越しの用事にて毎日心も心ならず御返事もつい後れ申候不惡御海願上候 以上

二月八日

夏目金之助

渡邊和太郎様

五二二

明治四十年二月十三日 午後十二時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村四十八番地野野吉氏方菅虎雄氏へ

尊書拜見小生多忙にて御出立前に參堂の機を得ず遺憾の至り。其多忙は今日迄引きつゞき毎日に追はれ甚だ困却大兄も久々にて獨逸語教授囃かし忙がしい事と存候。小生は愈となるとよく學校休講と出掛け候が今度は何だかやすむのがいやで其日暮しに送り候。

大我先生から青田石と云ふのを三個八圓五十錢で賣りつけられ而して君のくれた印材へも刻してもらひ都合ほり賃として十二三圓とられ。材價を合して貳十圓餘の散財には閉口ある人曰く印は腐るものでないからいゝだらうと成程なが持ちのする點から云へば安きものに候先は右御返事迄 艸々頓首

二月十三日

金之助

菅大兄

五二三

明治四十年二月十三日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區市ヶ谷藥王寺前町二十番地早稻田文學社内片上伸氏へ

拜啓今年に至り第一に早稻田文學へ小説を寄稿する御約束の處昨年末より臨時の用事出来目下毎日其方にて持て餘し居候故肝心の御約束も至急と申す譯に相成りかね候につき當分の間御容赦にあづかり度先は右用事迄相述べ候 艸々頓首

二月十三日

夏目金之助

片上伸様

野分の評面白く拜見致候。わる口の處大分異存有之候へども批評として例の如く體を得たる點に於て大にうれしく存候

五二四

明治四十年二月十六日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松根豊次郎へ

先夜は失禮其後閑をぬすんで樂堂君の三の糸を拜讀中々面白い所がある様だ。其面白味は俳句をやつた人のみ出し得る面白味である様でその所は甚だ贊成だが全體から云ふとまとまらない。散漫の様に感じた。文章があまり簡單で字があまりうまくなくてさうして僕に充分のひまがないのでさう思はれたのかも知れぬ。

時に只今見るとあの玉稿が見えぬ。下女に尋ねたら知らぬといふ甚だ物騒である。よく探して見ませう。

僕は文學論で困却の體である。

三の糸が出なかつたら御隣家の牧野先生に告訴する事に致さう 左様なら

二月十六日夜

金

東洋城様

五一五

明治四十年二月二十日 午後五時—六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區翠平町二番地朝陽館野間眞綱へ

拜啓先日は英語教師の候補者わざ／＼御報知難有存候あの人の人物と學力等を知りたいと申して参り候間御承知ならば御教示願上候 以上

二月二十日

夏目金之助

野間眞綱様

五一六

明治四十年二月二十二日 午後四時—五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田鶴巻町一番地坂元(當時白仁三郎)

拜啓御手紙拜見實はいつでもよろしと申度なれど只今ある仕事に追はれ其方を一日も早く片づけねばならぬ故日曜の十一時と十二時の間に御出被下候へば好都合に存候先は右御返事まで 艸々頓首

二月二十一日

夏目金之助

白仁三郎様

五一七

明治四十年三月四日 午前十時—十一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田鶴巻町一番地坂元(當時白仁三郎)

拜啓先日は御來駕失敬致候其節の御話しの義は篤と考へたくと存候處非常に多忙にて未だ何とも決せざるうち大學より英文學の講座擔任の相談有之候。因つて其方は朝日の方落着迄待つてもらひ置候。而して小生は今二三週間の後には少々餘裕が出来る見込故其節は場合によりては池邊氏と直接に御目にかゝり御相談を遂げ度と存候。然し其前に考の材料として今少し委細の事を承はり置度と存候

一手當の事 其高は先日の仰の通りにて増減は出来ぬものと承知して可なるや

それから手當の保證 是は六やみに免職にならぬとか、池邊氏のみならず社主の村山氏が保證してくれ

るとか云ふ事。

何年務めれば官吏で云ふ恩給といふ様なものが出るにや、さうして其高は月給の何分一に當るや。

小生が新聞に入れば生活が一變する譯なり。失敗するも再び教育界へもどらざる覺悟なればそれ相應なる安全なる見込なければ一寸動きがたき故下品を顧みず金の事を伺ひ候

次には仕事の事なり。新聞の小説は一回(年に)として何月位つゞくものをかくにや。それから賣捌の方から色々な苦情が出て構はぬにや。小生の小説は到底今日の新聞には不向と思ふ夫でも差し支なきや。尤も十年後には或はよろしかるべきやも知れず。然し其うちには漱石も今の様に流行せぬ様になるかも知

れず。夫でも差支なきや。

小説以外にかくべき事項は小生の隨意として約どの位の量を一週何日位かくべきか。それから學校をやめる事は勿論なれども論説とか小説とかを雑誌で依頼された時は今日の如く隨意に執筆して然るべきや。

それから朝日に出た小説やら其他は書物と纏めて小生の版權にて出版する事を許さるゝや。小生はある意味に於て大學を好まぬものに候。然しある意味にては隱居の様な教授生活を愛し候。此故に多少躊躇致候。御迷惑とは存じ候へど御序の節以上の件々御聞き合せ置被下度候。尤も御即答にも及ばずもし池邊氏に面會致す機會もあらば同氏より承はりてもよろしく候。先は用事のみ 艸々

三月四日

夏目金之助

白仁三郎様

大學を出て江湖の士となるは今迄誰もやらぬ事に候夫故一寸やつて見度候。是も變人たる所以かと存候

五一八

明治四十年三月四日 午後五時—六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (はがき 中央に漱石山房の印が捺してあり)

白酒をのみに來てもよろしく候。漱石山房の印をベタ／＼押したいが時々來て五六冊づゝ押し

て被下度候。其代り時々御馳走を致候 以上頓首恐惶謹言

五一九

明治四十年三月十一日 午後五時—六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稲田鶴巻町一番地坂元(當時白仁)三郎へ
拜啓先日御話しの朝日入社につき多忙中未だ熟考せざれども大約左の如き申出を許可相成候へば進んで池邊氏と會見致し度と存候

一 小生の文學的作物は一切を擧げて朝日新聞に掲載する事
一 但し其分量と種類と長短と時日の割合は小生の隨意たる事。(換言すれば小生は一年間に出來得る限り感興に應じ又思索の暇を見出して凡てを朝日新聞に致す事。但しもとより文學的の述作故に器械的に時間を限る能はず。小説杯にても回數を受合ふ譯に行かず。時には長くなり又短くなり。又は一週に何度もかき又は一月に一二度しか書かぬ事あるべし。而して小生のやり得る程度は自己にも分らぬ故先づ去年中に小生がなし得たる仕事を以て目安とせば大差なからんかと存候尤も去年の仕事は學校へ出た上の事故専門に述作に従事せば或は量に於多少の増加を見るに至るべきかなれどもまづ標準はあの位と御考ありたし。而して小生の仕事の過半は無論美文ことに小説にあらはるべきかと存候。(或は長きものを一回にて御免蒙るか又は坊ちやんの様なものを二三篇かくか其邊は小生の隨意とせられたし)
一 俸酬は御申出の通り月二百圓にてよろしく候。但し他の社員並に盆暮の賞與は頂戴致し候。是は雙方合して月々の手宛の四倍(?わからず)位の割にて豫算を立て度と存候
一 もし文學的作物にて他の雜誌に不得已掲載の場合には其都度朝日社の許可を得べく候。(是は事實として殆んどなき事と存候。既に御許容のホト、ギスと雖ども入社以後は減多に執筆はせぬ覺悟に候)

一但し全く非文學的ならぬもの（誰が見ても）或は二三頁の端もの、もしくは新聞に不向なる學說の論文等は無斷にて適當な所へ掲載の自由を得度と存候

一小生の位地の安全を池邊氏及び社主より正式に保證せられ度事。是も念の爲めに候。大學教授は頗る手堅く安全のものに候故小生が大學を出るには大學程の安全なる事を希望致す譯に候。池邊君は固より紳士なる故間違なきは勿論なれども萬一同君が退社せらるゝ時は社主より外に條件を満足に履行してくれ〔る〕ものなく又當方より履行を要求する宛も無之につき池邊君のみならず社主との契約を希望致し候。必竟するに一度び大學を出て、野の人となる以上は再び教師杯にはならぬ考故に色々な面倒な事を申し候。猶熟考せば此他にも條件が出るやも知れず。出たらば出た時に申上候が先づ是文を參考迄に先方へ一寸御通知置被下度候先は右用事迄 艸々頓首

三月十一日

夏目金之助

白仁三郎様

五二〇

明治四十年三月十四日 午後（以下不明） 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區上野櫻木町丸茂病院薄井秀一氏へ

御病氣のよし御大事に可被成候御依頼の鶉籠小包にて差出候御讀被下度候 以上

三月十三日

五二一

明治四十年三月十七日 午後十一時―十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より大隅國重富村平松野間眞綱へ

只今御手紙を拜見御母上様終に御逝去の由嘸かし御力落しの事と存候あとの事抔色々御心配と存候坂巻の方は大分時日經過致し候故既に定まりたるやも知れず、歸途鹿兒島にて一寸様子を見て御出可被成候。然し坂巻には逢はぬがよし又無暗に取極めぬがよく候。他にも口は可有之見込なり。委細は御歸京の上萬事相談只今多忙たゞ御返事のみ 草々

三月十七日

金之助

眞綱様

五二二

明治四十年三月二十二日 午後五時―六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區市ヶ谷業王寺前町二十番地早稻田文學社内片上伸氏へ

拜啓かねて御約束の早稻田文學へ寄稿の件荏苒遅延申譯無之候然る處今般ある事情にて教員生活をやめ新聞に這入る事と相成候に就ては一切の文學的作物は其方へ廻さねばならぬ義務を生じ候。因て甚だ申譯なき次第ながら御約束を履行する運びに至りかね候右不惡御ゆるし被下度先は右御申譯旁御斷はり迄 艸々頓首

三月二十二日

夏目金之助

片上伸様

五三三

明治四十年三月二十三日 午後零時―一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下葉崎町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ
御手紙拜見小生が大學を退くに就て御懇篤なる御言葉をうけ慚愧の至に候。僕の講義でインスパヤ―されたとあるのは甚だ本懐の至り講座に上るもの、名譽不過之と存候。世の中はみな博士とか教授とかを左も難有きもの、様に申し居候。小生にも教授になれと申候。教授になつて席末に列するの名譽なるは言ふ迄もなく候。教授は皆エラキ男のみと存候。然しエラカラざる僕の如きは殆んど彼等の末席にさへ列するの資格なかるべきかと存じ。思ひ切つて野に下り候。生涯は只運命を頼むより致し方なく前途は慘怛たるものに候。それにも拘はらず大學に嚙み付いて黄色になつたノートを繰り返すよりも人間として殊勝ならんかと存候。小生向後何をやるやら何が出来来るやら自分にも分らず。只やる丈やる而已に候。頻年大學生の意氣妙に衰へて俗に赴く様見うけられ候。大學は月給とりをこしらへて夫で威張つてゐる所の様に感ぜられ候。月給は必要に候へども月給以外に何にもなきものどもごろ／＼して毎年赤門を出で来るは教授連の名譽不過之と存候。彼等はそれで得意に候。小生は頃日ヘーゲルが伯林大學で開講せし當時の情況を讀んで大に感心致し候。彼の眼中は眞理あるのみにて聴講者も亦眞理を目的にして参り候。月給をあてにしたり權門からよめを貰ふ様な考で聴講せるものはなき様子に候。呵々
京へは参り候。京の人形御所望なれば御見やけに買つて参るべく候。どんなのが京人形やら實は知らぬにて候。京都には狩野といふ友人有之候。あれは學長なれども學長や教授や博士杯よりも種類の違ふたエライ人に候。あの人に逢ふために候。わざ／＼京へ参り候。一力は如何相成るやわかりかね候。大坂へも参りて新聞社の人々と近付になる積りに候。昨夜はおそく相成。今日はひる寐をして暮し候。學校をやめ

たら氣が樂になり候。春雨は心地よく候 以上

三月二十三日

夏目金之助

野上豊一郎様

五三四

明治四十年三月二十三日 午後五時―六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ (はがき)
先日は御來駕手拭を御被り被下難有候。
儲ホト、ギス小説選抜の件は當分むづかしく御座候。正月に執筆の事はどうなりますやら、小生が朝日へ書き得る分量次第かと存候。是はあらかじめ御約束もむづかしかるべきか、とも角も出來得る限りホト、ギスの爲めに御用を務める事に致すべく候 以上

五三五

明治四十年三月二十七日 午後十一時―十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ
拜啓印氣壺の模様わざ／＼御寫し被下難有存候。篆字の義は別段よきもの無之 王維の日落江湖白潮來
天地青杯如何かと存候然し十字にて足らぬならば是非なく候。石闌斜點筆桐葉坐題詩もよろしかるべくか。
明朝出發京都へ遊びに参り候故よき句も考へ得ずことによれば彼地より御一報可致候 以上
三月二十七日夜

夏目金之助

橋口 清様

四四八

五二六

明治四十年三月三十一日 午後四時―五時 京都市外下加茂村二十四番地狩野亭吉氏内より芝區三田三丁目八番地七海方野間眞綱へ
拜啓御書拜見鹿兒島は御断はりの由唐津をき、合せる事は容易なれども先日岩田氏よりの來書にては只
今ある學校の教師と交換問題進行中のよしなれば如何にや兎に角照會して見るべく候當地寒く見物にいそ
がしく候皆々へよろしく先は用事迄 艸々拜具

三十一日

金之助

眞 綱 様

五二七

明治四十年三月三十一日 午後四時―五時 京都市外下加茂村二十四番地狩野亭吉氏内より麴町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ
拜啓京都へ參候 所々をぶらつき候 枳穀邸とか申すものを見度候 句佛へ御紹介を願はれまじくや
頓首

三月三十一日

金

虚子 先生

五二八

明治四十年三月三十一日 午後四時―五時 京都市外下加茂村二十四番地狩野亭吉氏内より本郷區西片町十番地ろノ七號夏目氏内小宮豊隆へ
〔封筒の表に「東京本郷西片町十ノ七夏目金之助様方執事御中」とあり、裏の署名には「葎わけ人」とあり〕
京都は寒く候加茂の社は猶寒く候糺の森のなかに寐る人は夢迄寒く候
春寒く社頭に鶴を夢みけり

高野川鴨川共に積のみに候

布さらす積わたるや春の風

詩仙堂は妙な所に候。銀閣寺の砂などこなものに候。智恩院はよき所に候。砥園の公園は俗に候。清
水も俗に候

見る所は多く候

時は足らず候

便通は無之候

胃は痛み候

以上

三月三十一日

金

五二九

明治四十年四月三日 午後三時―四時 京都市外下加茂村二十四番地狩野亭吉氏内より東京府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ

四四九

〔はがき〕
御手紙拜見家の事御親切に御知らせ被下難有候序の折御間置願候毎日見物の爲め忙殺せられ長い手紙も
かけず是にて御免蒙り候

四月三日

五三〇

明治四十年四月十二日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏方實虎雄氏へ〔はがき〕
無事只今歸京滞在中は色々御世話に相成候來年あたりは二萬五千圓持つて迎ひの爲め參上可仕候 以上
十二日午

五三一

明治四十年四月十二日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區三田三丁目八番地七海方野間眞綱へ
貴君の手紙は京都にて拜見致候夫より直ちに岩田氏へ手紙にて聞き合せ候處野間は當分囑托にてくるや
又報給はどの位の希望なるやとの電文に接せし故本官にて千圓を望む旨返電せし處別紙の通返事參り候へ
ども至急を要する事にも無之故今日迄手元にとめ置候。今日午前歸京致し候につき不取敢右同封にて入御
覽候先は右用事かたぐ御報迄 草々頓首

四月十二日

夏目金之助

野間眞綱様

五三二

明治四十年四月十二日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下東鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
留守中に唐茄子ののへた澤山難有存候小生今十二日午前歸宅致候ちと御遊びに御出可被成候
京人形の一寸ほどのものを買ひ求め候

五三三

明治四十年四月十二日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稲田鶴巻町一番地坂元(當時白仁)三郎へ
拜啓朝日新聞入社に就ては色々御厚志を蒙り御心切の段深く奉鳴謝候
其後池邊と相談略調ひたる上去月二十八日京都表へまかり越し夫より大阪朝日の鳥居氏に面會の上遂に
大阪に赴き社主及び幹部の人々と大阪ホテルにて會食の後翌日再び京都へ立ちもどり昨十一日迄處々見物
の上今十二日歸京致候今回の事はもと大阪鳥居氏の發意に出で夫より東京にて大兄の奔走にて三分二以上
成就致候事と信じ居候御禮の爲めまかり出で可きの處そこは例の通りの無精にて手紙を以て代理と致し候
先は右御禮旁成行御報迄いづれ其うち拜眉の節萬縷可申述候 以上 〔うっし〕

四月十二日

夏目金之助

白仁三郎様

五三四

四五二

明治四十年四月十二日〔?〕 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村二十四番地狩野亭吉氏方野明敏治氏へ〔はがき〕
滞在中は色々御世話になりました何か御禮を致したいが謹嚴なる清教徒に對しては惡魔も施すべき方法
無之先づ端書丈にて御免蒙り候

四五二

五三五

明治四十年四月十四日 午後三時―四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村二十四番地狩野亭吉氏方菅虎雄氏へ
拜啓叡山の植物大に元氣よく此分にては夏御上京の節進呈仕る事容易ならんと存候中にも叡山萱は尤も
圓滿に生成の模様今でも五六圓の價格は有之べきか〔?〕
今日狩野に面會致し候處着京後癩疹にて臥床せる由珍らしき事に候。然し今はもはや全快の由に候。時
に小生出立の夜御地にて泥棒御光來の由妙な事と存候小生の立つた晩に泥棒に這入る杯とは餘程小生を見
縊びつたる泥棒と存候

先は御報まで 草々頓首

十四日

金之助

虎雄様

野明さんへよろしく御傳聲願上候。大阪朝日はもはや送付無之と存候へどもよし参り候とも御送に
不及候間左様御話し有之度候

五三六

明治四十年四月十九日 午後一時―二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ〔はがき〕
拜啓本牧の繪葉書難有拜見濱武は寫真をくれました小生は學校をやめたから是から落付たら少し閑が出
來るだらうと思ひますさうしたら御邪魔に出ます

五三七

明治四十年四月十九日 午後二時―三時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より豊町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
拜啓もしや西京より御歸りにやと存じ一書奉呈致し候近頃高等學校二年生にて美文をつくり之をホ
ト、ギスへ紹介してくれといふ人有之一應披見致候處中々面白く小生は感服致候乍毎度貴紙上を拜借致し
度と存候が如何にや來月分に間に合へば好都合と存候
京の都踊萬屋面白く拜見一力に於ける漱石は遂に出ぬ様に存じ候少々御恨みに存じ候漱石が大に婆さん
と若いのと小供のとあらゆる藝妓にもてた小説でも寫生文でも御書き被下度と存候近來の漱石は色の出來
ぬ男の様に世間から誤解被致居り大に残念に候 以上

四月十九日

金之助

虚子庵
座側

明治四十年四月二十四日 午後八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
小説の批評は君のよし僕は四月の小説を読んで居らんからは非は一向分らん。悪口の程度はあの位で澤山と思ふ。僕少々小説をよんで是から小説を作らんとする所也愈人工的インスピレーション製造に取りかかる。

花食まば鶯の糞も赤からん

明治四十年五月四日 午後零時—一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
七夕さまは「縁」よりもずつと傑作と思ふ 讀み直して驚ろいた。燈籠を以て着物を見に行く所は非常によい。末段はあれでよろし

明治四十年五月四日 午後零時—一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
七夕さまをよんで見ました、あれは大變な傑作です。原稿料を奮發なさい。先達てのは安すぎる。

明治四十年五月四日 午後零時—一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

花瀬川はものにならず傳四先生何を感じて此劣作をなせるか怪しむべし

明治四十年五月十二日 午後四時—五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ
先日は結構なものを難有頂戴致しました。拙著文學論一部御禮に其内差上ます。校正者の疎漏の爲め非常に誤植多き故訂正表を添へて上げます

明治四十年五月二十七日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大森八景坂上杉村氏内中村翁へ
今日は上野をぬけ淺草の妙な所へ散歩したらつい吉原のそばへでたから丁度吉原神社の祭禮を機として白晝廓内を逍遙して見たが娼妓に出逢ふ事頻りなり。いづれも人間の如き顔色なく悲酸の極なり。歸りがけにある引手茶屋の前に人が黒山の如く寄つて居るので覗いて見たら祭禮の爲め藝者がテコ前姿で立つて居た。夫が非常に美しくて人形かと思つて居たら、ふいと顔を上げたので矢張り生きて居ると氣がついた。夫から橋場の渡しを渡つて向島へ行つたら藤棚があつて其下の床几に毛布が敷いてあつたから、そこで上野から買つて行つた鯛飯を食つて晝寐をして、うちへ歸つたら君の長い手紙が來てゐた。

あの手紙をよんでいつぞや君が僕の文學論の序に同情してくれた事を思ひ出して成程と其意味が分つた。僕はあんな序をかく積りではなかつたがある事情で書く事に決心してしまつた。あれに對して同情してくれる君は恐らく僕よりも不愉快な境遇であつたかも知れない。君の手紙で君の家の事杯も判然して見るとかへつて僕の方から同情を寄せねばならんと思ふ。甚だ御氣の毒である。然し世の中にはまだく苦しい

連中が澤山あるだらうと思ふ。おれは男だと思ふと大抵な事は凌げるものであるのみならず、却つて困難が愉快になる。君杯もこれからが事を成す大事の時機である。僕の様に肝心の歳月をいも蟲の様にごろごろして過ごしては大變である。大に勇猛心を起して進まなければならぬ。杯と講釋を云ふのは野暮の至である。世の中は苦にする何でも苦になる苦にせぬと大概な事は平氣で居られる。又平氣でなくては二十世紀に生存は出来ん。君も平氣に大森から大學へ通つて居るがよからうと思ふ。

君が中川の序文を訂正したのを見た學生が最後の所を読んで痛快だと云ふた。中川は必ずしも傲慢不遜といふ男ではないのだらう。只日本文をかきつけないから、あんなものが出来たのだらう。僕は序に對しては君程苛酷な考は持つて居らん。 右御返事迄 匆々

五月二十六日夜

夏目金之助

中村 翁 様

將來君の一身上につき僕の出来る事ならば何でも相談になるから遠慮なく持つて來給へ。尤も僕の出来る範圍は極めて狭いものである。

五四四

明治四十年五月二十九日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より熊本市内坪井町百二十七番地奥太一郎氏へ

新緑の候愈御清適奉賀候其後は打絶頓と御無沙汰に打過候處忽然芳音に接し感謝此事に御座候御地學校改革後諸事復舊當分御無事結構の至に存候公退後は灌花栽培の御樂もある由閑適の餘事風流欣羨の至に候。

小生大學退職後小説家と相成り講義の必要もなく又高等學校の調の爲めセンチユリーの厄介になる事もなくなり心中大に愉快に候。只今の住居前後にいさゝかの庭園あり四時の眺めと申す程の事も無之候へども時々矚目遺悶の花樹も數種有之多少は得意に候。人生五十流轉のうちに殘喘を託し候身のいつ何時いづ方へ轉居致し候やも計りがたく昔の人は一戸を構へたるを一人前の證據の如く言ひ囃し候事あながちの弊にも有之間敷か。

日々書齋にて讀書冥想ひる寐も折々致し候。然し夫からくと雜用出來心事は存外等閑ならず候御察し可被下候。小兒も見る間に成長致候何となく後ろか〔ら〕追ひかけられる様に覺え候。早く何事かして死にたく候。一日が四十八時間になるか、腦が二通り出來るかいつれにか致し度候。去りながら半世の鴻爪全く是癡夢にひとしく此儘枯木と相成候とも苦しからずそこへ行くと頗るのん氣に候。

右偷寸閑近况御報迄に御座候 草々不一

五月二十九日

夏目金之助

奥 様

御令聞へよろしく御傳聲願上候

五四五

明治四十年五月二十九日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込西片町十番地反省社内藤田哲太郎氏へ

御手紙拜見實は昨日金尾が來て十八世紀文學出版の禮を云ふて瀧田君が野上さんと一所にやりたいと云

ひますがどうでせうといふから夫もよからうと云ふたら立派なものが出来ますかと聞いたから夫は受合へない。自分のものは自分がやるより外にうまく出来る筈がない。ことに二人や三人でやつては却つていけまいと云ふた。夫から可成は一人でやるがい、だらうと附加した。すると金尾の云ふには瀧田君はとても一人では出来ずまいと云ふた。僕答へて瀧田君は文章は達者だが専門が法律家だからあの講義のうちの一人では面倒かも知れないと答へた。それでは外に人はありませんかときいたから、人はいくらでもあるが、瀧田君が持つて歸つたものだから、まあ瀧田君に相談して見たらよからう、瀧田が進んでやるのが面倒ならば森田にでも頼んだらやつてくれるだらうと云ふた。話は夫れぎり分れた。金尾はもう出版する積りで廣告杯の事迄云ふて歸つた。

僕は君が十八世紀文學を書き直すに就てどの位の興味を有して居るか知らぬ。又それを家計上のたすけにする必要あつての事とも知らぬ。夫故以上の如き返事をして置いた。君と金尾の間の面白くない事も全く知らなかつた。金尾は其事に就て一言も云はなかつた。

右の譯である以上はたとひ金尾から十八世紀を出すにしても君がやらなくては少し君として面白くない事になるだらう。金尾からもし君の所へ相談に來たら夏目さんと相談した上返事をするに云つて歸し玉へ。右の出版に關しては君の都合のい、様又僕の都合のい、様に相談をするから出来るなら木曜に來てくれ玉へ尤もいそぐ事でないから君さへよければいつでもよろしい。金尾の方へは適當な人を見付ける迄は廣告其他見合せる様に云ふてやる。

金尾と君の關係は僕が口を出してよいかどうか分らない。君を無報酬で使ふ積でもないだらう。君が關係をつける時に月々の報酬をどの位ときめて、それを拂はぬなら不都合の至である。君の一分が立つ様に金尾にかうつけ加へてやる。「十八世紀文學は瀧田君との關係上から同君に對する

好意上許諾をしたものだから向後の談判は出版の手續に至る迄契約書を取り更す迄はすべて同君を経て御協議を経ゆく候」

委細は御面語の上虞美人草は廣告丈で一向要領を得ない人がくる用事が出事る。どんな虞美人草が出来る事やら思へばのんき至極のものなり 勿々不一

五月二十九日

夏目金之助

瀧田様

追白 手許に十圓ばかりあり。御不如意の由なれば失禮ながら用を辨せられ度し。御返濟は卒業して金がウナル程出来た時でよろし。御母上の御病氣御大事と存候。試験には是非共及第する程に勉強可被成候

五四六

明治四十年五月三十日 午後四時十五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏方菅虎雄氏へ (はがき) 文學論が出来たから約束により一部送る。校正者の不埒な爲め誤字誤植雲の如く雨の如く癩癩が起つて仕様がな。出来れば印刷した手部を庭へ積んで火をつけて焚いて仕舞いたい。

五四七

明治四十年五月三十一日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ 「文學論」正誤表の最後の頁に

認めあり

先日は御出のよし失禮致候。御約束の文學論差上候。小包にて御落手被下度候。是は正誤表に候。古今獨歩の誤植多き書物として珍本として後世に残る事受合なれば御秘藏被下度候

五月三十一日

夏目金之助

久内清孝様

五四八

明治四十年六月四日 午後五時—六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (はがき)

廣告

今日から愈真美人草の製造にとりかゝる。何だかい、加減な事をかいて行くと面白い。

僕の顔を高等官一等とは恐れ入つた。どうか猫をかく様な顔付に生れたいものだ。金子堅太郎君は親任官であつたかな、君。金堅君を下る事一等の顔になつちまつた。ほめられたつて感謝は出来ない。

五四九

明治四十年六月四日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金臺町一丁目八十一番地野間眞綱へ (はがき)

拜啓愈御結婚の由恭賀候。實は五六日前結婚をするものがきて其あとへすぐ君の手紙が來たので間違へて名宛を野上豊一郎として御祝狀を出した。失敬々々。小生今日より真美人草の製造にとりかゝる當分行

かれぬ其うち行く

五五〇

明治四十年六月十七日 午後八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區芝町柳原邸内松根豊次郎へ

御手紙拜見長い手紙をかく餘裕がない毎日真美人草の事ばかり考へてゐる今日社から原稿をとりにくる九十七枚わたした。

折角苦心してかいた所もあとから読み直すと何だこんなものかと思ふ事多し。つまらない。當分は君にも逢へない。リースの子が僕の作物をよんでくれるのは難有い。僕の妻なんか天で僕の作には手をつけない。どうも婦人には苦手の様だ。紫影先生原稿出版の義御断はりの趣承知不得已事と思ふ其旨先方へ通知致すべし。赤ん坊は中々大きい由無暗に大小兒を生んで國家に貢獻する所もなく心細い事なり

先は用事のみ 草々

六月十七日夕

金

豊次郎様

五五一

明治四十年六月二十一日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

御手紙拜見

四六一

君はウーンと云つて還つて呉れたからいゝが大概はうんとも何とも云はず這入つて来る。

虞美人草が出来る迄謝絶と思ふたが中々前途遠いつかき了るか分らない。かき上げた時は嘸愉快だらう。今では小説が本業だからいつ迄かゝつても時間は惜しくない。例の通り急行列車に乗る必要がなくなつた代りに書物をよむひまがなくなるだらうと思ふ。

七夕さまへ感服して呉れたのはうれしい。瀧田樗陰書を三重吉に寄せて曰く夏目先生があんなものをほめるに至つては聊か先生の審美眼を疑はざるを得ずと。樗陰はあれを淺薄といふさうだ。樗陰は二三日中君の所へ來訪の筈よく説諭して呉れ玉へ。あれは北國で仙臺鮪ばかり食つてゐるたからそんな事をいふのだらうと思ふ

生田先生は正に二十圓を拉し去る。言譯に曰く飲んだんではありませんと。

其他の諸君子を見ざる事久し。豊隆時々臺所に來る。明日歸るさうなり。昨日中村翁來る。寫真をくれといつて持つて行く。第二義の顔を方々へ進呈して甚だ不平なり。君雲右衛門なるものを聴いたかい。

六月二十一日

金

米松先生

五五二

明治四十年六月二十一日 午後(以下不明) 本郷區駒込西片町七號より本郷區駒込千駄木町二百三十六番地幸川方鈴木三重吉へ

本日虞美人草休業。肝癢が起ると妻君と下女の頭を正宗の名刀でスバリと斬つてやり度い。然し僕が切腹をしなければならぬからまづ我慢するさうすると胃がわるくなつて便秘して不愉快でたまらない僕の

妻は何だが人間の様な心持がしない。

中學世界での評なんかはどうでもよし知人を雇ふて方々の雑誌に稱贊の端書を送つたらよからうと思ふ

六月二十一日

金

三重吉様

五五三

明治四十年六月二十四日 午後六時一七時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ

拜啓一寸御願が出来た又面倒な例の文學論の事だが。あの中に肯定と否定の間違が四五ヶ所あつて普通の誤植とは思へぬ程念の入つたものであるにより。大倉を以て秀英舎へ掛合つた所。秀英舎は責任なしと威張つて居る由。僕よつて之を朝日新聞紙上に於て筆誅せんと欲するに就ては例の虞美人草崇りをなして筆を執る事面倒なり。どうか君僕の代りに書いてくれ玉へ。間違の箇所は僕の所にわかつてゐるから序でに來て見て呉れ給へ 御願頓首

二十四日

金

三重吉様

五五四

明治四十年六月二十六日 午後十一時一十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ(はがき)

今日澁川先生がわざわざきて君の投書を歓迎すると云ふて來た。然し都合によると六號にする由。但し悔るべからざる六號にする由。僕は何とも云はなかつた。然し出してやつてくれ給へ

四六四

五五五

明治四十年六月二十六日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
御手紙拜見毎日かいたりか、なかつたり。人が來たりする。面會謝絶にも拘らず香氣なり。虞美人草をよんでくれて難有い。八重子さんにもよろしく。八重子さんにはオーステンは面白くないかも知れない

五五六

明治四十年六月二十七日 午前八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
君此つぎ國民へ短かいものをかくなら其代りにうちの新聞へ書いてくれ玉へ。
梅雨はけしく降つて中々侘びしい。小説をやめて本がよみたい

五五七

明治四十年六月二十七日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ
御手紙拜見君の事をほめる手紙を谷山舎監にやる傳四觀は論文としてはひまが入るけれども手紙ならぢき出来る御安い用なり一兩日うちに谷山氏へ出すつもりなり先生の名〔は〕初七郎かね一寸伺ひ度名前が間違ふと折角の傳四觀も信用がなくなる

六月二十七日

金

傳 四 先 生

五五八

明治四十年六月二十八日 午前八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ
拜啓朝日新聞の澁川玄耳氏より別紙の如き書面参り候につき可然御回答を與へられ度候。(京橋區瀧山町四番地朝日新聞内澁川柳次郎宛) 本宅ならば麴町區隼町四番地
右用事迄 匆々

六月二十七日

金 之 助

三 重 吉 様

五五九

明治四十年六月二十九日 午前八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田寅彦へ〔はがき〕
晩は大抵散歩夫からは日によると休業。尤も日中でも頭と相談の上時々休業仕候。段々暑くなると小説をかくのが厭になる

六月二十九日

先達ては奥さんがわざわざ難有うつい御禮を忘れて居た

四六五

明治四十年七月二日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ

先日は失敬

一寸行きたいが愚圖々々して居る。儲うちの新聞で醫學上の事を簡易に書く人を周旋してくれといふが君の弟に聞いて呉れぬか。是は社員といふ譯ではない投書をしてくれ、ばよいのである。原稿料は出すさうである

七月二日

金

虎 雄 様

明治四十年七月三日 午前十時—十一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

昨日君の長信が来た久々で國へ歸つて大持ての事羨望々々途上の繪端書は一々落手多謝。今頃は九州は酷暑い事だらうと思ふ西片町も中々あつくなつた。蚊帳をつる。大きな蚊帳で一人で寐るのは勿體ない。來客謝絶にも不關時々御來臨。白川、三重吉、諸先生健在、朝日へ何かかくなら書かぬか。

御母さんと御婆さんの御機嫌をとつて大事にせんとわるい。後世が大事だ。冥罰がおそろしい。僕漫然たり。白川天笠牡丹なるものをくれる。文學論二版御蔭にて出來深謝。十八世紀は樗陰森田兩君に依頼する事となれり。坪内先生來訪早稻田へこいとの相談である。評判によれば慶應義塾へも行くさうだ。近々

一萬圓で家を建てるさうだ。小供がシツチかいて困る。中央公論を約束したがまだ見ない。公告には筑水君の「文學論に因みて」が出て居ない。或は送らんで済むかも知れぬ。竹風君の評は新小説に出た。是はそちらで買へるだらうから送らない。小説は中々進行しない。暑いと中止したくなる。君の手紙は色女が色男へよこす様だ。見ともない。男はあんな愚な事で二十行も三十行もつづすものぢやない。

久しく靴屋の娘を見ず。あれはめかけの由。是から又虞美人草をかく。

七月三日朝九時

金

豊 隆 様

明治四十年七月五日 午後二時—三時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ

駒込上富士前町五番地（王子通岩崎別荘向横町右入）に貸家あり。廣瀬といふ人の所有僕に貸したいと云ふ序の時散歩でもしたら見て呉れ給へ。家の向を知らず圖面は見たり

明治四十年七月八日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

枇杷到着難有候。何か上げやうと思ふが何がいか分らんうちに君が東京へ歸るだらう。面會謝絶でも毎日面會してゐる。昨夜藤戸を謠つた。中々うまい。謠を再興しやうかと思ふ

五六四

明治四十年七月八日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
近頃の讀賣に君の事がよく出るね。御用心。虞美人草の御批評拜受。善くても悪くても本當に讀んでくれれば結構。僕ハウチノモノガ讀マヌウチニ切拔帳へ張込ンデシマウ。ワカラナイ人ニ讀ンデモラウノガイヤダカラデアル

五六五

明治四十年七月八日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金臺町二丁目八十一番地野間眞綱へ
拜啓高松中學の件承知致候昨今の場合或は御赴任可然やとも存候然し愈とならねば地方行は御見合せを希望す。明治學院五〇では到底暮しがたかるべくことに妻帯の上は子供も豫算に這入る事故何とか工夫を要し候小生も種々考へては居れど別に名案も無之自分で世話も出来ぬものを無理に東京に引きとむるも都合の至故其邊は是非なきかと存候新聞の方も聞き合せる事は容易なれどあの事業は少々明快なる頭腦と敏捷なる手腕を要し且つ外國電報杯は夜十二時過迄は社に残らねばならず而して必竟するに第二流の新聞記者たるを免がれず考へ物に候。君に今少し霸氣があり野心があれば結構夫でなくても今少し活氣があり精根があればよろしからんも君の様にてはあとで困るかも知れず。然しよく考へてやつて見る氣なら紹介は喜んでする積故遠慮なく申來らるべく候外國電報主任弓削田精一といふ人は正直にて一本氣の至極よき人間に候かゝる人に就て電報の修業をするは仕合せとも存候朝日には妙な人間居らず池邊を始め皆立派な男と信ず。小生は二名ばかり周旋したり。白仁も這入る。然し白仁はそんなに月給を餘計にもらうまじ中

村翁も入社の手筈も白仁と同斷なるべしもし不時の入用杯にて差當り困難の時は少しの都合はつく積りなり遠慮なく申來らるべく候先は御返事迄 匆々頓首

七月七日

金

眞綱様

五六六

明治四十年七月十一日 午後十二時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ〔はがき〕
其後動靜如何當地存外涼氣にて例年より凌ぎよし小説脱稿次第北の方へ遊びに行かうかと思ふが。いつ脱稿する事やら分らず。ビハは小供が喜んでたべた。三重吉が時々くる

五六七

明治四十年七月十一日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
君のくれた天笠牡丹が今日の雨で落ちて仕舞つた何だか淋しくなつた。今度の日曜には人がくるかも知れぬ君もひまなら來給へ

五六八

明治四十年七月十二日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田鶴巻町一番地坂元(當時白仁)三郎へ
拜啓京都より御歸りの由毎日出版社御精勤の事と存候。小生一昨十日總務局より臨時賞與として五十圓賞

へり。定めて入社當時に話しのあつた益暮の賞與の意味なるべし。夫ならば大分話が違ふ。始め君の周旋の時は一年二期に給料の二ヶ月分宛位といふ事であつた。其後愈となつたら弓削田氏より君への返事に言ふ所は先づ一ヶ月位との事であつた。僕が池邊氏にあつて最低額は一ヶ月分と定めて差し支なきやと質したる時氏は然りと答へられた。

僕は賞與がなくとも其日には困らぬ。又實際アテにもする程の自覺もない。然し貰つて見るといやである。金の多少でいやといふより池邊、弓削田兩君の如き君子人が當初の條件を守られぬといふ事がいやである。

入社の日が浅いから今年は出さぬといふなら辯解になる。同上の理由で今年は少ないと云ふなら尤である。

以上の理由は誰からもきかぬ。只一今で、しか解釋すべきものか。

受取つた五十圓は難有く頂戴する。返却は仕らぬ。不足だからもつと餘計くれとも云はぬ。只事實は條件を無視してしかも一言の辯解に伴ふて居らんといふ事を、入社の際周旋をしてくれた君に参考の爲め申し送る。

池邊弓削田兩氏は君子人なれば此邊の消息は知らぬ事なるべし。知つても當初の事は忘れたるなるべし。いづれにても故意ならぬ所作ならば介意するに及ばず。序での節兩君の存意を確められたし。

小生が朝日に對してなし得る事は微少なり五十圓にも當らず。只それは入社の際とは別問題なり。是は誤解なきを祈る。

虞美人草はまだ片付かず。いつ果つべしとも見えざりけり 以上
七月十二日

夏目金之助

白仁三郎様

五六九

明治四十年七月十二日 午前十時—十一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ 「はがき」
あの謎は謎として解かない方が面白い。凡ての謎は解くと愛想が盡きるものである。神祕をやさしい言葉で言ふと上品トナル

五七〇

明治四十年七月十二日 使ひ持參 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込西片町十番地大塚福緒氏へ
拜啓 一寸出る筈ですが出ると長くなつて御邪魔になりますから手紙で用を辨じます
あなたの萬朝へ御書きになつたものを岡田さんの方が先へ出るとすればあまる事だらうと思ひまして朝日の方へ話しをしたらもし五十回以上百回位迄のものなら頂戴は出来まいかと申して來ました是は虞美人草のあとへ四迷先生の短かいものを出して其次に出す計畫の由です
萬朝の方が御都合がつけばこちらへ廻して下さいませんか 以上
七月十二日

大塚御奥様

金之助

四七二

五七一

明治四十年七月十三日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田鶴巻町一番地坂元(當時白仁)三郎へ
拜啓御多忙の處をわざわざ池邊氏を御尋ね御返事を御聞き被下て難有候
御申越の理由詳細然承致候

六ヶ月以内のものが貰はぬが原則ならば小生の貰ふたのが異數なるべし。深く池邊氏の御注意を謝す。
池邊君に御面會の節は小生が御尤もと納得したる上同君の御好意を感謝しつゝある旨を傳へられたし
ことに君が此件につき御奔走の勞を謝す。

醫者に御通ひ中のよし御病氣なるや大事にせられたし 以上

七月十四日

夏目金之助

白仁三郎様

五七二

明治四十年七月十六日 午前八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地池内氏内高濱清氏へ

啓 松山へ御歸りの事は新聞で見ました。一昨日東洋城からも聞きました。私が弓をひいた塚がまだあ
るのを聞いて今昔の感に堪へん。何だかもう一遍行きたい氣がする。道後の温泉へも這入たい。あなたと

一所に松山で遊んでゐたら嘸呑氣な事と思ひます

大内旅館についての多評は好景氣の様也三重吉は大變ほめてゐました。寅彦も面白いと云ひました。そ
こへ東洋城が来て三人三様の解釋をして議論をしてゐました。小生はよく御其議論をきかなかつた。小生
の思ふ所は。大内旅館はあなたが今迄かいたものゝうちで別機軸だと思ひます。そこがあなたには一變化
だらうと存じます。即ちあなたの作が普通の小説に近くなつたと云ふ意味と。夫から普通の小説として見
ると大内旅館がある點に於て獨特の見地(作者側)がある様に見える事でありませぬ。詳しい事はもう一遍
讀まねば何とも云へませぬ。とにかく色々な生面を持つて居るといふ事はそれ自身に能力であります。御
奮勵を祈ります。

五六日前一寸何を考へたか謠をやりました。一昨日東洋城が來た時は滅茶々に四五番謠ひました。こ
とによつたら謠を再興しやうと思ひます。いゝ先生はないでせうか。人物のいゝ先生か。藝のいゝ先生か。
どつちでも我慢する。兩者揃へば奮發する。虞美人草はいやになつた。早く女を殺して仕舞たい。熱くて
うるさくつて馬鹿氣てゐる。是インスピレーションの言なり。 以上

七月十七日

金

虚先生

五七三

明治四十年七月十六日 午前八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町百二十番地行徳俊則氏へ (はがき)

啓朝日新聞件先方へ通知致候處主任澁川柳次郎氏(麴町區隼町四)御面會申度由につき乍御面倒御出向

四七三

願度候。毎朝八時迄ならいつでも在宅とあり

五七四

明治四十年七月十九日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より相模國鎌倉長谷大塚楠緒氏へ

拜啓金尾文淵堂であなたの萬朝に出る小説を頂いて本にしたいと申ます夫で此男があなた〔に〕紹介してくれと申ます御迷惑でなければ一寸逢つてやつて下さい 以上

七月十九日

金之助

大塚楠緒子様

五七五

明治四十年七月十九日 午後八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

手紙が来たから一寸返事をあける。東京は雨で毎日々々鬱陶しい其代り頗る涼しくて凌ぎいゝ。大井川が切れて瀛車が通じない郵便が後れる事と思ふ。叡山で講話會をやるから出てくれと云ふて来た。多分出ない事。ひまが出来たら北の方へ行く三重吉も行くと云ふ

虞美人草は毎日かいてゐる。藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。徳義心が缺乏した女である。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。然し助かれれば猶々藤尾なるものは駄目な人間になる。最後に哲學をつける。此哲學は一つのセオリーである。僕は此セオリーを説明する爲めに全篇をかいてゐるのである。だから決して

あんな女をいゝと思つちやいけない。小夜子といふ女の方がいくら可憐だか分りやしない。——虞美人草は是で御仕舞。

金子筑水の議論は念の入つたものではない。昨日上田柳村君が来て文學論について云々して去つた。大塚は眞面目に讀んで呉れて批評をしにやつて来た。博覽會へ行つて Watch シュートへ乗らうと思ふがまだ乗らない。伏見の宮さまが英國で大歓迎だと云ふ話である。僕は英國が大嫌ひあんな不心得な國民は世界にない。英語でめしを食つてゐるうちは残念でたまらなかつたが昨今の職業は漸く英語を離れて晴々した。所が早稻田と慶應義塾で教師になれといふて来た。食へなければ狗にでもなる。英語を教へるのはワシと鳴く位な程度であるからいざとなればやる積であるが、虞美人草の命があるうちはまづ御免蒙る。朝鮮の玉様が讓位になつた。日本から云へばこんな目出度事はない。もつと強硬にやつてもいゝ所である。然し朝鮮の玉様は非常に氣の毒なものだ。世の中に朝鮮の玉様に同情してゐるものは僕ばかりだらう。あれで朝鮮が滅亡する端緒を開いては祖先へ申譯がない。實に氣の毒だ。朝日新聞の湯島近邊といふのを讀んで御覽。ああ云ふ小説もかいて好いと云ふ御許しが出ると小説家の氣も大きくなる。僕もまだ二三十年は英語を教へないでどうかかかか飯が食へさうだ。

惡縁で英語を習ひ出したが是から可成英語を儉約して獨乙と佛語にしたいと思ふ。先づ獨乙を君に教へりたい。夏休み以後は少しやつてくれ玉へ。 以上

七月十九日

金

豊隆様

明治四十年七月二十日 午前十時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金臺町二丁目八十一番地野間眞綱へ

昨夜散歩から歸ると君の名刺があつて三省堂の事も書いてあつた。毎日あの方へ參る由夫で學校以外の収入も多少はあるとの事安心致し候 四國の方は御斷りの趣是亦承知致候字引事業はいつ頃迄つゞくものにや字引が濟んでも似た様なものが出来さうに思ふが如何

毎日雨にて鬱陶しい然し仕事をするには涼しくて却つてよろし。皆川には其後逢はず。小説はまだ書き了らす氣の長い事驚ろくべし。胃はよろしからず。旅行が致したし。昨日から大塚さんの小説が萬朝に出るから見てゐる。朝日に湯島近邊といふのがある。是もよんでゐるたが二三行よむと何がかいてあるかすぐ分る。簡便でよい小説である。十八世紀文學の講義を金尾で出したいといふから承知した。森田、瀧田兩君が書き直してくれる筈。此年は無暗に書物ばかりこしらへる。而して今日の「國民」にある如く五割の印税をとつたら僕も今頃は一萬圓のうち位買へるだらうに。 以上

七月二十日

金

眞綱様

明治四十年七月二十日 午前十時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ

君は何を思つたか深夜頓首して手紙をよこした。さうして内容は僕に會つた時と別に變つた事が書いて

ない。妙だよ。豊隆子が長い手紙をよこした。米を賣つて仕舞へといつて婆さんに叱られたとある。其癖婆さんから相談を受けたのださうだ。是は愈妙だよ。小説は中々氣が長いから僕も困る君も困る。八月になつたら早速出掛給へ。僕もし出来得べくんば君のゐる所へ廻つて行く。然らずんば何でもどつかで待ち合せる。然らずんば僕がどうしても東京を出られなくなつて君は一つ所にぶら下がる。是は大に氣の毒だが、今日の形勢を案ずるに或は西片町を去る事が出来ぬかも知れない。何しろ急行小説はやめたんだからだらく眞美人でいつ迄引張られるか自分にも見當がつかない。もしかうなると違約になる甚だ御氣の毒だ。さうなつたら二三日でもいいから君と前約履行のかたでどつかで遊ばう。僕近來ズルクなつて(廣島の意味)困る。何でも急がぬ方針だ。而して方針も何もない。生きてゐて、食つてゐて、而して「て」漫然たり 以上

七月二十日

金

三重吉様

明治四十年七月二十一日 午後二時—三時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ

漱石山房といふ印が俗でいやになつたひまが出来たら一人でもつとうまい奴を刻つてやる。昨夜は失敬

明治四十年七月二十一日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下葉鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ

〔はがき〕

今日の讀賣に正當防禦と題して早稻田の人が君を攻撃してゐる見玉へ。全體君は何をかけたのか。何をかいてもあんな攻撃をするのは早稻田の若い人ダ

五八〇

明治四十年七月二十二日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ
拜啓人の攻撃を攻撃しかへすときは面白半分にかからふ時の事なり。ひまが惜しければやるべからず。堂々たる攻撃は堂々たる辯駁を要す。是は惜しい時間を割いてやる事なり。
僕未だ新聞雜誌に出たものに對して辯解の勞をとりし事なし。そんな事をするひまに次の作物か論文をかく方が遙かに有益也。

あんなものに眞面目に相手になる位なら始からあゝ云ふ風な評論をかゝれぬがよろしからうと思ふ。何かいふ事があらば駁論とせず。次の作物か論文のうちに充分君の主張を述べらるべし。夫が自分は自由の行動をとつてしかもくだらぬ世評に頓着して居らぬ事を事實に證明する所以と思ふ。君は文を好む文を好めば將來かゝる場合多かるべし。皆この例にならつて決せられん事を希望す。尤も暑中休暇故ひまがあるならいたづらにいくらでも喧嘩をなさるのも一興と思ふ。しかし喧嘩をし出すと、相手次第で暑中休暇後迄もやる積でないと行けません。途中でやめちやいけな。まあ愚になるね。以上

七月二十一日

金

豊一郎様

五八一

明治四十年七月二十二日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區茅町柳原邸内松根豊次郎へ〔はがき〕
今日もひるから來客で多忙鈴木は明日から房洲へ行く由淋しくなる。何か謠を稽古したくなつた。
此處發句をかく筈にてあげたが出来ない

五八二

明治四十年七月二十三日 午後八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金壹町一丁目八十一番地野間眞綱へ
暑いのに牛込迄通ふのは難義だ杯といふのは不都合だ口を糊するに足を棒にして腦を空にするのは二十世紀の常である。不平杯をいふより二十世紀を呪咀する方がよい。
夫婦は親しきを以て原則とし親しからざるを以て常態とす。君の夫婦が親しけ「れ」ば原則に叶ふ親しからざれば常態に合すいづれにしても外聞はわるい事にあらず
君の事を心配したからといふて感涙杯を出すべからず僕は無暗に感涙杯を流すものを嫌ふ。感涙杯を云云するは新聞屋が〇〇の徳を讃し奉る時に用ひるべき言語なり
僕は君に世話がして上げたたくても無能力である。金は時々人が取りに来る。有るものは人に借すが僕の家^原の通則である。遠慮には及ばず。結婚の費用を皆川の様な貧乏人に借りるのは不都合である。
細君は始めが大事也。氣をつけて御し玉へ。女程いやなものはない。
どこかへ遊びに行きたいが虞美人草をかいいて仕舞ふ迄は動き度ない。
野村には一向逢はない。毎日客がくる。

君は氣が弱くていけない。一所になつて泣けば際限のない男である。ちとしつかりしなければ駄目だよ。
頓首

七月二十三日

金

眞 綱 様

五八三

明治四十年七月二十六日 午後八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若大若館鈴木三重吉へ

犬若館とかいふ所に御神輿を据ゑられたるよし。是は何でも僕が通つた所らしい。ことによると昔し宿つた所かも知れぬ岩のなかに彫り込んだ宿屋杯は頗る面白い

東京は甚だ涼しい。土用でも土用の感じが無い東洋城が来てとまつて一日ごろついで謠を三四番歌つて歸つて行つた。其他色々な人がくる。十八世紀文學は金尾をやめて春陽堂にした。昨日服部の印税未納をしらべたら八百圓程ある。僕も中々寛大な著作家たるに驚ろいた。服部も通知を受けて驚いたらう。勿驚印税八百圓といつてすぐ持つてくれればえらい。あれは版權を大倉へ譲り渡してしまふ方が得策だ。僕も便利だ。

虞美人草はだら／＼小説七顛八倒虞美人草と名づけて未だ執筆中

あまり潮風に吹かれると女が惚れなくなるにつきいゝかけんに御養生可然候 以上

七月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉様

五八四

明治四十年七月二十九日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

暑中如何御暮し被成候事〔か〕と存候ひしに不相變御健勝の由大慶の至に存候下つて小生如例碌々乍憚御休神願上候。虞美人草御讀被下候よし難有存候小生もあれが爲め今年夏も依然多忙實はやく切り上げて遊びにでも参り度と存候へども因果にて如何とも致しがたく弱り切り候。小説もかうだら／＼では讀者より著作者の方が先へ参り候御憐笑可被下候いづれ其内拜眉萬々先は御挨拶迄 勿々

七月二十九日

夏目金之助

大 谷 兄

文學論も御求め被下候由あの一版は大變な誤植に候もし御入用ならば正誤表一部可差上候

五八五

明治四十年七月三十日 午前十時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若大若館鈴木三重吉へ

啓日々御水浴結構に候。甲野さんの日記は毫も不自然ならず。甲野さんの日記は京都の宿屋の所に出てゐる。つまり其つゞきである。しかしてかゝる哲學者のかいた日記をほつ／＼引き合ニ出スノハアル意味ニ於テ甲野サンヲ貫ヌカシムル方便デアル。實ハ此ヤリ口ハ僕ノ創體デハナイ英ノメレヂスの作に屢此手

ガアル。僕ハ之ヲ踏襲シタト評サレテモ仕方ガナイ。

「オヤ御這入」と云ふ句はチツトモ可笑シクハナイ。アレヲ可笑シガルノハ分ラナイ。廣イウチデ銘々部屋ヲ持ツテゐる。母ノ部屋へ娘ガ行く。オヤ御這入ヨリ云ヒ様ガナイ。而シテ尤も母ラシイ言葉デアル此言葉デ母ラシイ所ガ直チニ出ル。君ハ廣島ダカラサウ云フ意味ニ聽キ慣レテゐナイノダラウ。アレハ實ハ最上等ノ句ダヨ。

ワルイ所ヲ摘發スルナラバモツト此方ガ閉口スル所ガ澤山アルノニ、アスコガ目にツクノハ可笑イ。此小説ハノンキ小説トモ、ダラ／＼小説トモ、又ハ七顛八倒小説トモ稱シテ容易ニ片ヅク景色ナシ。然シ毎日カク。

二三日非常ニアツクナツタ。妻君ガ六十圓デ紋付ガコシラヘタイト云フ。君ノ前ダガソシモノハ要ラナイ様ダネ。妻君ニシテ六十圓ノ紋付ヲコシラヘルナラ。僕モ薩摩上布ノ上等ヲ買ツテ向チ張ル積デアアル中川カラアヅカツテ居ル百圓ハ利子ノ勘定ヤ何カ面倒デイケナイ。アレハ自分ノ名デ預ケ替タラヨカラウ。歸ツタラ君カラ話シテクレ玉ヘ。以上

七月三十日

金

三重 吉 様

且アノ日記ハ母子ノ間柄ヲ裏面カラアラハス故甲野サンノ日記云々トカク方ガ切實デアアルノデアアル
(此所異軒口調ナリ)

五八六

明治四十年七月末「？」 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より大阪市南區天王寺上の町三千六百六十九番地武定鈔七氏へ 「はがき」

貴句拜見虞美人草御よみ被下候よしダラ／＼になりて申譯なく候

のうぜんの花を數へて幾日影

五八七

明治四十年八月一日 午後二時—三時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區伊皿子町三十五番地皆川正禧へ 「はがき」

岩代國耶麻郡鹽川町陸軍御用九重本舗栗村千代吉君方製造衛生滋養輕便珍菓九重(會津品評會銅牌受領)
以上一箱本日午前十時文學士北郷二郎君ヨリ落手多謝々々

五八八

明治四十年八月二日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金堂町一丁目八十一番地野間真綱へ

拜啓 爲替で十圓あける新婚の御祝に何か買つて上げやうと思ふが二十世紀で金の方が便利だらうと思ふから爲替にした。

暑いのに三省堂迄行くのは苦しからう然し世の中にはまだ苦しい事をしてゐるものも澤山ゐる。馬鹿で金を澤山とる奴はどうせ好い事はない。近いうちに祟があるものだ。君安心して業に就て可なり。僕は毎日小説を四五枚かく其外に何もしない。

先達皆川と三浦白水君が來た。其他來客中々多し。小説さへ濟めば快談せんとと思ふが今は澁談で氣の毒

である。

君には毎度御菓子やら何やらもらつてゐる。些少の爲替では引き足らん。決して禮を云ふては可けない。此間印税がとれたから上げる許だ。上げなくつてもどうせ使つて仕舞ふ金だ。さう思つてうまいものでも兩君で食ひ玉へ

七月末日

金

野間眞綱様

五八九

明治四十年八月二日 夜 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

大學も駿河臺も満員の由自宅にては嘸御不便と思ふが今朝早く尼子氏を訪問もう一遍相談あつては如何。他の病院を紹介してもらうか。或は適當なる醫師を周旋してもらうか也。もし尼子氏擔任すると云はゞ夫にてもよかるべし。あの人は信用してよい人故自分が出来なければ駄目といふべし。故に一外の病院を又は外の人を周旋してくれと云ふべし。それと同時に先生がやつて下さつても私方はよろしと云ふべし。夫で向の返事を待つべし 以上

八月二日夜

金

森田米松様

右注意迄

五九〇

明治四十年八月三日 午後八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

手紙が来た。また何だか長々と女性的文字がかいてあるには恐縮したね。今日高須賀淳平が来て小宮さんにはことによると戀病をすと云つた。氣を付けないといけない。漱石病なら心配はないが御絹病などになると甚だ痛心の至だ。僕の妻が赤門前の大道易者に僕の八卦を見てもらつたら女難があると云つたさうだ。しかも逃れられない女難ださうだ。早くくればいと思つて日夜渴望してゐる。大旱の雲霓を望むが如し。

あつてだらくしてゐる。門司迄芝居を見に行く方はない。東京へ歸つてゆつくり見るものだ。田舎へ行つたら芝居氣をすて、田舎ものになるがい。此間印税が這入つた君が居れば何か奢つてやらうと思ふが幸不在だからやめた。文學論は三版になつた。但し五百部。虞美人草については世評はきかず。みんなが六づかしいと云ふ。凡てわからんものどもはだまつてゐれば好いと思ふ。それが普通の人間である。餘計な事をいふ奴は朝鮮國王の徒だ。況んや漱石先生に如何程の自信あるかを知らずして妄りに褒貶上下して先生の心を動かさんとするをや。君の前だが先生はしかく安價なる先生ならず。しかく安價なる作物を作りつゝあらざるなりか。

三重吉は洞穴生活の由何をして居る事やら。歸つたら屹度漁師の神さんに惚れられたとか。アマに見染められたとか云ふに違ない。

森田ノ赤ン坊が死ニカ、ル。一三日何にもしない由。

野上が一兩日前来た。

エイ子さんのシツ追々本復す。姉妹悉くシツカキ性なるには愛想がつきた。エイ子さんが一番温良でユツタリしてゐるて好い子だ。赤ン坊は豪傑の相がある。又寫真をとらうと思ふ。 頓首

八月三日

金

豊隆様

五九一

明治四十年八月四日 午後六時—七時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若大若館鈴木三重吉へ 「はがき」

小宮先生ニ舞子ガ懸想シタ由扇デ以テ親切に煽いでくれたと云ふ。

一本の禪と風流いづれぞや

五九二

明治四十年八月四日 午後六時—七時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區笈町柳原邸内松根豊次郎へ 「はがき」

癖三醉君に田島金次郎といふ人の住所と経歴を聞いて置いて一寸知らしてくれ玉へ。今度逢ふ時でよろしい

しい

五九三

明治四十年八月四日 (時間不明駒込局消印) 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地池内氏内高濑清氏へ

先日の御手紙拜見本月は一應御歸京の由。其節は御面會致し度と存候

大鼓を打たれる由鼓を打つ人と鼓の音をきくと頗る人意を強うします。廿世紀にあんな閑日月があると思ふからです。僕も御指定の教師に従つて謠の稽古を致し大に時勢を後ろへ進歩致したい。近頃自然派とかいふて無暗に前へ出たがるから小生は不自然派でもおつ立て、後ろの方へ參らうかと思ひます。自然だらうが、不自然だらうが只主義を標榜する丈で主義相應の作物を出して見せなくつちあ仕様がなないぢやありませんか。圍爐裏のはたで一生涯懸念に水鍊の藝術を説いてゐる様なものだ。——以上はどうでもいゝ事です。是からが用になります。西村濤蔭と云ふ人が糸櫻と云ふ長篇小説を持つて來てホト、ギスへ出したいから八月十日頃迄に讀んでくれと云ひました所が心よく受合つた事は受合つたが、例の眞美人草の爲めによむひまがない。そこで濤蔭先生へ其旨を云ふてやつて虚子へ送るか、又は虚子が歸る迄預つて置くかと聞き合せてゐます。然し君の方の御都合もある事だらうから此事實丈を一寸御通知して置きます。

藤尾と御糸の會話をほめて下さつて難有う存じます。まだ褒められる所が段々出てくる事を希望して毎執筆します。 頓首

八月四日

金

虚子様

五九四

明治四十年八月五日 午後五時—六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若大若館鈴木三重吉へ

日々暑い事だ。諸旅行の儀は延引又延行^原今月の半頃ならばと思つてゐるが一方では段々考へて見ると例の小説がどうも百回以上になりさうだ。短かく切り上げるのは容易だが自然に背く調子がとれなくなる。如何に漱石が威張つても自然の法則に背く譯には參らん。従つて自然がソレ自身をコンシユームして結末がつく迄は書かなければならない。するとことによると君と同伴行脚の榮を辱ふする譯に參らんかも知れぬ。旅行も大事だが虞美人草は胃病よりも大事だから其邊はどうか御勘辨を願ひたい。トルストイ。イブセン。ツルゲチフ。杯は怖い事更になけれど只自然の法則は怖い。もし自然の法則に背けば虞美人草は成立せず。従つて誰がどう云つてもゾラが自然派でフローベルが何とか派でも其他の人が何とか或とか云つてもどうしても自然の命令に従つて虞美人草をかいで仕舞はねばならぬ萬一八月下旬に自然から御許が出たら早速端書をあける。夫迄は吉原の美人でも見てインスピレーションを起して居たまへ。もし自然の進行が長引けば此年一杯でも原稿紙に向つてゐなければならぬ。嗚呼苦しいかな。

八月五日

金

三重 吉様

五九五

明治四十年八月五日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ 「はがき」

夏目漱石先生著

吾輩ハ猫デアル

松林伯知述

八月五日 夜

本郷日蔭町ヲ通ツタラコンナ看板ガアツテ面食ツタ。全體ドンナヲ述ベル了簡カシラ

五九六

明治四十一年八月五日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地池内氏内高瀬清氏へ

一昨日御話をした絲櫻といふ小説はいそがぬから私に見てくれといひますからあなたへは送られません。今日東亞の光といふ雑誌を見たら小林一郎(哲學の文學士)といふ人が近頃漱石氏の名前が出るにつれて追々非難攻撃するものが殖えて來た。もう少「し」文學者は雅量がなくてはいかんとありましたが。どうですか。私は未だ非難攻撃といふ程な非難攻撃に接した事がない。何だか小林君の説によると迫害でも受けてゐる様に見えて可笑しい。漱石をほめるものが少なくなつたのは事實であります。然し是は漱石が作家として一般の讀書子から認められたからであります。漱石をえらい作家と認めれば認める程世間は無暗にほめなくなる譯だと思ひます。六號活字杯を以て漱石を非難攻撃杯といふのは頗る輕重の標準を失してゐるではありませんか。

今めしを食つて散歩に出る前に一寸時間がありますから氣箠を御目にかけてます。
長い小説の面白い奴をかい御覽なさないか。さうして朝日新聞へ出しませんか。
今度の「同窓會」は駄目ですね。あれは駄目ですよ。あなたを目するに作家を以てするから無暗にほめ
ません。ほめないのはあなたを尊敬する所以であります。 頓首

八月五日

金

虚子先生

五九七

明治四十年八月六日 午前十時—十一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拜啓酷暑の候愈御清適奉賀候頃日來御掲載の郊外生活多大の趣味を以て歡迎日々愛讀今日は飛んだ所で
漱石が引合に出て大に面目の次第に候が玉稿が急に六號活字に縮少せるには驚ろき候。夫でひめゆりとか
申すつゞきもの、小説つきの廣告が繪入で巾を利かして居るには恐縮しました。新聞屋も餘程金がほしい
と見え候。郊外生活は可成長く可成面白からん事を希望致候 以上

八月六日

金之助

秋 骨 様

五九八

明治四十年八月六日 午後四時—五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

豊隆先生 僕の小説は八月末には書き上げるだらうと思ふから九月早々出て来たまへ。旅行は多分やめ
るだらう。小説をかい仕舞はないと雑誌さへ讀む氣にならん。旅行杯は來年に延ばして仕舞ふ。あの小
説をかいてるうちは腹のなかにカタマリがあつて始終氣が重い。妊娠の女はこんなだらう。

僕が洋行して歸つたらみんなが博士になれくと云つた。新聞屋になつてからそんな馬鹿を云ふものが
なくなつて近來晴々した。世の中の奴は常識のない奴ばかり揃つてゐる。さうして人をつらまへて奇人だ
の變人だの常識がないのと申す。御難の至である。ちと手前共の事を考へたらよからうと思ふがね。あ
な御目度奴は夏の螢同様尻が光つてすぐ死ぬ許だ。さうして分りもしないのに虞美人草の批評なんかしや
がる。虞美人草はそんな凡人の爲めに書いてるんぢやない。博士以上の人物即ち吾黨の士の爲めに書いて
るんだ。なあ君。さうぢやないか。

三重吉が下總の國で吉原の別嬪を見たといふ。物騒千萬な事だ。君の御絹さんと同じ事だ。
森田の子供が死にかゝつて森田先生毎日僕の所へ病氣の経過を報告にくる。可愛らしい男であります。
火事を出しかけて長屋の人が來て揉み消してくれたといふ。御蔭で五圓進上せざるを得ざるの已を得ざる
に至つたといふ。惜い事也

小説をかい仕舞つたら書物をよんで諸君子と遊ぼうと思ふ。それを樂しみに筆を執る。君謠を稽古し
てるるか。僕は近々再興する積だ。一所に謠はう。

今日は坐つても汗が出る中々あつい事だ。僕の嫌な蟬の聲がする。花壇にはまだ花が咲いてゐる。
不思議なものだ。僕も小説家としてもう少しの間は大丈夫だ。博士にならなければ飯が食へないと思ふも

のに好例を示してやる

八月六日

豊隆様

金

五九九

明治四十年八月九日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓先日は御不幸御氣の毒の至に不堪實は御悔みに上がらうと思ふがオツカサンや奥さんで却つて御迷惑と思つて控へてゐる。先日生田君の取りに來たものは乍些少香奠として差上るから其積にて御使用下さい。別に何か上げやうと思つたら細君が申すにあれを上げた方がよからうとあるから小生も其儀に同意した譯である。

昨日は來客、昨夜は東洋城とまり込み今猶のらくらしてゐる。虞美人草は昨今兩日共休業もし御閑なら人らつしやい 頓首

八月九日

金

米松様

六〇〇

明治四十年八月十五日 午後五時一六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

拜啓トルストイの獨譯を賣つた。今二三頁讀んだ(但しいゝ加減)所があれをかくに際して沙翁を繙讀したのが七十五歳だと稱してゐる。其前にも度々讀んだとある。トルストイの様に氣力があると僕も大作物を出す。

トルストイは沙翁を讀んで人の様に面白くないと公言してゐる。そこが甚だよろしい。好漢愛すべしである。What is Art でも自分の思ふ事を勝手に述べてゐる。あの男の頭には感服せんがあの意氣には感服する。ライトと云ふ Dialectic Society で字引を編輯した人は四十になる迄英語の外は知らなかつたと云ふ。夫が今では大變な語學者になつた。西洋人はえらい根氣のある奴が居る。

漱石は沙翁を繰り返す氣もなし語學者になる氣もないが、此兩人の根氣丈はもらひたい。小説をじ然と發展させて行くうちには中々面倒になつてくる。是で見ると Dickens や Scott が無暗にかき散らした根氣は敬服の至だ。彼等の作物は文體に於て漱石程意を用ひてゐない。ある點に於て侮るべきものである。然しあれ丈多量かくのは容易な事ではない。

僕も八十位迄非常な根氣のいゝ人と生れ變つて大作物をつゞけ様に出して死にたい。君の手紙をよんだ。返事の代りに之をかく。

是から文壇に立派な批評家と創作家を要求してくる。今のうち修養して批評家になり玉へ。今より十年にして小説は漸移して只今流行の作物は消滅すべし。其時専門の批評家出で、眞正の作家を紹介すべし。

今の文壇に一人の評家なし批評の素養あるものは評壇に立たず。徒らに二三子をして二三行の文字を得意氣に臚列せしむ。

英、佛、獨、希臘、羅甸をならべて人を驚かす時代は過ぎたり。巽軒氏は過去の裝飾物なり。いたづら

に西洋の自然主義をかついで自家の東西を辨ぜざるもの亦將に光陰の過ぐるに任せて葬られ去らんとす。而る後批評家は時代の要求に應じて起るべし。豊隆先生之を勉めよ。樗牛なものぞ。豎子只霸氣を弄して一時の名を貪るのみ。後世もし樗牛の名を記憶するものあらば仙臺人の一部ならん。謹んで檄す。頓首

八月十五日

豊隆様

金

四九四

六〇一

明治四十年八月十六日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大森八景坂上杉村氏内中村翁へ

昨日は暑中見舞の書狀難有拜見、杉村氏歸京にて御多忙の事と推察致候。小生未だ小説を脱稿せず百回でやまざる故どこ迄行くか夫子自身心元なし Penelope's web と申す事あり。永劫に虞美人草攻となる了簡なり。細民はナマ芋を薄く切つて、夫れに敷割杯を食つて居る由。芋の薄切は猿と擇ぶ所なし。残忍なる世の中なり。而して彼等は朝から晩迄眞面目に働いでゐる。岩崎の徒を見よ!!!

終日人の事業の妨害をして(否企で、)さうして三食に米を食つてゐる奴等もある。漱石子の事業は此等の敗徳漢を筆誅するにあり。天候不良也腦巔異狀を呈して此激語あり。翁先生願くは加餐せよ 以上

八月十六日

夏目金之助

中村 翁 様

六〇二

明治四十年八月十六日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田實彦へ (はがき)

玉稿ハ新聞へ届ケタリ。天陰、滿庭コトゴトク蟬聲。漫然トシテ座ス。興味無盡。理科ノ不平ヲヤメテ白雲裡に一頭地ヲ拔キ來レ

六〇三

明治四十年八月十六日 午後八時—九時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村大若大若館鈴木三重吉へ (はがき)

君の御蔭にて閑庭未だ花絶えず日々寂寥を慰す。昔人曰熱時には閨梨ヲ熱殺スト漱石ハ然ラズ擧シテ云フ熱時ニハ閨梨ヲ涼殺ス

六〇四

明治四十年八月十七日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より大分縣大分郡松岡村吉峰竟也氏へ (はがき)

四海同胞の好みを以て御書被遣拜見致候虞美人草の人物の名ニ葉亭氏に有之由御注意難有候實は其面影をよまず夫が爲めかゝるコントラストを生じ候先は御答迄 草々

六〇五

明治四十年八月十八日 午前十時—十一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地池内氏内高濱清氏へ
 濱で御遊びの由大慶に存じます大きな鼓を御うちの由是も大慶に存じます。松本金太郎君はどこにるますか。私のゐる所からあまり遠方では少々恐れ入ります。謠の道にかけては千里を遠しとする程の不熱心ものであります。専門の學問をしに倫敦へ參つた時ですら遠くつてくゝ弱り切りました。
 金太郎君へ入門の手續はどうしますか月謝はいくらですか。相成るべくは相互の便宜上師弟差向ひで御稽古を願ひたい。敢て同門の諸君子を恐るゝにあらず。度胸が据らざるが爲めなり。
 あなたは二十日頃御出京と承りました。然し御令兄の御病氣ではいけませんまい。どうか御大事になさい。

人の悪口を散々ついてあとからあれは獎勵の爲めだといふのは面白いですね。六號活字の三行批評家や中學生徒に獎勵されちやたまらない。以上

八月十九日

金

虚子先生

謠の件は近々御歸り迄待ちましてもよろしう御座います。いそぐ事ではありません

六〇六

明治四十年八月十九日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村大若大若館鈴木三重吉へ 「はがき」

おとつさんが肺病になつた由御氣の毒なり。森田の兒が死んで川下江村は小田原で倒る。——吾等は難有く其日を送る。幸福なり。

其代りうちの下女は主人をおびやかしかゝる。異な事なり。漱石下女の爲めに人生觀を易へる事あらば漱石と下女とは同程度の人物なるべし 呵々。

八月十九日

六〇七

明治四十年八月十九日 (時間不明) 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

君が歸京前最後の手紙としてこれをかく。三重吉と一所にこしらへてくれた花壇は未だに花が絶えぬ御蔭で日々慰めになる。虞美人草をかく時にも大なる注意物となつた。筆を以て漫然とあの花畠を見てゐる。暑があげて秋が來て朝夕は涼しい。小供が蟲籠を軒へかけた。蟲がなく。少し書物が讀みたい。此夏も江山の氣を得ずに籠城して仕舞さうだ。三重吉のおとつさんが肺病になる。川下江村といふ人が卒業してすぐ死んでしまつた。

世の中は妙な考を持つてゐるものだ。殿下様が漱石の敵だと云へば漱石はすぐ恐れ入るかと思へてゐる。至極香氣に出來てゐる。殿下様はえらいかも知れないが、漱石がさう安つほく出來てゐた日にや小説なんかかく必要がなくなつて仕舞ふ。尤も甚しい例は漱石の文は時候後れだと云へばすぐ狼狽して文體をかへるかと思つてゐる。漱石は獨己が讀めないと云つて冷評すれば漱石は翌日から性格を一變するかと思得てゐる。どう考へても世の中は香氣だなあ、豐隆子。こんな人間がごろ／＼してゐるうちは漱石もいさゝか心

丈夫だ。

島からの端書到着。石は何で出来てると聞いた人は傑作家に違ない。君が歸る迄は花壇に花があるだらう。小説は今月中には方づくだらう

八月十九日

金

豊隆様

六〇八

明治四十年八月二十日

午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區斧町柳原邸内松根豊次郎へ〔はがき 署名に「夏目道易 禪者」あり〕

問ふて曰く男女相惚の時什麼

漱石子筆ヲ机頭ニコロガシテ曰ク天笠ニ向ツテ去レ

讚曰

春の水岩ヲ抱イテ流レケリ

問ふテ曰ク相思の女、男ヲ捨テタル時什麼

漱石子筆ヲ机頭ニ豎立シテ良久曰ク日々是好日

讚曰

花落チテ碎ケシ影ト流レケリ

六〇九

明治四十年八月二十一日

午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區斧町柳原邸内松根豊次郎へ〔はがき〕

心中するも三十棒

朝貌や惚れた女も二三日

心中せざるも三十棒

垣間見る芙蓉に露の傾きぬ

道へ道へすみやかに道へ

秋風や走狗を屠る市の中

六一〇

明治四十年八月二十三日

午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ〔はがき〕

以上

野村さん二十五日に朝日新聞へ給料をとりに行つて呉れないか。どうせひまだらう。午後がよろしい。

六一一

明治四十年八月二十八日

午前(以下不明) 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村翁へ

大水にて大騒一寸見物に行きたい椽が致すがもう三四日は虞美人草故外出を見合せる
時に君も朝日へ入社の由大慶一人でも知つた人が這入るのは喜ばしい

御舎弟の御病氣の事は森田氏より承はりたり。御氣「の」毒と思ふ。

「うきふね」は二三の書店へ話丈はして置いたが只今出版界不景氣だからと云ふので春陽堂杯は一寸逃けた。かうでもしたらどうだらう。君が「うきふね」持參大倉へ行つて原平吉に逢ふ僕が是非出版してくれといふ添狀をかく。其後は君の談判に任せる。

それからまだこんな事がある。昨夕も森田に話したのだが。僕は月給の約束で明治大學で三十圓宛取つて居た。所が朝日へ這入るに就て明治大學も辭職した。その月（即ち三月か四月と思ふ）の月給をくれなさい。そこで一應は内海月杖君に催促したら先生は早速會計に申して取計ふといふ返事丈よこしてまだ寄こさない。君僕の代理として君の事情を打明けて之を内海氏からとるか上田敏君から受取つて貰ふかする勇氣があればその三十圓を君に上げる。

夫で歸國の旅費が足りなければ十月十日になると僕は二三百圓金が這入るそのうち二十圓位なら君にやつてもいい。昨夜は森田君に貳拾圓かし。其他へもチヨイ／＼貸シタリヤツタリスルノガ重ナルト何ダカ心細イ。然シ十月迄待テバソノ位ナ勇氣ハ回復スル
右一應御返事迄
兎に角九月初旬に一寸來給へゆつくり相談をする

八月二十八日

夏目金之助

中村 翁様

六一二

明治四十年九月二日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ

此間は失敬うちの家賃を三十五圓にするといふ三十五圓ぢやいやだから出る積だどこか好い所はないかね。無暗向不見に家賃を上げる家主は御免だ。御もよりに相當なのを御聞及なら一寸しらせてくれ玉へ
頓首

九月二日

金

虎 雄 様

六一三

明治四十年九月二日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ（はがき）

野村さん。家主が家賃を三十五圓にするといふ。今月中に越すつもり好いうちがあるなら心掛けて教へて呉れ玉へ

九月二日

六一四

明治四十年九月二日 午後十二時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より上總國一の宮一の宮館畔柳都太郎氏へ

端書拜見肺せんかたるの疑ありとの事大した事も有之間敷けれど随分勉強して遊んだらよからうと思ふ僕も小説が脱稿に及んだから出掛て二三日馬鹿話でもしたいがどうも一の宮とあつては一寸行く氣にならん。實は此間大塚に誘はれて別莊地見分の爲め參つたのでね。一の宮より稻毛の方がよくはないか。

家賃を二十五圓にするといふから只今逃亡の仕度最中だ。君い、うちを知らないか。〇〇は無暗に借りる借りろといふ。あんなのは何だか氣味がわるい。實際僕の崇拜者でもないものが家を貸す爲に崇拜者になるなんて怪しからん譯だ。

僕例の立派な湯屋へ行つて體量をはかるに十二貫半である。今日か、つた「ら」十二貫の半の半である。家賃と體量は反比例するものかと思ふ。今に家賃が百圓位になれば體量〇即ち大往生の域に達する事だらう。胃が悪クテイケナイ。之を稱してキツツエンカートルト名ケル。一の宮位ぢや中々癒らない。火葬場のストーブで煖めないと到底全治しないさうだ。

先は御返事迄 匆々頓首

九月二日

金

畔 柳 様

六一五

明治四十年九月二日 午後十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金燈町二丁目八十一番地野間眞綱へ

残暑にも拘らず御機嫌よきや小生不相變消光小説は漸く脱稿せり。先日佐治君が来て明治學院を斷つたと云ふ。其代の野村も斷つたといふ。其代はもう出來たのかね。もし出來なければ森田米松を入れてやつてくれないか。尤も君も時間が可成澤山持つ方がい、から餘つたらば餘つた丈を周旋してやつてくれないか先は用事迄 匆々頓首

九月二日

金

眞 綱 様

六一六

明治四十年九月四日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

爾後御疎遠に打過申候不相變御清穆奉賀候小生漸く小説を脱稿今暫く小康をむさほる積に候 倅突然ながら曙町でも何でもよろしきが小生の這入る位の貸家は無之やもし御見當り又は御聞及ならば 端書にて御一報願上度實は今月中に此家を引拂はねばならぬ事と相成候につきもしやと思ひ唐突ながら伺 上候 以上

九月四日

金 之 助

繞 石 詞 兄

六一七

明治四十年九月四日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

浄土宗の方は先約にて森卷吉氏にきまる明治學院の方は國史科の何とかいふ人が出來た由此人〇〇人に 無暗に利巧に立ち廻り學院の方でも難有なき由なれば森田君が覺召がある事が今少し早く分つてゐれば 譯なかつたのにと野間から云つて來た 右の次第にて雙方共駄目也。但し森卷吉は瀧の川の耶蘇夜學校をやめる筈だらうと思ふ。夜中瀧の川迄

通ふ勇氣があれば聞き合せて見るが如何

九月四日

米 松 様

金

六一八

明治四十年九月四日 午後十二時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拜啓先日は郊外生活の件につき一寸申上候處早速御返事にて却つて恐縮致候
諸甚だ唐突ながら其郊外生活の儀につき御迷惑ながら伺ひ上げ候が小生の家主家賃を上げる事に堪能なる人物にて二十七圓を忽ちに三十圓と致し今や三十圓を三十五圓に致さんと準備最中にて此方にも御同様立退の準備を取り急ぎ候。そこで斯様な立ち入つた話を致し候も實は貴君御住居の近邊に適當なる立退場御承知にもやと存じての御願の前置に候とくに御探しを願ふと申す様な横着心にては萬々無之、もし御心づきの貸家も有之候は、何卒端書にて御一報被下間鋪候や御多忙中甚だ失禮を申上候何卒御用捨被下度候
匆々頓首

九月四日

夏目金之助

戸川秋骨様

金魚は面白く拜見致候

六一九

明治四十年九月七日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より上總國一の宮一の宮館畔柳都太郎氏へ

僕の胃ガン君の肺尖竹風の美的生活早稻田の自然主義大抵同程度なものだらう何れも心配するに及ばず。
あの繪は傑作だ。あの音楽も大結構だ。タンホイゼル位な所だ。海邊へ行くとシーインスピレーションの御蔭で色々なものが出来る
昨夜机の上に載せて置いたニツケルの時計と鋏と小刀を盗まれた。随分安直な泥棒だ。
四方に檄を飛ばして貸家を捜がしてゐる。君の所を二軒かりるもいゝが庭はまるで無いぢやないか
眞美人草脱稿後來客ストリームの如く流れ来る。主人ひと攻めとなる。
東京は中々暑い暑いのと人が来るので書物は一枚もよめない。グー／＼寐る。寐る事は免許以上の腕前だぬ。

大阪の新聞で眞美人草を一回ぬかして濟して掲載してゐる。香氣な不都合もあるもんだ。讀者は何とも云はない。氣のついたのは作者ばかりだらう

中川は一體熊本へ行くのかな何だか些とも分らない
まづ此位でやめる。

もう一つある。體量は十二貫半から半の半に減じた翌日から急に十三貫に増して昨日は十三・二あつた。
此様子で見ると體量と家賃は正比例するものと見て差支ない右正誤迄 草々

九月七日

金之助

芥舟先生

五〇六

六二〇

明治四十年九月八日 午後三時—四時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ
拜啓

此間中から八重子さんが御病氣の由大した事もないだらうと思つてゐたら昨日鈴木の話では熱が四十度もある由それでは普通風邪位な事ではないのだらう中々大病で君も看病に骨が折れる事だらうと思ふ一寸見舞に行かうと思ふが此あついで僕も大分弱つてゐるそこへ朝から人ばかり來るので益弱るばかりそれで手紙で失敬する何か不便な事があるならして上げる云ふて來給へ 以上

九月八日

金之助

豊一郎様

六二一

明治四十年九月八日 午後五時—六時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三氏へ
御面倒の御願を致した處早速御返事頂戴難有存候

御地近邊に一二軒は空屋有之よしざとならばまかり出たくと存候。實は意外に繁殖力多き家族にて大供五人プラス小供五人の大景氣故五六間にては少々間に合ふまじかとそれが心配に候然し家賃頗る廉なるに免じて少々の我慢も致しかねまじき趨勢いざとなればなにかど御厄介になる事と存候

小生も御近邊にて時々御邪魔でも致す方を望み居候何だが西片町邊はエラ過ぎる様に相成候
郊外生活は洪水の爲め一時御中止のよしもう大分退いた様子故又御始めにならん事を希望致します
先は御禮迄 匆々

九月八日

金之助

秋骨先生

六三二

明治四十年九月八日 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田寅彦へ

「やもり」まあ負けて面白いとする。缺點は(一)初めは御房さんが山になる様だ(二)所が荒物屋が主になつて仕舞つた。(三)そこでツギハギ細工の様な心持がする(四)始からやもりに關する記憶をツナゲル體で讀者に是が中心點だと思はせない様に兩者を並列する心得があれば此矛盾は防けたらうに(五)さう云ふ態度で並べた話ならもつと渾然としてくる。如何となればいくつ竝べてもやもりで貫いてゐるから。——又文章の感じが一貫してゐるから である。

文章の感じは君の特長を發揮してゐる。矢張ドンダ感、龍舌蘭感である。此種の大人しくて憐で、しかも氣取つてゐなくつて、さうして何となくつやつほくつて、底にハイカラを含んでゐる感じは外の人に出しにくい。君には是より以外に出せないかも知れない。先は一口評迄。早速虚子に送る

九月八日

金

五〇七

六二三

明治四十年九月十日 午後六時—七時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

先刻は御多用の所御邪魔失禮致候御親切に御案内被下候段難有奉謝候諸眞宗大學の口は喜んで應ずる人は澤山可有之と存候が早速思ひつき候人を二三御紹介及候古きかた御望の由につき

- (一) 戸川明三。是は明治學院出にて英文撰科卒業。山口高等學校教授廢校後出京。御存じの秋骨君に候
 - (二) 名須川 良。是は熊本高等學校教授たりし所衝突の結果出京
 - (三) 野間眞綱。是は前の二人と違ひ門弟に候四年許前に卒業只今明治學院の教師先達士官學校をやめたり
- 其他御望とあれば猶二三人はあるべし。新しくて濟めばいくらでも有之候
先方へ問ひ合す前に一寸御意向を伺ひ置候先は右御返事迄 匆々頓首

九月十日

金之助

大谷様

六二四

明治四十年九月十四日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜啓戸川君の信仰事件は小生も知りませんが一つきいて見ませう。きいて耶蘇信者だと云つたら仕方がないが。信者だらう丈でやめるのは少々残念ですから。

家の事色々御盡力難有く存じます廣瀬君のうちは落成せぬうちから借りろ〜といふ好意でしたが實はまだ行つて見ません。名須川君の新居はどこか知りませんか。其近所のうちは何だかよさ〜うに思ひますが。御世話序にもう少し聞いて下さいませんか。出来ればこゝ五六日うちに極めて下旬には引き移る事に致す積です。もうどこへでも飛んで行く積です。 以上

九月十四日

夏目金之助

繞石兄

六二五

明治四十年九月十四日 午前九時—十時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拜啓先日はわざわざ御光來被下ました處何の風情もなくまことに失禮致しました。諸大谷君から直接に御照會になつたさうですが例の眞宗大學授業の件ですが實は小生も大兄を推舉して置いた處昨日大谷君から手紙で當局者のいふには戸川君は耶蘇教ぢやないだらうかさうすると京都の頑固連に對して困るといふ返事ださうです。そこで大谷君があなたの信仰の有無を私へ聞き合せに來たのですが私はそんな事は一切知らないから——まあ戸川君に聞いて見るから待つてくれと大谷君に今手紙をかいた所です。

それで大兄があまり御望ならんものを信仰の有無など問ひ正す様なホジクリは不必要と認めますが萬一目下の御事情該校出稼御希望なればだまつて其儘にして置いては却つて御不便かと存じ入らぬ事ながら一寸伺ひます。尤も直接に大谷さんの方へ御返事をなさつてもよろしう御座います。先は用事まで 匆

九月十四日

五二〇

秋 骨 様

金之助

六二六

明治四十年九月十四日 午後四時—五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麴町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ〔はがき〕
寶生新君件委細難有候。早速始めたいが轉宅前はちと困ります。轉宅後も遠方になると五圓では氣の毒に思ひます。いづれ落付次第又御厄介を願ひませう

六二七

明治四十年九月十四日 午後四時—五時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ
拜啓其後は御無沙汰諸般大塚さんの奥さんが萬朝に連載した露と題する小説を文淵堂から出版するに就てあなたに表紙の意匠を願ひ度と申しますがどうか御面倒でも一つ書いて下さいませんか。口繪は満谷さんに頼むさうですが出来るなら満谷さんの繪を御宅へ持つて行く様にしますからそれと調和する様につて見て下さい。いづれ表向は文淵堂が参りますが私は個人として大塚さんの代りに御願申して置きます。私も小説が濟んで少々閑になつたから其うち上がります。あなたの繪はどうですかまだ忙がしいですか
貢さんによろしく
今月中に轉宅をしなければならので方々聞き合せ中です 先は用事迄 匆々頓首
九月十四日

金

橋口 清 様

六二八

明治四十年九月二十三日 夜 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ
今日千駄ヶ谷を探索君の家（即ち石門）を見んと存ぜし處千駄ヶ谷も随分廣い所にて何とも蚊とも相分らず。代々木代々幡杯をぶらついて大に健康を養成致候
それで念の爲めもう一遍石門館を見たいと思ひ候が御慈悲に明日御連被下間敷や尤も明日は社の運動會が玉川にある。三時に散會といふ御布令だから其前に御免を蒙つてもよろしい故どこか御出張を願つて待ち合せたいと思ふが適當の場所と時を御指定願ひたい。それとも都合によりては運動會を御免蒙つてもよろしい。
猶都合によつては石門館の番地町名を御報にあづかりたい左すれば小生一名にて出掛候 以上

夏目金之助

九月二十三日夜

森田 綠 萃 先生

六二九

明治四十年九月二十八日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麴町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ〔はがき〕
私の新宅は

五二一

牛込早稻田南町九番地
デアリマス。アシタ越シマス

六三〇

明治四十年九月二十八日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ〔はがき〕
家の事にて種々御心配恐縮漸く左記の處へ本月中に移轉の都合に相成候右御禮旁御通知迄 勿々
牛込區早稻田南町九番地
九月二十八日

六三一

明治四十年九月二十八日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下菓輪町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
小生明日左記の處へ轉居す
牛込區早稻田南町九番地
九月二十八日

六三二

明治四十年九月二十八日 午前十一時—十二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ〔はがき〕
先達は家の事で御面倒相願難有候今度牛込區早稻田南町九番地へ轉居する事に相成今月中に引移る事に
致候右御禮旁御報迄 勿々

六三三

明治四十年九月二十八日 午後零時—一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區伊皿子町三十五番地皆川正禮へ〔はがき〕
明日曜牛込區早稻田南町九へ轉居ヒマナラ彌次馬に乗ツテ御出征如何

六三四

明治四十年九月二十八日 午後零時—一時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區伊皿子町三十五番地皆川正禮へ〔はがき〕
明日曜牛込區早稻田南町九へ轉居の筈ヒマガアルナラ見物旁手傳に來ラレンコヲ希望

六三五

明治四十年十月二日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より小石川區原町百二十番地行徳俊則氏へ〔はがき〕
家屋の儀色々御世話にあづかり難有候今月より表記の所へ移り候間右御通知申上候 以上
十月二日

六三六

明治四十年十月四日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より横濱市元溜町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ
拜啓爾來等閑に打過候段怠慢の罪ひとへに御海忍願上候御惠送〔の〕鮑今日着寒厨一段の芳味を秋夜に
添へ可申御好意奉萬謝候
新居僻遠にていづ方へも御無沙汰閑人ならでは參るものなき邊鄙に有之候へどももし御上京の節御氣で

も向き候へば御枉駕被下度待上候

虞美人草御讀被下候由本月末にて完了の筈御批評願上候

今度の引越につき始めて借家の拂底を感じ書物が邪魔になり殆んどいやになり申候昔の人は自分の家藏を持たねば一人前でないとか申居候漂浪を分とする小生如きものも成程と思ひ當り候漸漸郊外へ退却の外無之我ながら憫笑

先は御返事かたゞ御禮迄匆匆如斯候 以上

十月初四

渡邊様

夏目金之助

六三七

明治四十年十月四日 午後五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜啓また御面倒なる事につき一書を呈する事と相成候

勸業銀行の有尾敬重氏の息子が今度中學を卒業して高等學校へ這入る迄英語の練習をして貰ひたいとの申込を引受候處意外の遠方へ引うつりたる爲めどう「か」近邊なる大兄に紹介して呉れぬかとの事に候(同氏は富士前町住に候)

小生は一週に一兩度ひまな時にはと申置候が其位の御閑は出来不申候や。實は大兄の御多忙の事も一應申置候。又御都合次第にては甚だ失禮ながら相應の御報酬を差出す様に致すだらうと存候

實は御面倒で申上るのも甚だ恐縮とは存せしも小生移轉の爲め平生交際ある友人(醫學士尼子氏)の依

頼をもだしがたくかく御難題を吹きかけ申候

御遠慮なき處御返事被下候は幸甚 頓首

十月四日

夏目金之助

大谷正信様

六三八

明治四十年十月六日 午後四時—五時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ (はがき)

御多忙の處御好意難有候早速有尾氏へ通知致す事に取計ひ可申、或は先方より直接に御願に出るやも計りがたく其節はよろしく御相談願上候

六三九

明治四十年十月七日 午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村翁へ

拜啓御手紙の趣承知致候實は十月十日に銀座貳丁目服部書店より猫の印税殘部貳百七十圓持參の筈故そのうちを貳拾圓君に用立て様と思つて居然し十日に君が出立するとなると間に合はない故封入の僕の名刺を持つて同店に行つて談判して一日でも早く取つてくれてそのうち二十圓差引いて残りのうちで七十圓三十錢(九月丸善から取りに來た書代)を丸善へ拂つて残りの百八十圓を僕の所へ持つて來て呉れ、ば好都合である

もし服部が十日でなければ出來ぬといふならば君の出立日を一二日延べるより致方あるまい

序だが右猫印税の受取も入れて置く引替に渡してくれ給へ

十月七日

夏目金之助

中村君

六四〇

明治四十年十月八日 午込區早稲田南町七番地より府下青山原宿二百〇九番地森次太郎氏へ

祝滿洲日々新聞創刊

朝日のつと千里の黍に上りけり

昨日は失敬御約束の句右の如くにて御免蒙り候尤も御取捨は御隨意に候 以上

十月八日

夏目金之助

森様

六四一

明治四十年十月八日 午後一時—二時 午込區早稲田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓寶生の件は御急ぎに及ばずいづれ落付次第此方へ招待仕る方雙方の便宜かと存候實はケチな事ながら家賃が五圓増した上に月謝が五六圓出ると少々答へる故一寸様子を伺つた上に致さうかと逡巡仕る也

魯庵氏への紹介狀別封差上候間御使可被下候
先は用事迄 匆々頓首

十月八日

金

虚子先生

六四二

明治四十年十月八日 午後十一時—十二時 午込區早稲田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ 【はがき】

御小兒御病氣如何もし御様子よくば木曜の夕茸飯を食ひに御出掛下さい尤も飯の外には何もなき由人間は連中どや〜参る事と存候紹介狀サツキ郵便で出しました

六四三

明治四十年十月九日 午前九時—十時 午込區早稲田南町七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜啓先日願候有尾氏子息稽古の件につき同氏より先生の御出にては恐縮故此方よりまかり出で御教授にあづかり度と申出られ候御迷惑の次第とは存じ候へども右にて御聞入被下間敷候や。小生は直接には有尾氏を知らず只小生に依頼せる知人の言によれば同氏は平民的な謙遜家なりと云へば子弟の教育上より家庭へ先生を呼びつける如き仰山な所置を好まぬ爲とか手紙にて申越候色々御面倒なる事のみ願失敬千萬に候へども何とか今一應御熟考を煩はし度と存候 以上

十月九日

大谷學兄

五一八

夏目金之助

六四四

明治四十年十月九日 午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村翁へ

服部件種々御盡力難有候同店主本人小生方へ持參の由なれどどうせ其うちより君に上げるものを出す譯故君の方で受取つてくれた方が便利に御座候主人もわざ／＼早稲田迄出張する迷惑がはぶけて便利な筈に候。よつて御面倒ながら本日君が行つて取つて下さい。其方が雙方の便利であり且つ確かである 以上

十月九日

夏目金之助

中村 翁 様

六四五

明治四十年十月十日 午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ (はがき)

御依頼の件御親切に御引受被下難有候早速先方へ申つかはし候定めて喜ぶ事と存候
先〔は〕御禮迄 匆々

六四六

明治四十年十月十日 午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より麹町區内山下町東洋協會内森次太郎氏へ

拜啓先日願上候人の履歷別紙の如くに候間御廻送申上置候につきもし本人相當の事も有之候はば可然御周旋被下度先は當用のみ 草々頓首

十月十日

夏目金之助

森 賢 臺

六四七

明治四十年十月十一日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拜啓玉稿拜受難有候早速社の方へ廻付致置候輪廓文學は面白く拜見致候
儲御匿名の件は過般御面會の節は一應面白きかとも存じ候ひし處よく考へ候に矢張公然の方可然と愚考仕り且つモデル問題八釜敷際あとにてあれは秋骨君だといふ事が分つてはモデル問題に關係深き大兄が却つて他より入らざる揣摩を受けらるゝ事あらんかと存じ專斷を顧みず公然と雅號拜借致候一應は御相談の上可取計處左程の大事件にても有之間敷(寄稿の内容より察して)と存じ一存にて取計申候もし不都合なれば後日御面會の節御叱責を甘受可仕候 以上

十一月十日

夏目金之助

秋 骨 兄

六四八

五一九

明治四十年十月十三日 午込區早稲田南町七番地より本郷區駒込町十一番地大谷正信氏へ

拜啓過般來毎々御面倒相願候有尾氏令息授業の件につき御紹介及候間御面會被下度委細は拜眉の上萬々可申述候 以上

十月十三日

大谷様

金之助

五二〇

六四九

明治四十年十月十四日 午前十一時—十二時 午込區早稲田南町七番地より府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拜啓モデル問題朝日社より返附致來候につき御廻送申上候御改作の分出來候節は頂戴可仕と存候 右當用迄・草々

十月十四日

戸川様

金之助

六五〇

明治四十年十月十六日 午後二時—三時 午込區早稲田南町七番地より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ〔はがき〕

蓄音器を買ふ様な餘裕のある人に金を寄附するなんて勿體ない。蓄音器どころではないセツバ詰つて借りに来る人がある。さう云ふ時に貸す方が有効で有益である。だから寄附は御免蒙り候

六五一

明治四十年十月二十一日 午前十一時—十二時 午込區早稲田南町七番地より赤坂區表町一丁目一番地戸田方松根豊次郎へ

拜啓尾崎より別紙参り候間供御高覽候返事は直接に同人へ御つかはし相成〔度〕候

二十一日

金

豊次郎様

宿所は廣島市水主町三六に候

六五二

明治四十年十月二十六日 午後四時—五時 午込區早稲田南町七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

草雲雀の序遅延無申譯漸く半日の閑を偷んで書き了る。あまり御氣に入りますまいが、いらで御勘辨を願度候

十月二十六日

金之助

草平大人座下

六五三

五二一

明治四十年十月二十九日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ
 啓先日露月に面會致候處御幼兒又々御病氣の由にて御看護の由嘸かし御心配の事と存候
 諸別封(小説葦切)は佐瀬と申す男の書いたもので當人は是をどこかへ載せたいと申しますからホト、
 ギスはどうかだらうと思ひ御紹介致します尤も當人貧乏にて多少原稿料がほしい由に候
 御一覽の上もし御氣に入らずば無御遠慮御返却相成度ほかを聞いて見る事に致します 先は用事迄 匆

二十九日

金之助

虚子先生

六五四

明治四十年十一月二日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より京都市外下加茂村養橋東詰北入厨川辰夫氏へ [はがき]
 御紙面拜見京都へ御轉任の事はかねて聞及候御地は熊本より萬事好都合の事と存候先々結構に候小野さ
 んのモデル事件は小生も新聞にて讀み候。勝手な事を申すやからに候。定めし御迷惑の事と存候。勝手な
 事を勝手な連中が申す事故小生も手のつけ様なく候

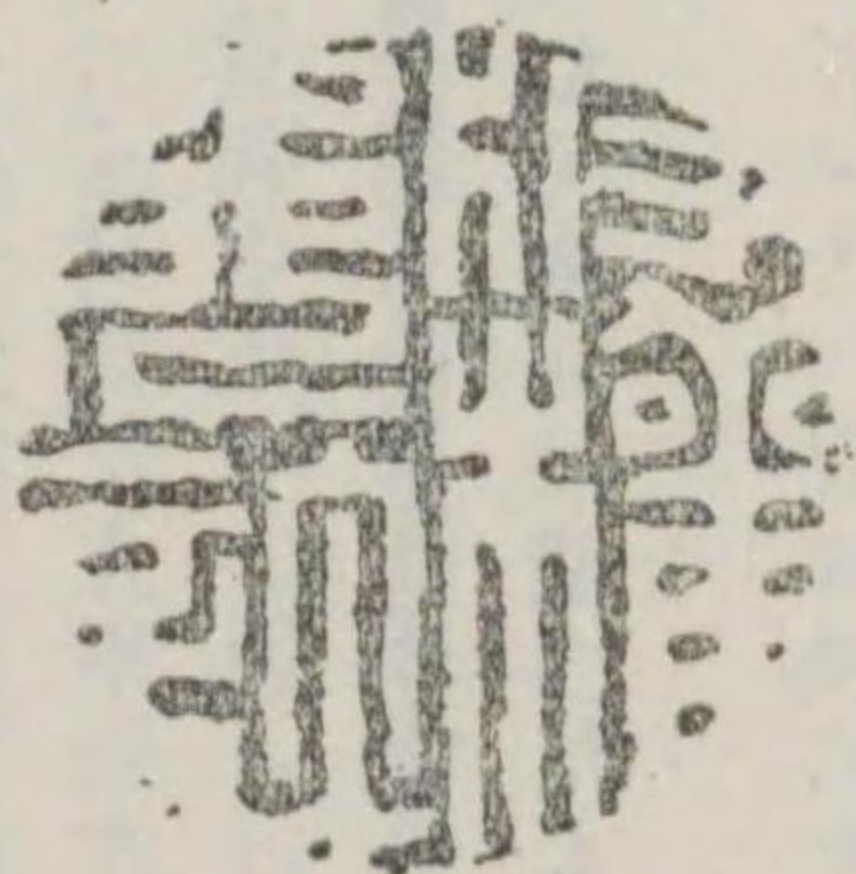
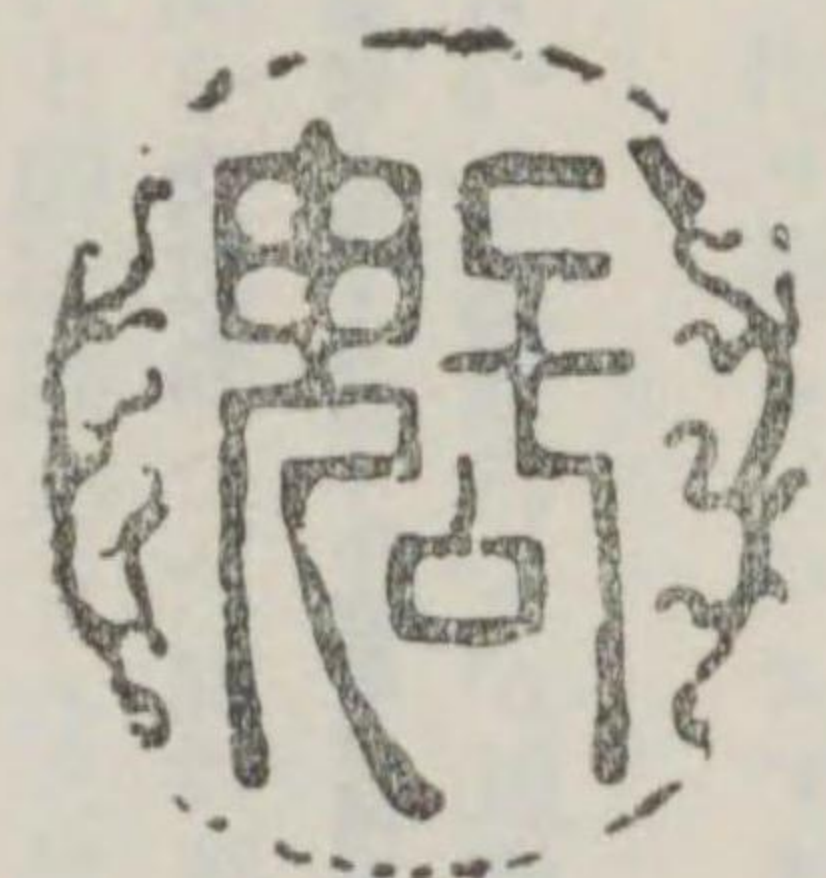
六五五

明治四十年十一月二日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區藤川町一番地小吉館小宮豊隆へ [はがき]
 拜啓乙骨君の事難有存候同君の御隨意にてよろしき事と存候同君の宿所がわかれば改めて社員がまかり

出萬事正式に御依頼致すべくと存候小生も参りて直接に參上の上御頼を致してもよろし

六五六

明治四十年十一月五日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ [はがき]
 古道具屋で左の印を買つて來た處何と讀むやら分らず教へてもらひたい



六五七

明治四十年十一月六日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より姫路市外平野村三百十五番地池内松太郎氏へ
 拜復此前御つかはしの御書狀は大坂の社より廻送し來候へども書中の意味は二三の來客に示し候へども
 とんと不得要領其儘に打棄置候
 今度には姓名住所判然と御書入につき御返事致候小生は大坂の社には居らず表面の處にまかりあり
 貴兄の御差出の書面は(十餘回)と承はれど一回も受取りたる事なし貴兄の作物月見草其他も未だ拜見

も致さず通知も受けず候。是は大坂社より御受もどし可然と存候但し書面には簡明直截に用事と姓名住所を御認め可然然らざれば又々社の方で取り合はぬ事と存候
右御返事迄 匆匆

五三四

六五八

明治四十年十一月八日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より府下東郷町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
御手紙毎度難有八重子様より妻への書面も届申候下女の義御心配奉謝候是は妻より何とか御返事致し可申と存候先は御返事迄 匆匆

六五九

明治四十年十一月九日 午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ〔はがき〕
篆字を調べてもらつた處はいゝが版權免許は驚ろいたね元來何に使つたものだらうどうも御苦勞さま難有いがつまらない

六六〇

明治四十年十一月十一日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
先日は失禮御依頼の序文をかきました御氣に入るかどうか分りませんがまあ御覽に入れます。
ゆふべ大體の見當をつけて今朝十時頃から正四時迄かゝりました。然し読み直して見ると詰らない然し大分奮發して書いたのは事實であります。そこを御買ひ下さい 頓首

十一月十日

金

虚子様

當分序分^原ハカ、ナイ事ニシマス。ドウモ何チカイテ好イカ分ラナイ。
然シアナタノ作ヲ讀ムノハヒマガ入ラナカツタ。アレデハ頁ガ多クナリマセンチ

六六一

明治四十年十一月十五日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ
拜啓久しく拜顔を得なかつた處御手紙で眞美人草の批評をかい居られる由承知右皆々へ披露致候斯様に御丹精御研究の上御批評あらんとは思ひも寄らぬ所たとひ眞美人草が夫程の價値なきにせよ又其批評が褒貶いづれに向ふにせよ小生は心中より深く君の好意を感謝致候大喜雀躍は單に自分の爲のみならず近來の批評は寄席へ行つて女義太夫を評する格にて文壇の爲め頗る物足らぬ節有之所へ君が出て一批評をかく爲めに露西亞派を研究獨乙の哲學を研究、最後にシラーの傳迄しらべるに至つては其嚴正の態度堂々の獻立敬服の外なくしかも夫程骨を折つて貰ふ作物はといふと僕のかいたものに候故一層嬉しく思はれ候。君の批評を先鋒として日本の批評が從來の態度を一新する様になつたら嘸よろしからうと存候深田庚算^原が獨乙から手紙にて僕の作物を評したいことに文學論と其外の議論の學界に未だ嘗つてあらざりし所以を述べて精細なる批評を試みたいと申し來候。かゝる人がかゝる態度にて拙著を取扱つてくれるのはまことに心嬉しきものに候。もし夫れ大町桂月君の夏目漱石論に至つてはいくらほめられても小生の爲にも批評界

五二五

の爲にもならぬ事と存候委細は拜眉を期候。うれしき故一筆御禮を申上置度と存じ此ふみ入御覽候一日も早く批評拜見致し度と存候中には随分手痛き所も有之べく夫は承知故可成堂々とあゝやつたりやつたりと云ふ風に立派に眞の批評らしく御やり被下度候 以上

十一月十五日

草平先生

金之助

六六二

明治四十年十一月十八日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

拜啓讀賣の白雲子の事杯でわざわざ端書を寄こす必要があるものか寄こすなら御笑ひ草として寄こすべし。あれで胸糞がわるくなると申すは讀賣新聞自身に云ふべき事なり讀者は面白がつて然るべき論文也。あの白雲子なる人はかつて僕の處へ話をき、に來て僕が玄關先で返した趣味の男の由。至つて大人しい口も碌にきけさうもなき神經質の男也。それだからあゝ云ふ事をかく。あゝ云ふ男が相應の學問をしないであゝ云ふ事をかく時は少し氣が變になつて居る時分である。恐るべき事だ。あの人は生涯あれで蒼い顔で苦しんでさうして人から馬鹿にされて死んで仕舞ふ 穴賢

十一月十八日

豊隆様

金

六六三

明治四十年十一月十八日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

昨日は御馳走になりました私は廿二日入場の文藝協會の演藝會の特等の招待券をもらひました。(壹圓五十錢)あなたはもらひませんか。もし行くなら一所に行きませう。一人ならそんなに行き度もない

六六四

明治四十年十一月十八日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より赤坂區表町一丁目一番地戸田方松根豊次郎へ〔はがき〕

昨夜君の處へ行かうと思つたら途中で虚子と牛肉を食つて遅くなつてやめにした。不愉快ださうで御見舞に行く所であつた。讀賣を君もよむと見える。何と思つてあんなものをかいたのかな。氣の毒な

六六五

明治四十年十一月二十四日 使ひ持参 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

拜啓明日上田敏氏送別會にて午後四時頃迄に上野精養軒へ参り候につき甚だ御迷惑ながら例のもの「朝日」社にて御受取置被下度行きがけに頂戴に立ち寄り可申候 右御依頼迄 匆々頓首

十一月二十四日

豊隆様

金之助

六六六

明治四十年十二月二日 牛込區早稻田南町七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓其後御無沙汰拙作表紙も御蔭にて出来上り候由春陽堂より承はり御手数数の段奉謝候
諸當夏中願上置候大塚楠緒女子著「露」愈出版の運びに至候に就てはかねての通表紙模様御面倒ながら
御認め被下度願上度候

此手紙持参の人は萬朝記者本橋氏にて即ち該書出版者に御座〔候〕へば御面會の上可然御協議被下度候
先は右用事迄 勿々不

十二月二日

夏目金之助

橋口 清 様

六六七

明治四十年十二月九日 午後二時—二時 牛込區早稻田南町七番地より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上八重へ〔はがき〕

玉稿二篇とも拜見。「紫苑」は少々觸れ損ひの氣味にて出来榮あまりよろしからず。「柿羊羹」の方面
白く候。是も非難を申せば吉田さんが不自然の自然に出来上つて居り候へども、大體の處結構に御座候。
いづれを新小説いづれをホト、ギスとなると私にも判断がつき不申候。たゞ柿羊羹の方が上等の代物と覺
召し御取計可然候 以上

六六八

明治四十年十二月十日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館鈴木三重吉へ〔はがき〕

小説を御脱稿のよし大慶不過之候。樗陰は有卦に入り可申候。小生も三十日つゞきのものを只今たのま
れた許りに候。小説と行かなくても三十日はつゞける義務が出来候。可相成は二十九日位で御勘辨を願は
んかと存候。御風邪の趣折角御養生專一に候。小子奥方も風邪にて伏せり居候。従つて御見舞にもあがり
かね候。羊羹は勿論の事御あきらめ可然候。八重子さんは小説を二つかき候。新小説とホト、ギスへ出す
由に候。風呂が洩りて湯がたぬ由。何だか湯に這入り度候。風が吹き候。存外あたゝかに候。地震も有
之候。

十二月十日

六六九

明治四十年十二月十三日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

拜啓乙骨三郎君の美學の論文の載つてゐる哲學雜誌（近刊のもの二冊）今度御出の節本郷にて御求め御
持参願上候 以上

六七〇

明治四十年十二月十六日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

ケラーの小説を十圓で御求めの由ケラーと〔は〕何者なるや一向存せぬ名前に候。近頃は妙な名前がボ

ツボツ出て来て時々寐耳を驚かし候よくなき事に候。クツの紐御求め被下候由、哲學雜誌も御買被下難有候。小生矢張り執筆中。毎日二三回かく豫定
文債に籠る冬の日短かゝり

六七二

明治四十年十二月十八日 午後四時―五時 牛込區早稲田南町七番地より相模國小田原在早川村瀧光館林原（當時岡田）耕三へ（はがき）
御轉地〔の〕よし精々御養生可然候もし手紙を出す氣分でも出たらひまな時御送被下度候。何でも氣を長く平氣に御暮し可被成候。小生執筆にて多忙。東京は寒く候。御地は如何。風を引かぬ様御注意あるべく候 以上

六七三

明治四十年十二月二十二日 午後三時―四時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（はがき）
毎度用事を御たのみ申相濟まぬ事と存候御禮は此世では六づかしき故いづれ未來にてうんと可仕候故氣を長く御待可被下候。フォルケルトは随分高いね。讀まなければ莫大な損だ

六七四

明治四十年十二月二十四日 午前十一時―十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（はがき）
啓上社へ俸給をもらひに行つてくれる時は預けてある見とめの印を持って行く方安全に候。今日の平凡の御糸さんばうまいね。あゝは中々かけないよ 以上

二十四日

六七五

明治四十年十二月二十八日 午後五時―六時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（はがき）
拜啓又銀行へ御使を願ひたいものですが明日午前中に可成早く来て頂きたいですが。どうも恐れ入りま

六七六

明治四十一年（一月十日以前と推定す） 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ（はがき）
拜啓また御迷惑ながら明日早く来て野田先生の處へ原稿をもつて行つてくれ玉はぬか。「坑夫」は諸君子妨害の爲一向不進歩

六七七

明治四十一年一月十日 午後二時―三時 牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
昨日は失敬斑女には大弱り〔に〕弱り候。諸本朝本間久と申す人別紙原稿をよこしホト、ギスカ中央公論へ周旋してくれぬかとの依頼故先づ以て原稿を供貴覽候御氣に入り候はゞ御掲載の榮を賜はり度候
本人の申條に曰くある雜誌記者曰く本間久は翻譯ばかりして創作は出来ぬ男だと是に於て此作ありと、即ち敵愾心の結果になれるものと覺候
原稿の價値は大したものにあらず少々物足らぬ様也然し折角の希望故御紹介致し候 以上

正月十日

虚子方丈下

金

五三二

六七七

明治四十一年一月十日 午後十二時—十二時 牛込區早稻田町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (はがき)

拜啓又御願が出来候。今日坑夫氏来り又話を聞いたら僕の間違を發見した。シキと申すのは坑の事を、銅山の構内と思ひ違へて無暗に使つたから、大に恐縮して正誤しやうと思ふんだが、君もう一遍九浦先生の所へ行つて原稿を持つて来てくれ玉へ。尤もシキと云ふ字の出初めは銅山へ着したすぐ前からだから此間の原稿の仕舞の方になる。回数ぢや一寸分らないが、何でも長藏さんが坑夫に向つて「左りがシキだよ」と云ふ所がある。そこからさきを貰つてきてくれ、ばい。是は仕舞の方だから一寸持つて歸つても野田君の迷惑にはならない。それから、すぐ直して又持つて行つてもらひたい。どうも度々君子を煩はし奉つて恐縮千萬

六七八

明治四十一年一月二十日 午後三時—四時 牛込區早稻田町七番地より横濱市元濱町二丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓御惠投の鐘詰今日着段々の御好意深く奉鳴謝候小子疎慵常にいづ方へも御無沙汰ことに舊臘より例の小説をたのまれたる上三女とも病氣にて病院開業の有様ほとんど閉口今以て看護婦を一人頼み居候始末厄介無此上候大兄も御病氣の由然し大した事にも無之趣先以て安心然し御養生專一と存候淺井畫伯は惜しなるか知れず。例の胃もよろしからず候

御惠投の鐘づめは平生參り候諸君子へすゝめて一餐の快をとにもする積に候

坑夫かき上げる迄は氣がせいとなまけてるながら忙しく困居候

先は右御禮旁雜況迄 勿々頓首

正月二十日

金

渡邊様

六七九

明治四十一年一月二十二日 午後二時—二時 牛込區早稻田町七番地より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ

拜啓其後は御無沙汰小説がまだ濟まないで何處へも出ない。時に僕例の胃病で一才醫者に見てもらつたら小便を試験して是は糖分があるといふコイツには參つたね。それで自宅には器械がないから糖分ノベルセントを大學で調べてもらつてくれろといふんだがね。僕の療治法は其ベルセントで極るんださうだ。そこで色々頼む人も考へればあるが君の親類の人に見てもらつてくれないかな。承知して呉れるなら時間と日どりを極めて小便をビールの瓶に入れて大學へ持たせてやる早い方が此方の便宜だ否や御廻答を願ひます

五三三

それから去月から病人ばかりで今は子供が口腔炎とかいふものを煩つて口が腫れてヒー／＼泣いて氣毒でたまらない。此泣聲をきくと小説が一枚も書けなくなる。そこへ妻が寐ちまつた。仕方がないから看護婦を二人又雇つた。それでも雇へる丈が幸福だ。君のうちの病人は如何御大事になさい 以上

二十一日

虎 雄 様

金之助

六八〇

明治四十一年一月二十四日 午後零時—二時 牛込區早稲田南町七番地より芝區高輪南町三十番地中牟田方中村著へ

拜啓先日は失敬。三四日前小生方へ別封をよこしたるものあり書中の人は君の近所のもの故入御覽候。尤も新聞の種になるや否やは知らず候 以上

二十四日

中村 翁 様

金之助

六八一

明治四十一年一月二十六日 (以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より下谷區西黒門町二丁目一番地高橋方市川文丸氏へ

拜啓先夜は失禮其節は好物御持參御蔭にて諸君子一夕の歡を添へ申候十和田山諸景寫眞數葉是亦御親切

一月二十六日

市川 文 丸 様

夏目金之助

六八二

明治四十一年一月二十八日 午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より横濱市元瀬町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓別紙の様なもの、捌き方をたのまれ候。もし慈善兼御保養の御覺召もあらば御出被下度候。もし御いやなら其儘御打棄置願上候。岐阜訓盲院といふ小生友人の父なる人の創立せるもの此男中年明を失ひ此事業に従事。今回の事はおもに其薰陶を受けたる人の發起に候。先は用事迄 匆々

一月二十八日

金之助

渡邊 和 太 郎 様

演藝會は六日八日の兩日のおよしこゝろみに兩日の分二葉宛差上候もし御入用ならそれを御取りあは御都合にて小生方へ御返し被下るか又は賣りつけて被下候へば猶難有候

明治四十一年二月一日 午後十二時—十二時 牛込區早稲田町七番地より府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拜啓本日は久々にて參上致候處御留守にて不本意千萬に存候玉稿薄謝ながら社より封の儘相届候につき御査收願上候

夫から例の朝日文學欄につき玄耳氏と篤と相談致たる處此三四月に至り紙面擴張の意見實行出來れば附録ごとに文學もの入要なれどそれまでは閑文字の入れ所なき由に候

小生も右文學欄の出來るのを待ち居候へども是は單に編輯者の一存故主權者の方ではどうなるやら分らず候

もし左様の改革も實行出來候曉には先日御話しの通小生知人に依頼面白きもの書いて頂き度と存じ居候其節は是非御盡力相願度と存候

先づ夫迄は小生は先日申上候位のナマニエの體で打過ぎる了簡故大兄も御投稿は一先づ御控え被下度候先は右用事迄 匆々

二月一日

秋骨老兄

金之助

御令聞より拜聞の上歸途横井氏の門内に這入り申候未だ赴任なき由故遠慮して家のなかは見ずに参り候

明治四十一年二月四日 午後五時—六時 牛込區早稲田町七番地より牛込區大久保余丁町馬場勝彌氏へ

拜啓本日趣味を一寸のぞき候處例のリードルの件と思ひの外小生の人格に對し大々の御辯護の勞を辱ふし甚だ嬉しく候實は小生も云へば云ふ事はいくらでも候へども白雲子なるもの、態度傍若無人故相手になるのを差控へ候始末。然しあれに對しそれ程の御同情を得んとは存じも寄らず。一兩〔度〕御目にかゝり候のみにて小生の心事深く御承知なき昨今別して知己の感に堪へず。茲に謹んで御禮を申述候

二月四日

金之助

孤蝶様

侍曹

明治四十一年二月四日 牛込區早稲田町七番地より本郷區駒込西片町十番地瀧田哲太郎氏へ

拜復文學評論につき御申譯承知致候徹夜にては恐れ入候適當の所にて御まとめ願上候
虞美人草は既にとくの昔より一冊も無之先般御申込の節も既に出拂の姿に候へばあしからず
夏目漱石論が來月の中央公論に出る由聊か恐縮致候。先達中より大分漱石論が出で申候。もう澤山に候。出來得べくんば百年後に第二の漱石が出て第一の漱石を評してくれ、ばよいとのみ思ひ居候

坑夫御氣に召さぬ由已を得ざる次第に候。九十六回にて完結致候尤も東京朝日では祭日休刊を補ふ爲め
二回一所に載する事ある故九十三回位にて終る事と存候 先は右迄

二月四日

夏目金之助

瀧田樗陰様

六八六

明治四十一年二月五日 午後二時—三時 牛込區早稻田町七番地より相模國大磯角半方渡邊和太郎氏へ〔はがき〕

拜啓御病中をも顧みず御無禮の事相願恐縮の至。大磯では例の切符も何の御役にも立つまじく甚だ御氣
の毒に存候。昨今の御模様如何に御座候や。折角御養生專一に候。先は御禮迄 匆々頓首

六八七

明治四十一年二月七日 牛込區早稻田町七番地より牛込區早稻田町四番地森卷吉へ

啓上

御老人御逗留定めて御多忙の事と存候例の切符は先方の人大磯へ病氣療養の轉地中にて賣り損へり。然
し御愛嬌に一枚は買つて呉れ候。小生も一枚頂戴致候

土曜には參る筈なれど小宮が行きたさうだから切符をやり申候あゝ云ふ處は若い人の方が出席する資格
多きかと存じ割愛致候

此次の木曜に寶生氏を頼む積なり。尤も三時頃からみんなが来て遊ぶ由御出待ち候

切符代は大磯より爲替のまゝ差上度どうか御面倒ながら御受取願度夫から小生の分は現ナマにて封じ入
候御落手願候

御老人へ御挨拶の爲め參上致す筈の處御混雑中と云ひ且つ御迷惑と存じ差控居候あしからず御容赦
先は右迄 匆々

二月七日

金之助

森卷吉様

右の外に訓盲院の爲めに寄附金など御募りの計畫あらば多少は喜捨仕るべく又發起人として送附を
受けたる切符四枚購買の義務有之ば無論あと二枚は受持可申御遠慮なく御申聞被下度候

六八八

明治四十一年二月七日 牛込區早稻田町七番地より總町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

啓上謄本五冊わざく御持たせ御遣はし御懇切の段感謝致候小生萬事不案内につき御仰の通り寶生先生
と相談の上御指定のうちを願ひ可申候今夜班女は少しにて濟む事と存候もし御都合もつき候へば御入來御
兩人にて一番御謄あらまほしく候 先は御禮迄 匆々

二月七日

高濱様

金

五四〇

六八九

明治四十一年二月十日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より芝區白金志田町十五番地野間真綱へ

拜啓其後は御無沙汰小生も小説を置いて仕舞ふと其間にたまつた用事を片付けねば「な」らず片付けてゐるとあとからすぐ雑誌やら何やら追かけてくる實に身體丈は閑であたまは多忙を極めてゐるのでついでどこへも出でず昨日久しぶりで十二社へ行つて夫から銀世界を廻つて歸つて來た。梅は二三本開いてゐた。

妻君を國へ御歸しの由承知それで地方へ出かせぎの件も承知。小島へ依頼の件も承知萬事承知致候。是から此墨で手紙を十數通（端がきとも）かく。其内で小島氏へも認める所也

坑夫は面白い由面白ければ難有い仕合せ。虞美人草はわからぬ由是は少々困つた事也。もう少し賞めてもらひたい。高田が報知でほめてくれた。逢つた時よろしく願ひます。

今度の木曜に來るなら皆川君と來ぬか。（午後より）晚には寶生新が來て謠をうたつてみんなにきかせる筈。君謠がきらひなら仕方がない。

野村のうちは多勢御客があるさうだ 以上

二月十日

夏目金之助

野間真綱様

六九〇

明治四十一年二月十日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より松山市松山中學校小島武雄氏へ

拜啓漸々春暖の候に相成候處愈御清勝奉賀候却説御知り合ひの英文卒業生野間真綱事事情あつて地方へ出かせぎに参り度由にて大兄の三月限り松山を去らるゝ由を傳聞しどうか小生から其後任として推舉ある様依頼致候につき御手紙を差上る事に相成候

もし大兄の退松が事實に候はゞどうか野間君を御周旋願度ものに候。同君は御存じの通の好人物學問も小生保證致し候。履歴は陸軍士官學校、明治學院其他の英語教師に候

先は右御願迄 匆匆

二月十日

夏目金之助

小島武雄様

六九一

明治四十一年二月十日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より相模國小田原在早川村清光館林原（當時岡田）耕三へ

拜啓過日御出京の砌は御忽々にて失禮其節橋本醫士の診斷にては肺部に異狀もなき由何よりの事此上は頭の方を精々御療養御歸京相成度候小生の糖尿もさしたる事も無之比例は〇・二に候へば當分死ぬ恐も無之候。大いなる蒲鉾わざ／＼御送難有御禮申上候來る木曜には諸君子弊廬に會する約あり一きれ宛みんな

五四一

に振舞はんと存候先は右迄 匆々

二月十日

岡田耕三様

夏目金之助

六九二

明治四十一年二月十日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より府下東鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕

此次の木曜には諸君子三時頃参りてごたくに飯をくふ由。晩には寶生氏美聲にて三山實盛を謡はれ候

二月十日

六九三

明治四十一年二月十六日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓青木健作氏論文拜見致候ホト、ギスへ掲載之儀は如何様にてよろしかるべきか是非共のせるべき程の名論文とも存じ不申然し載せてはホト、ギスの資格に害を與ふるとは無論思ひ不申候。昨日青年會館にて演舌今日之を通讀問題が大に似たる處有之興味を感じ申候 以上

二月十五日

夏目金之助

高濱老兄

六九四

明治四十一年二月十七日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より芝區白金志田町十五番地野間眞綱へ

拜啓本日小島氏より返事到来一足違にて後任相きまり御氣の毒の由後任は深江種明の由に候。故に君がもし越後高田を望むならば小島よりすぐに掛合ふ故電報(可相成)にて小島氏へ依頼ある様申來り候。萬〔一〕越後の校長深江を手放さぬか又は松山難治の爲め深江の方で辭退すれば直ちに大兄を推舉可致旨に候。先は右御答迄 匆々頓首

二月十七日

夏目金之助

野間眞綱様

六九五

明治四十一年二月十八日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より府下東鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕

拜啓「御隣り」拜見仕舞の方は頗る面白く候。惜むらくは前が左程にあらず。もつと詰めたらどうだらう。然しあれでもいゝかも知れぬ

六九六

明治四十一年二月二十四日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

朝日の講演速記は未だ参らず如何なり候にやかゝりは中村翁に候。金曜に鼓を以て御出結構に存候。渴

望致候。ホト、ギスへ出す時には訂正致し度と存候。時間ガアレバア、云フ者デマトマツタモノヲ書キ度候

鼓打ちに参る早稻田や梅の宵

六九七

明治四十一年二月二十六日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區西片町十番地畔柳都太郎氏へ〔はがき〕

啓新米は仰の方正しからんと存候御注意難有候講演會の筆記は朝日で出さなければホト、ギス四月號に出る筈です夫でなければ講演集を出すさうですが多分今度は講演集は出ますまい

六九八

明治四十一年二月二十九日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚楠緒氏へ

拜復

夫から夫へと用事が出てくるので御無沙汰をして居ります。かねて願ひました小説は正月から掲載の筈の處色々な事情が出来上りまして私が大阪の方へかく事になり夫を東京へも載せる事になりました。夫が爲めあなたの方も夫ぎりに放り出して置いた譯で甚だ申譯がありません

一週間程前社の玄耳といふ男が旅行から戻りまして面會の上あなたの小説の事に就て同人も心配して居りました。其時同人の話では書きかけて下さつたのは家庭ものだらうか夫ならば繪入の方へ出しても御承知下さるだらうか、又一ヶ月もあれば纏まるだらうか杯と申して居りました。

右の譯でありますから御葉書を玄耳の方へすぐ廻して社のものを御宅へ伺は「せ」る事に致しますから、原稿の方はどうか御已めにならずに御繼續を願つて置く方が結構だらうと思ひます 先は右御返事迄 匆勿不

二月二十九日

金之助

大塚様

六九九

明治四十一年三月十二日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より芝區伊皿子町三十五番地皆川正禧へ〔はがき〕

拜啓野間の郷里の郡、村、番地御面倒ながら一寸至急御しらせ願候 以上

十三日

七〇〇

明治四十一年三月十三日 午後五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

今日の俳諧師は頗る上出来に候。敢て一葉を呈して敬意を表す 頓首

三月十四日

七〇一

明治四十一年三月十六日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

藪柑子先生「伊太利人」と申す名作を送り候。木曜に御出なければ締切に間に合ふ様取りに御寄こしか、此方より御送致す事に致候。小生演説は明日位から取りかゝる考に候。今夜御都合にて「字不墨」衣御懐中可然候

七〇二

明治四十一年三月十六日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館鈴木三重吉小宮豊隆へ〔はがき〕
拜啓此次の面會日は休日に致候につき御光來被下間敷候。 頓首

三月十六日

七〇三

明治四十一年三月十六日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より小石川區原町十番地寺田寅彦へ〔はがき〕
拜啓此度の木曜は面會日を休日と致し候につき御出被下間敷候 以上

三月十六日

七〇四

明治四十一年三月十七日 午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より麩町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕
拜啓講演をかきかけて見ましたら中々長くなりさうですがよろしく御座いませうか

七〇五

明治四十一年三月十八日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より小石川區原町十番地寺田寅彦へ〔はがき〕
日曜の音樂會には行きたいと思ふ。フロックコートを着て新らしい外套を着て行きたい。切符御求願候。待合せる時と場所御報を乞ふ。ホト、ギスへ掲載の演舌書き直して見ると中々長くなり骨が折れさう也。萬一出られねば前日迄に断はり狀を出し候。但し切符代はどちらにしても小生擔任の事に御座候。 以上

七〇六

明治四十一年三月十八日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕
ものうき爲め人間謝絶の處又々金を借せと申すもの出來候甚だ御面倒ながら銀行へ御出被下間敷や。勝手るときは御光來を仰ぐ次第に候 以上

七〇七

明治四十一年三月十九日 牛込區早稲田南町七番地より麩町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ
拜復ページ數相分り候とよろしく候へども未だ判然不仕定めて御迷惑と存候が、いくら長くてもよしの御許故安心致、可相成全速力にて取片附一日も早く御手元へ差出し度と存候。
御風邪未だ御全快無之由存分御大事に願候。本日的面會日は謝絶致候。近來何となく人間がいやになり此木曜丈は人間に合はずに過ぎし度故先達失禮ながら御使のものに其旨申入候。尤も謠の御稽古丈は特別に御座候。 呵々
鏡花露伴兩氏の作只今持ち合せず。草迷宮は先達て森田草平持ち歸り候。玉かづらは最初より無之候。近日來の俳諧師大にふるひ居候。敬服の外無之候。益御健筆を御揮ひ可然候。 以上

三月十九日

五四八

虚子様

金之助

七〇八

明治四十一年三月二十四日 牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

出来るならば一欄に組んで頂きたいと思ひます
題は創作家の態度と致して置きませう。

拜啓多分明日は出来るだらうと思ひます。十九字詰十行の原稿紙で只今二百五十枚許かいて居ります。多分三百枚内外だらうと思ひます。明日書き終つて、一遍読み直して、差し上げたいと思ひます。何だかごたくした事が出来て、少々ひまをつぶします。頭がとぎれ々々になるものだから大變な不經濟になります。 頓首

二十四日

金之助

虚子様

御風邪は如何で御座いますか。

七〇九

明治四十一年四月四日 午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆氏へ〔ほかき〕

御病氣の由精々御大事に可被成候近頃の風邪はチフスに成る傾あるとか承り候。尤も東洋城の云ふ事故あまりあてにならず候。全快の上可成早く論文御片付可然候 以上

七一〇

明治四十一年四月五日 午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ

拜啓先日は失禮其節御話し鹿兒島高等學校教師の件につき小生は文學士野間真綱を推薦致し候がもし大兄の方へも聞き合せ参り居候へば何卒同人御周旋願上度本人は第五出身にて至極の好人物且篤學の人良教師として高等學校の先生として耻かしからぬ事は受合候。目下同人は郷里鹿兒島へ歸省中。小松原氏へも其旨相通じ置候間右御舎の上宜敷御取計願度候。一寸參堂の積の處毎日々々何か事が起りつゝ容易に出られぬ事に歸着致候 以上

四月五日

金之助

芥舟老兄

七一一

明治四十一年四月五日 〔明治四十一年か〕 牛込區早稻田南町七番より下谷區中根岸町三十一番地中村幹太郎氏へ

拜啓其後御無沙汰無申譯候
偕小生知人二宮行雄より郷里のもの、碑文揮毫方を大兄に御依頼致度につき小生より紹介致し呉れ間敷

五四九

やとの希望につきもし御寸暇も有之ば此手紙持参の人に御面會の上御高教賜はり度候右川事迄餘は拜顔の上萬々可申述候 以上

四月五日

夏目金之助

中村不折様
座側

七二二

明治四十一年四月十二日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村翁へ

尊書拜見ホト、ギスは五部程もらひたれど來る人がみな持ち去りて只今一部餘り居るものを昨日芥舟先生に進呈する約束をしたる故今は小生の分(誤植を正したる)ものゝみ手元に有之。折角故社の方へ申しつかはし可申然し殘部あるや否や分りかね候間其邊は御容赦を願候。夫から毎月送る事については是迄僕が二部宛もらつて居るから其一部を君の方へ廻す事にしたらよからうと思ひ候是も社の方へ依頼致し置候森田先生は一昨日小生方を引き拂ひ下宿したり。牛込築土八幡前町二十四植木屋方に候。是は同學の高辻法學士の寓居にて同君が親切に自分の方へ來いといふからにて候。こんな時には趣味嗜好の友達より人間としての友達の方が有益なるものと被存候高辻氏は基督教のよし但し文學は一切知らぬ男なるべし春雨蕭々日來小閑を得て二三無沙汰見舞をなし居候大阪の素川氏又々來阪を促がす中々上方の花杯を見て居る譯に參らず候先達である書生が書を寄せて漱石の小説はまとめて讀むべきものなり新聞にて日々讀めばつまらぬ故漱

石の名を損するのみ早く退社せよとありたり。小生も至極御同感に御座候。然し退社して單行本ばかりでは食へないから矢張り新聞小説をかく積りに候。同書生又曰くよろしく悠々自適の生活を送るべしと。是も至極贊成に候。然し金をやるからとも何ともなきのみならず本人自身大の貧乏書生にて文を賣る口を周旋してくれと云はぬ許りの口吻也。小生此人に朝日新聞の小説欄を譲るべきか。呵々

四月十二日

夏目金之助

中村 翁 様

七二三

明治四十一年四月十七日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より青森縣北津縣郡板柳村安田秀次郎氏へ

尊書拜見致候拙著御愛讀被下候趣難有存候御手紙の次第委細承知致候面白からんと思ふ人に逢へば却つてつまらぬものに候。然し折角の御希望御序の節は御立寄相成度候小生都合は毎木曜日(雨會日)よろしけれど遠方よりわざくの御出ならばいつにても在宅の節は御目にかゝり可申候此手紙到着の節は既に東京表へ御出立の後と存候へども仰せに任せ折返し御返事如此に候 以上

四月十七日夜八時半

夏目金之助

安田 秀次郎 様

七二四

明治四十一年四月十九日 午後八時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區金助町二十七番地清秀館安田秀次郎氏へ〔はがき〕
御手紙只今拜見明日御出被下候て差支無之候右御返事迄 草々頓首
四月十九日八時

七二五

明治四十一年四月二十六日 午前(以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より赤坂區表町一丁目一番地戸田方松根豊次郎へ〔はがき〕
春色到吾家
おくれたる一本櫻憐也
南風故國情
逝く春やそゞろに捨てし草の庵
右御採用にはなりませんか

七二六

明治四十一年五月六日 午後零時一七時 牛込區早稻田南町七番地より府下東鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ〔はがき〕
端午の贈物難有存候。薰風南より來つて日々無腸の鯉をふくらます。天下の新緑又愁人の眼をよろこばしむ。多謝々々

七二七

明治四十一年五月六日 午後六時一七時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ
拜復
あの女はほかに行く處がきまつてゐる由御失望御察し申候へども一方にては大いに賀すべき事に候學校を卒業もしないうちからさう萬事が思ひ通りに運んでは勿體な過ぎますさうして人間が一生グウタラになります。勝者は必ず敗者に了るも〔の〕に御座候。ことに金や威力の勝者は必ず心的の敗者に了るが進化の原則と思ひ候。先は右御祝辭迄 草々頓首
五月六日

金之助

豊隆様

七二八

明治四十一年五月八日 午前十二時一十二時 牛込區早稻田南町七番地より大隅國重富村平松野間眞綱へ〔はがき〕
御令閨御安産のよし奉賀候愈おとつさんの責任を生じ候事大事件に有之候。造士館の方の成功を祈る

七二九

明治四十一年五月十一日 午後五時一六時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚楠緒氏へ
拜啓御手紙拜見致候先月中より御病氣の趣始めて承知ことに御輕症にてはなき御容子切に御加養を祈り

候。新聞の方御心配に及ばず小生どうせ一兩日中に澁川氏へ参る積につき面會の上萬事同氏へ相談可致置候につき御介意なく御療養可然と存候もし御轉地先にて御徒然の餘り御執筆の運にも至り候へば好都合と存じ夫のみ祈り居候

そらだきは文章に御苦心の様に見受申候趣向は此後如何發展致し可申や御完結の上ならではと存じ凡て差控申候

藤村氏のかき方は丸で文字を苦にせぬ様な行き方に候あれも面白く候。何となく小説家じみて居らぬ所妙に候然しある人は其代り藤村じみて居ると申候。あれも長きもの故萬事は完結後ならでは兎角申しかね候

さし繪御氣に入らぬ由残念に候。然し普通の新聞さし畫はまああんなものぢやありませんか。

轉地はどこへなさいますか。あんまり小田原近所だと却つて肺病に危険だからよせと醫者から云はれた人があります。あなたのは肺炎だから左程傳染の心配はないでせうがまあ可成安全な所へ入らつしやい。

此手紙は候文と言文一致の相の子の〔手紙〕であります 頓首

五月十一日

金之助

大塚楠緒子様

一週間に一返手紙をよこせとか毎日よこせとか云つて無花果を半分づゝ食ふ所がありましたね。あそこが面白い。今迄ノウチデ一番ヨカツタ

明治四十一年五月十六日 午前六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚楠緒氏へ

拜啓今夜澁川君から別紙が参りましたから御参考の爲めに御目にかけてます。もし御都合であとが書く事が出来れば私も結構社の方も大喜に候。只今主筆池邊氏被參無理に御執筆を願出御心の通りのもの出来ねば御氣の毒であり且それが爲め御病氣に障る様な事があつては濟まぬと申され居り候へば決して御心配には及び不申只私共の希望丈を申上るのみでありますから其積で御讀を願ひます 草々頓首

五月十五日夜

金之助

大塚楠緒子様

明治四十一年五月十八日 午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

啓

飛んだ夢を御覽になつたものに候。あんな夢はかいてくるに及ばず候。近頃の様になまけて居ては駄目に候。もう少し勉強をなさい。

坑夫の校正は大抵にてよろしく候。少し位誤植があつても平氣に候。讀む人は猶平氣に候。大塚さんのそらだきが好評噴々の由社より報知有之先以て安心致候。池邊主筆曰くあれは中々うまいです。池邊主筆すらうまいと云ふ。讀者の歡迎するや尤なり。

追々短篇をちよい／＼かく積りに候。

筆はルイレキの由度々御面倒に御座候。うまいものを食はせて夏は海岸へでもやらうかと存候。妻君未だ臥床困り入り候。いゝ加減に死んで呉れぬかと相談をかけ候處中々死なない由にて直ちに破談に相成候。

サランポーと云ふものを讀み居候。瑰麗無比のものに候。中々うまいものに候。フローベルは兩刀使に候。エラク候。今夜寐しなに御手紙をかき候是も入らぬ事に候。只筆が持ちたくなつたからに候。草々以上。

五月十七日夜

金之助

豊隆様

七三三

明治四十一年五月十九日 午後一時—二時 牛込區早稻田町七番地より相模國小田原在早川村湯光館林原(當時岡田)耕三へ [はがき]

先日は失禮大阪の日曜附録には蕪稿掲載なし多分此つぎ位に廻したるならん。病氣御大事に御療養の事。小生無異

五月十八日

七三三

明治四十一年五月二十八日 牛込區早稻田町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓

此手紙持參の人は宮澤録一郎とて俳道執心のものに有之よし今般四年がかりにて俳諧辭書編輯を了へ大倉書店より出版につき大兄の序文もしくは校閲願度旨にて參上仕候につき御面倒ながら御面會相願度と存候本人は小生未知の人に候へども大倉書店よりの依頼にて一筆申上候たゞし大兄には運座の節一兩度御目にかゝり候由先は右常用のみ 草々不一

五月二十八日

金之助

虚子先生

梧下

七三四

明治四十一年五月三十日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ [はがき]

拜啓木曜には雨天にて御出無之。俳諧師頗る面白く候。十風が北海道へ行つてからが心配に候。あともどうかあの位に御振ひ可被下候。

七三五

明治四十一年六月七日 午前(時間不明) 牛込區早稻田町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村翁へ

拜啓今回の演説再應御依頼なれど胸中無一物にて發展致し様も無之甚だ我儘ながら此次へ御廻し被下度候戸張岩村兩氏へ露伴氏でも加へたらば丁度よき時間と存候大塚氏辭退は如何なる譯にや残念に候。

御斡旋の御都合も有之べくと存じ折返し御返事申上置候 以上

六月七日

中村 蒨 様

夏目金之助

七二六

明治四十一年六月十四日 午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より鹿兒島市山下町四百四十番地上村清延氏方野間眞綱へ

久々にて御手紙拜見鹿兒島の方は其後どうなる事と思つて居つた處漸く落着是で君も當分安心御親父も御都合よく大に結構 小松原氏も居る事だから萬事便宜だらうと思ふどうか強勉して學校並びに自分の爲になる様に働らかれる事を望む。小兒が大きくなつた由小兒の大きくなるのは實に早いものでおやぢは毎日の様に驚ろかされるものだ。僕のうちは惣勢五人で今年の末か來年正月頃には又生れるさうだ。かう毎年多事になつてはたまらない。人口を繁殖して御上に御奉公をする割には収入が増さないから、いかに愛國の士でも御奉公は考へものである。皆川には其後二遍逢つた。畔柳は喉頭結核にかつた。君も身體を大事にせんといけない。野村は氣樂らしい。あの男はからだ丈は大丈夫らしい。マードックさんは僕の先生だ。近頃でも運動に薪を割つてるかしらん。英國人もあんな人許だと結構だが、英國紳士杯といふ名前にだまされて飛んだものに引かゝる。櫻島の温泉に遣入つて見たい。此間橋口の弟が歸省したが君には逢へなかつたさうだ。人吉迄瀛車がかつたさうだ。政摩川の沿岸の景色は定めて好いだらう。おとつさんが硯を呉れると云ふなら是非もらひたい。但し急がないから忘れない様に御父さんに話して置いてくれ給へ年寄は萬事忘れつほくつて困る。僕は野村に新婚の御祝をやらうと思つていまだに忘れてゐる。又其う

ち小説をかき出すといそがしくなる。先は右迄 草々頓首

六月十四日

金之助

眞 綱 様

七二七

明治四十一年六月十九日 午前九時—十時 牛込區早稲田南町七番地より芝區伊皿子町三十五番地菅川正禮へ (ほかき)

拜啓御惠投のぜんまい到着難有候あれは水につけてふやかすものかと存候 以上

十九日

七二八

明治四十一年六月二十一日 牛込區早稲田南町七番地より府下青山原宿二百〇九番地森次太郎氏へ

先刻は失禮御依頼の發句二つ程短冊に認め入貴覽候御氣に入らぬ方を御捨て可被下候

右當川迄 草々頓首

六月二十一日

夏目金之助

森 様

七二九

明治四十一年六月二十一日 午後五時—六時 牛込區早稻田町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村齋へ

拜啓陽炎拜見頗る面白く候はやく後篇を御廻附あり度候愚見は御目にかゝりたる時可申上候わる口も申上度候。然しあれは紙上にて大喝采を博す小説に相違無之ひそかに君の成功を祝し申候も少しハイカラに書くか洗練して「春」の後を飾り度心地も致し候。委細は御目にかゝりたる時に譲り可申右不取敢申上候 以上

六月二十一日

夏目金之助

中村 翁様

PHIO

明治四十一年六月三十日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田町七番地より赤坂區表町二丁目二番地戸田方松根豊次郎へ 「はがき」

悼亡

青梅や空しき籠に雨の糸

六月晦日

PHII

明治四十一年六月三十日 午後三時—四時 牛込區早稻田町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ 「はがき」

今日の北湖先生磊々として東西南北を壓倒致し候には驚入候欣羨々々

五月雨や主と云はれし御月並

六月三十日

PHIII

明治四十一年七月一日 午後三時—四時 牛込區早稻田町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高瀬清氏へ

拜復小光はもつとさかんに御書きになつて可然候決して御遠慮被成間敷候今消えては大勢上不都合に候。鼠骨でも今日の彌次郎兵衛の處は氣に入る事と存候。「文鳥」十月號に御掲載被下候へば光榮の至と存候。十月なれば東朝へ承諾を求むる必要も無之かるべくと存候。文鳥以外に何か出来たら差上べく候へども覺束なく候。ドーデのサツフォオと云ふ奴を一寸御讀みにならん事を希望致候名作に御座候。俳諧師の著者には大いに参考になるだらうと存候

今日の能樂堂例により不參に候。明日御令兄宅の御催し面白さうに候。ことによれば拜聴に罷り可出候。小生夢十夜と題して夢をいくつもかいて見様と存候。第一夜は今日大阪へ送り候。短かきものに候。御覽被下度候。盆につき親類より金を借りに參り候。小生から金を借りるものに限り遂に返さぬを法則と致すやに被存甚だ遺憾に候。おれが困ると餓死する許りで人が困るとおれが金を出すばかりかなあと長嘆息を洩らし茲に御返事を認め申候 頓首

七月一日

鮫鱈や小光が鍋にちんちろり

金

虚子先生

座右

七三三

明治四十一年七月四日 午前十二時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓又餘計な事を申上て済みませんが小光入湯の所は少々綿密過ぎてくだ／＼敷はありませんか。小光をも描かず小光と三藏との関係も描かず、云はゞ大勢に關係なきものにて只風呂桶に祇徊してゐるのではありませんか。さうして其低徊がそれ自身に於てあまり面白くない。どうか小光と三藏と雙方に關係ある事で段々發展する様に書いて頂きたい。さうでないかと相撲にならない。妄言多罪 頓首

四 日

金之助

虚子先生

七三四

明治四十一年七月五日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉鎮小宮豊隆へ 〔はがき〕

前文御川捨御尋ねの豊彦は勿論豊國の間違に御座候どうか直して下され

七月五日夜

七三五

明治四十一年七月十一日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ 拜復

御ふさ〔さ〕んは異存はなからうと愚妻が申します。然し松根がもらひたひのですかあなたが御周旋になるのですか伺つてくれと申します。

御ふささんは妻のイトコです貧乏です。支度も何もありません。以上

七月十一日

金

虚子様

七三六

明治四十一年七月十二日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

又啓

あなたが此事件で歩を御進めになれば自然松根に直接意見をきく事になります。さうすると公平を保つ爲めに私の方でも御房さんに其事を話さなければなりません。即ちあなたの思ひつきで松根に向つて御房さんをもらはないかと口をかける由と通知するのであります。それで本人が否だといふたら直ぐ無駄な御骨折を御中止を願ひます。又異存なしと答へたら何分にも御面倒を願ひませう。只今愚妻留守につき歸り次第御房さんの考を〔き〕かせますから左様御承知を願ひます 頓首

七月十二日

金之助

虚子先生

明治四十一年七月十三日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田町七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

拜啓國元よりの御手紙にて御歸國の處御親父の御逝去に間は合はず御心残り無此上事と存候諸事御片付方囁かし御心配と遙察致候御身御大事に暑中御厭ひ萬障を排し御奮戰の義偏へに願候委細は東京にて拜眉の上萬々可申述不取敢御弔詞迄如斯に候 以上

七月十三日

金之助

三重吉様

明治四十一年七月十四日 午後二時—三時 牛込區早稻田町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

謹白

「私は無教育でありまして到底高等の教育を受けた人の奥様になる資格はありませんが——もう一年も仕事でも勉強して——」

御房さんがこんな事をもしくは之に類似した事を愚妻迄申し出たさうです。これに由つて之を觀ると謙遜の様にもあり。いきたい様にもあり。一寸分りません。然し否ではないんでせう。さう手詰に決答を逼る必要もないから愚妻はよく御考へなさいと申したら、御房さんはよく考へて見ますと申ししたさうであります。

右は小生の直接研究に無之候へども大體の見當は間違つた愚妻の報知とも思はれません
右迄 草々
七月十三日
金

虚子先生

明治四十一年七月十八日 午前六時—七時 牛込區早稻田町七番地より京都市室町通今出川下九高島氏内中村翁へ

拜啓御令弟突然御死去の爲め御西下の趣拜承嘸かし御愁傷の事と遙察致候乍然例の病氣にて長びきては御本人は無論大兄も随分御苦痛の事と存候へば天壽にて早世被致候方將來の爲には却つて御都合かとも被存候

玉稿「春」のあとへ出す鳥の後に相成候趣御經濟の方は夫にてよろしきや。小生は阪朝鳥居君の依頼にて九月初旬より掲載の小説にとりかゝる筈なれども原稿料其他にて大兄の御不都合を招く事あらば「春」のあとへは寧ろ掲載を望まぬ方に候。何れ其うち御歸京とも存じ候へば御面會の上諸事御相談致度と存候
先は右御弔詞旁常用のみ申述候 頓首
七月十七日夜

金之助

中村 翁様

七四〇

明治四十一年七月二十一日 午後二時—二時 牛込區早稻田町七番地より藤布區山元町三十六番地小島武雄氏へ
啓上御尋ねの伊藤政市君につき皆川正禧氏より別紙の如き回答有之候故爲御参考入御覽候
先〔は〕常川迄 艸々以上

七月二十一日

夏目金之助

小島武雄様

七四一

明治四十一年七月二十一日 午後八時—九時 牛込區早稻田町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕
要するにプロフェソの批評はプロフェソの人物の如きものである。自分が知らない水練の批評を講
堂ですると同じである。彼はかれの力學をすぐ實際に應用出来ると思へり。それすら亂暴也。況んや其力
學の頗る覺束なきをや

只今春陽堂來る。十六頁程多しと云へり

獨乙のプロフェソは蒞蕩問答の様ナ愚論ヲシテ居ルノデハナキカ。

七四二

明治四十一年七月二十三日 午前八時—九時 牛込區早稻田町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱澄氏へ

拜啓別封花物語は眞彦より送り越し候もの中には中々面白きもの有之出來得るならば八月のホト、ギス
へ御出し被下度候

新旅行小石川同心町の住人代稽古に參り候中々上手に御座候何と申す人にや大藏省へ隔日に宿直する人
の由

修善寺は如何に候ひしや 頓首

七月二十三日

金

虚子先生

七四三

明治四十一年七月二十七日 午前十時—十一時 牛込區早稻田町七番地より愛媛縣温泉郡今出町村上平太郎氏へ

酷暑の砌愈御清勝奉賀候小弟無異碌々消光御休神可被下候。拙作御所望にあづかり汗顔只今東朝に「春」
と申す長編掲載のあとを引き受ける事に相成九月初より兩新聞に又々顔をさらす始末にて只今腹案を調
へ中三四日中に執筆に取りかゝり度と存居候へども何だか漠然として取り留めなく自分ながら恐縮の體に
御座候。掲載の上は何かど御助力にあづかり度と存候
近來俳句を作らず作らうとしても出來かね候。道後の温泉へでも浸らねば駄目と存候

まのあたり精靈來たり筆の先

七月二十七日

金

五六七

霽月老臺

座右

五六八

七四四

明治四十一年七月三十日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より佐世保市港町四十一番地石井氏内鈴木三重吉へ

御手紙拜見東京の暑は大變なもので此二三日は非常に恐縮して小さくなつてゐる。夫でも堪らないから時々湯殿へ行つて水を浴びて漸く凌いで見たがすぐからだがほてつて気が遠くなつて仕舞ふ。そこへもつて来てエルドマン氏のカントの哲學を研究したものだから頭が大分變になつた。どうかトランセンデンタル・アイに變化して仕舞たいと思ふ。

小宮からも手紙が来て君と停車場で落ちつたとかいてある。何でも洋服屋の小僧に逆鱗してゐたとかいてあつた。小説をかゝなければならぬ。八月はうん／＼云つて暮す譯になるが、まあ命に別條がなければいゝがと私かに心配して居る。君の手紙や小宮の手紙を小説のうちに使はうかと思ふ。近頃は大分ずくなつて何ぞといふと手近なものを種にしやうと云ふ癖が出来た。

小宮ノ婆さんは達者なのさうだ。風邪でも引いて寐てゐる。呉れなければ折角歸つた甲斐がないと云つて来た。

藩主の弟が死んで今日は市ヶ谷から染井迄香爐持に雇はれたと東洋城から云つて来た。今日は君大變な暑さだ。東洋城が途中でひつくり返りはしないかと思ふ。大方神主の服装を着て行つたのだらう。神主の服に夏服があるかな。

あまり暑いからはで御免蒙る。 艸々頓首

七月三十日

金

三重吉様

七四五

明治四十一年七月三十日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

拜啓 道中の手紙も着の手紙も到着拜見。御婆さん御無事の由結構に存じます。第一銀行の株は其後又下がつた様だよ。東京は熱い事夥だしい水を二三度浴びてゐる。明後日あたりから小説をかく。君や三重吉の手紙もことによつたら中へ使はうかと思ふ。

家内無事妻君の御腹は段々擴張。筆はブツ／＼が出来て貧民の餓鬼の様である。猫が無暗に反吐を吐いて始末がわるい。森田草平横寺町正何とか院へ轉居。東洋城香爐を捧けて御葬に染井迄行く藩主の弟が死んだのださうだ。

割合に蚊が少なくて凌ぎいゝ。夜此手紙と三重吉への手紙とそれからもう一本かく。珍らしく近所で義太夫を語つてゐる。何だか分らない。負けない氣で謠でもやらうと思ふが一人では心細いから虚子先生を待つてゐる。 艸々

木曜の晩

七月三十日

金之助

豐隆様

五六九

明治四十一年八月三日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より福國縣京都郡厚川村小宮豐隆へ

小説はまだかゝない。いづれ新聞に間に合ふ様にかく。中々あついで。田舎も東京も同じくわるい人が居るのだらう。此分では極樂でも人殺しが流行るだらう。僕高等出齒龜となつて例の御嬢さんのあとをつけたり。歸つたら話す。小供が丸裸である。どうも天真爛漫として出来ものだらけだ。驚ろいた。

明治四十一年八月十九日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

御書面拜見朝日への短篇遂に御引受のよし敬承御多忙中嘸かし御迷惑と存候然し是にて澁川君は大なる便宜を得たる事と存候

今日「三四郎」の豫告出で候を見れば大兄の十二日の玉稿如何にもつなぎの様にて小生は恐縮致候。全く大阪との約束上より出でたる事と御海想願候。「春」今日結了最後の五六行は名文に候。作者は知らぬ事ながら小生一人が感心致候。序を以て大兄へ御通知に及び候。あの五六行が百三十五回にひろがつたら大したものなるべくと藤村先生の爲めに惜しみ候

昨紅綠來訪久し振に候。紹縮緬の羽織に紹の繻絆をつけ候。なか／＼座附作者然としたる容子に候ひし大兄を訪ふ由申居候参りしや。暑氣雨後に乗じ捲土重來の模様小生の小説もいきれ可申か 草々

八月十九日

金之助

虚子先生

明治四十一年八月二十四日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より麻布區山元町三十六番地小島武雄氏へ

拜啓大谷繞石君今般金澤高等学校へ赴任相成候については其あとが明く様子に候。眞宗大學京北中學東洋大學の三所に候。大谷君は後任周旋の委任を受け居らぬ由にて各自學校にて人撰中との事に候。御運動如何にや。右一寸氣つき候まゝ御通知申上候 以上

八月二十四日

夏目金之助

小島武雄様

明治四十一年八月二十四日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より府下區葛西町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ

此間は御出の處謠の稽古中にて御歸りの趣夢十夜の晝大仕事と存候今日冷氣にて少々意外に候。今年は夏の方がいゝ心地に候。秋がくるのがいやに候。

社から月給をもらひたいに付ては御ひまな時封入の名刺を以て京橋區瀧山町四の社の會社へ行つて御受取を願度と存候。二十五日の午後が渡す日なれど今月末迄のうちにていつにてもよろしく候 用のある時丈使つて濟まぬ事と存候。小説如何なり候や。小生も折角苦心中心。八重子様へよろしく 以上

八月二十四日

豊一郎様

五七二

金之助

七五〇

明治四十一年八月三十一日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓森田友人にて高辻と申す法學士が謠がすきで今度の日曜に僕の宅へ来て謠ひたいと申すよしに候。所が先生非常の熱心家なれど今年の正月からやつたのだから僕と兩人でやつたらどんな事に相成り行くか大分心細く候につき音頭取りとして御出が願はれますまいか。其上高辻氏は何を稽古してゐるか分らず小生の番數は御承知の通り共通のものがなければ駄目故旁御足勞を煩はし度と思ひますがどうでせう。此人は城數馬のおやぢさんに每晚習ふんださうです。きのふも尾上に習ひました。尾上は中々うまい。溫泉宿完結奉賀候趣意は一貫致し居候様に被存候が多少説明して故意に納得させる傾はありますまいか。一篇の空氣は甚だよろしき様被存候。三四郎はかどらず昨日の如きはかゝうと思つて机に向ふや否や人が参り候。是天の呪咀を受けたるものと自覺しとう／＼やめちまいました。右當用に添へ御通知申上候 草々

二百十日

金

虚子先生

七五一

明治四十一年九月五日

(時間不明)

牛込區早稻田南町七番地より麻布區山元町三十六番地小島武雄氏へ

拜啓明治學院講師皆川正禧氏今般鹿兒島高等學校へ赴任につき後任として大兄を推舉する様野間眞綱氏より依頼ありたる旨につきもし御希望も有之候へば芝伊皿子三五番地皆川正禧宛にて履歴書至急御送り相成〔度〕由に御座候先は右當用迄 草々頓首

九月四日午後

夏目金之助

小島武雄様

七五二

明治四十一年九月十一日 午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より鹿兒島市下濠尾町百九十一番地野間眞綱へ

拜啓皆川は立ち申候鹿兒島中學の教師として副島は如何に候や三次には氣候其他の關係にて在任希望せぬことに先頃より持病とかにて郷里に歸省中とか申來候が目下もはや歸任せるや否や存じ不申。同人かねての志願に海岸にて暖かき所と有之便利は大分あしき様なれど郷里にも近ければ如何ならんかと存候。右用事迄申入候 以上

九月十日

夏目金之助

野間眞綱様

五七三

に候や。有體を申せばあの方は増版の時に何とか御再考を願はんかと我儘な事を希望致し候がどうでせうか

五七六

小説濟しだい參上御禮可申上候。

インキ壺の中の銀ツボ〔の〕義其道のもの、説を承はり候處矢張腐蝕の憂有之由エナメルでも掛ける譯にはいかぬものにやもし御序も有之候は、御相談願上候。貢様へよろしく 以上

九月十六日

橋 口 様

金之助

七五六

明治四十一年九月二十一日 午後四時—五時 牛込區早稻田南町七番地より淺草區代地瓦町小山内兼氏へ〔はがき〕

啓先日は御親切に貴著「窓」御寄贈にあづかり難有存候拙作「草合」御禮のしるし迄に一部進呈仕度と存候小包にて差出置候間御落手被下度候 草々頓首

九月二十一日

七五七

明治四十一年九月二十九日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より水戸市釜神町三番地菊池謙二郎氏へ〔はがき〕

啓上

佳肴厨に來り青燈室を照す北人南人秋古今なり深謝

拙著草合春陽堂に托して御届可申候御落手願上候

二十九日

七五八

明治四十一年十月四日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

Urban, Die Literarische Gegenwart 3,25

なるもの丸善ニ來レリ。

買フ氣ハナキカ

七五九

明治四十一年十月十二日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より府下巢鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ

先日は失敬御病人御變もなき由御大事に可被成候當分自炊の由随分厄介な事と御察し申候

入院證御依頼の通捺印御廻送及候御受取可被下候

朝寒や自ら炊ぐ飯二合

十月十二日

金之助

豊一郎様

七六〇

五七七

明治四十二年十月十九日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より千葉縣成田町田中屋鈴木三重吉へ

五七八

愈御乗込のよし定めて御地は大賑の事と存候東京では成田へ行つたから成田屋あとみんなが申居候然るに住所は當分田中屋のよし。多分宿屋と存候。随分酒を御飲過にならぬ様願上候

小生八王子以來生活機能の降下を示し何にもたべる慾心無之。實は驚居候。然し毎日一食位で事が濟めば結句難有ものに候。四十二の厄から生活組織一轉日々紅茶一碗を口にするのみ。それでも童顔ピン／＼して健康少年を凌ぐとか何とか後世の史家に書いて貰はうと思つて居る。エイ子熱が出て四十度になる四五日同じ事。何の爲の熱やら分らず。ゆふべは熱の爲の悪感^原を癢^{イシ}擧と間違へて青くなる。昨日は猫の三十日に當る。細君鮭一切れと鰹節飯一碗を佛前に供す。筆子ヴィオリン入學。虛子近來木曜に來らず。文部省の美術展覽會は愚なり。和田三造の鐵工場見られざる^原なるなり。小説の方が晝より數等進歩して居る。目出度／＼ 草々

十月十九日

金之助

三重吉様

いつか參らんと存候。御前様^{ゼンサマ}へ宜敷願上候。秋晴に印幡沼の鰻の居所を見てあるきたく候

七六一

明治四十二年十月二十三日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高瀨清氏へ

啓寺田に聞いて見ました處小説集に名前を出す事はひらに御免蒙りたいのなさうであります。序の事は

本人は知らないらしかつた。然し厭でもないのでせう黙つてゐました。一遍集めたものを讀み直した上の事に致したいと存じます 以上

十月二十三日

金之助

虛子様

七六二

明治四十二年十一月六日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町紅養館林原(當時岡田)耕三へ

拜啓先日はわざわざ御來訪の處御遠慮にて玄關より御引取遂に不得御面語甚だ遺憾に存候其節の頂戴物正に拜受難有候御禮を申さうと思つた〔が〕君の宿所が分らぬ故其儘にして置き申候三女は腸チフスで一時は熱が高く弱つたれど只今は回復期に向ひます^原安心に候家族が多いと始終何かある寧日なき有様夫でも多數の人よりもまだ／＼大分幸福の方ならん君も大分一身上の心配やらごたく／＼やらある由頭の具合近來は如何にや

草合せを上げやうと思つて居たが皆なくなつて仕舞つた。三四郎が本になつたら上げやうと思ふ。

右迄 草々

十一月六日

金之助

岡田耕三様

五七九

七六三

明治四十一年十一月二十日 午前十時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より牛込區横寺町正定院内森田米松へ〔はがき〕
今二十日の國民文學抱月君の談話を御覽下さい。君はプロットを排斥してゐる。さうして「壁」に就ての自説を辯護してゐる。其辯護を煎じつめるとつまりプロットが好いからと云ふ事に歸着しさうだ。どうぞ御覽下さい。
ロジカル先生閣下

七六四

明治四十一年十一月二十二日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より愛媛縣温泉郡今出町村上平太郎氏へ
過日御來京の節はわざわざ御枉駕を辱ふし千萬難有候生憎例の多忙にて何の風情も無之失敬平に御容赦被下たく候御惠送の砥部焼安着厚く御禮申上候。只今東京は日々好天氣にて小春の好時節に候。御地も定めて併興多き空模様ならんと遙察致候萬事期再會 以上
十一月二十一日

夏目金之助

村上霽月様

七六五

明治四十一年十一月二十三日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より千葉縣成田町横町黒川氏方鈴木三重吉へ

御手紙拜見仰の如く文學評論で大弱りの状態しかもくだらぬ努力故つくづくいやに成候此分にては當分成田行も駄目に候。

東京は日々好天氣小春うれしき日向也。新小説は御見合せの由残念に候。何でも書いたらよからうと思ひ候

草平氏相變らず煤烟に腐心。文壇の現況に憤慨來年は大いに評壇を賑はすと申居候、如何にや。横丁の先生もちと御奮發ありたく候。先日御能を久し振りにて拜見中々退屈のものにて候。其時秋聲君に紹介され候。子供まだ尊を離れず。細君の腹愈せり出せり。夫子フラネルの腹巻す。

右の條々迄

十一月二十二日

金之助

三重吉様

七六六

明治四十一年十一月二十九日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕
今日は難有候ダナンチオあらば買つていたゞき度候、紅葉狩は郵便で送り候

十一月二十九日

七六七

明治四十一年十二月十九日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より千葉縣成田町吉妻屋鈴木三重吉へ

又々御轉宅のよし承知致候學校定めて御多忙の事と存候休みには泊りがけに御出京可然候。先達泥棒這入る。兩三日前赤ん坊生る。是にて今年も無事なるべきか。文壇紛々悉く是空洞の響なり。壇上の人亦遊戯三昧と心得て一生を了し得べし。馬鹿々々しき事を馬鹿々々しく思ひつゝ眞面目に進行さする事遊戯三昧の境に達せざる時は神經衰弱となり喪心失氣となる。天壽可惜。閑日月を抱いて齷齪の計をなす。可ならずとせんや。草々

十二月十九日

三重 吉様

金

七六八

明治四十一年十二月二十日 午後零時一十時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

先達ての論文を出すなら新聞では到底載せ切れまい。雑誌がよろしからう。新らしく書くなら新聞でも差支あるまじ。

あんまり僕をたよりにすべからず自分の考を自分で書いて漱石何かあらんと思ふべし。早稲田のあるもの、書いたものは驚ろくべく愚也。あれは生活難の爲に先輩の指導を受くる餘裕なきによる。あゝならぬ君は幸福なれど餘裕あるが爲に萬事僕に見せてからの何のと思案するは獨立心なき事なり。是でよいと自己を極める分別ありたきものなり。

文壇に出る一步は實際的ならざるべからず。今の愚なるものに分り易く、讀み易く、相手になる様に見

えて、悔りがたき思を起さしめざる可らず。従つて論旨は短からざるべからず、興味は時事問題ならざるべからず、其他色々の資格なかるべからず。之を重ねて行くうちに自から大いなる根底ある議論を出して人も人が讀む様にも耳を傾ける様にも（今の様に生活難と黨派心が盛では夫でも六づかしい）なる。始めから偉いものを書いたつて人は相手にしない。相手にするものは日本に五六人しか居ない。而して其五六人はみんな黙つて相手にしてゐるのみである。

文壇に立つものはあらゆる競争排擠に伴ふ墮落的行動に對して從容事を辨ぜざるべからず。もし清きを以て自ら居り高きを以て自から處せんとせば一日も留まるべからず。

文壇の諸公皆賢なるにあらず。又正なるにあらず。而して賢の如く正の如くに見せる術を日夜に講じつつあり。憤るべからず。社會が胡魔化される程度にあるが爲なり。傍觀すべからず。社會は進む期なし。

今の文壇に立つものより生活難を引き去れ彼等の十中七八は喜んで文壇を引き上ぐべし。彼等は文壇に立ちながら苦悶しつゝあり。

君もし以上の諸件を承知の上ならば筆を執るも可なり。たゞ一時虚子の依頼にて出來心よりするは人魂のふわつく姿なり。夫にてもよし人魂を以て任するがいやならば始めから其覺悟をせざる可らず。

今の自然派とは自然の二字に意味なき團體なり。花袋、藤村、白鳥の作を難有がる團體を云ふに外なら

す。而して皆恐露病に罹る連中に外ならず。人品を云へば大抵君より下等なり、理窟を云へば君よりも分らずや多し。生活を云へば君よりも甚しく困難なり。さるが故に君の敢て爲し能はざる所云ひ能はざる所を爲す。君是等の諸公を相手にして戦ふの勇氣ありや。君を此渦中に引き入るゝに忍びざるが故に此言あり。以上

十二月二十一日^原

夏目金之助

小宮豊隆様

七六九

明治四十一年十二月二十六日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓ホト、ギス昨廿五日と今二十六日をつぶし拜見諸君子の作皆面白く候。其中で白川のが一番劣り候。あれは少々イカサマの分子加はり居候。他は皆眞物に候。

大兄の作先夜伺つた時は少々失敬致しよく分らず仕舞の處活版になつて拜見の上大いに恐縮あれは大兄の作つたうちにて傑作かと存候

猶向後もホト、ギス同人の健在と健筆を祈りて聊か茲に敬意を表し候。他の雜誌御覽なりや。どの位の出来か彼等の得意の處を拜見致度候 以上

十二月二十六日

金

虚子様

子供の名を伸六とつけました。申の年に人間が生れたから伸で六番目だから六に候。此間の且は取消故併せて御吹聴に及候

ホト、ギスは廣く同人の小説を掲載すると同時に大いに同人間の論客を御養成如何にや。樂堂の舞踏談杯面白く候

七七〇

明治四十二年一月二日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ヶ谷田町二丁目一番地馬場勝彌氏へ (はがき)

恭賀新年

御病氣の由御大事に可被成候小生なまけてどこへも年頭に參らず、賀狀も返事を出す丈に留め居候。いづれ永日萬々
煤烟出来榮ヨキ様にて重疊に候

七七一

明治四十二年一月七日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より青森縣三戸郡是川村市川文丸氏へ

拜啓御歸省中の由承知仕候定めて雪深き春を迎へられたる事と存候當地別に變りたる松飾もなく無事の正月に候

御惠送の山鳥一羽安着御芳志難有候先年の一夕を思ひ出し候來る人あらば又一椀の羹をわかたと存候御川立申候金子については御心配御無用に候
寒氣烈敷砌隨分御自愛可然 草々頓首

一月七日

夏目金之助

市川文丸様

七二二

明治四十二年一月十日 牛込區早稻田南町七番地より坂元三郎へ

病氣中長い手紙を難有う。長い手紙をかくのは難儀だが貰ふ方は面白いものだ。此間は妙な關係で敦賀に居る若い婦人から君の二三倍ある手紙を受取つた。是も面白かつた。昔し正岡杯と往來する時分には随分ひまに任せて長い手紙のやりとりをした。今では忙しくてとても出來ない。此間も大阪から「原稿まだ出來ませぬか」といふ電報をかけられて大に狼狽した。新年の原稿さへ書けないのだから長い手紙は書けないのも無理はない。

高須賀が來たから君も病氣ださうだといふと何金病でせうと答へてゐるが矢張り本當の病氣の様に見える一體どんな徵候なのかね。諺をうたふ位ならば大した事もないのだらう。がまづ／＼用心し玉へ。高須賀が金山の話やら品川埋立事件の話やら何でも大分面白い話をして呉れたので新年に餘程變化のある世界を見た。そのあとへ僕の小學校の友達キーちゃんなるものが何十年振りで尋ねて來て、是又鑛山の話をした。會津の奥で千二百萬坪の鑛區をかりて月々税金納て居る。時機を見て採掘をやるといつてゐた。袂か

ら妙な石を出して是れがその蛋白石だと教へてくれた。随分面白い人がやつて來る。一番陳腐なのは雑誌記者だらうと思ふ。主人公に何等の利益をも與へない。夫でもつて來て雑誌へ人のわる口を書く。會津の奥で蛋白石でも搜してゐる方が餘程氣が利いてゐる。

君の友達の話は中々面白い少し工夫したらば種になる様に思ふ。わざ／＼の御報知難有い。水彩は全く廢止だから上げない。これで實は水彩に愛想をつかして書かないのぢやない。書くひまがないのだ。からだは病人の様に机にばかりへばりついて、夫で頭丈火の車の様に働らくべく餘儀なくされてゐる。文學も大きな世間を見渡すと窮屈千萬で人間がシミタれて、顔が蒼くなつて、胃病や脳病が起つてよくない様だ。

今年は元日には諺はなかつた其代り大晦日に松根東洋城と二三番諺つた。八日に新が黒紋附を着て來て稽古初めをして呉れた。土車といふのはゆるしものださうだが是を少し教はつた。御産はあつた。母子共健全。申の年に生れた人間で六人目だから伸六とつけた。人間も半ダース子供がある様では頗る時勢後れだ。一人が十分づゝ泣いても丁度一時間かゝる。八釜敷事甚しい。彼等の前途を考へると皺が寄りさうである。

申の年の子丈あつて頭に毛が眞黒に生えてゐる。四五年前生れた子は頭がはけて居た。妊娠中○○○○○○○○○ぢやないかと思つて大いに恐れを抱いてゐたら、漸く人間並に毛が生えて來た。妙なものだ。雪が降るので火鉢を擁して此手紙をか。夫から又原稿をか。何でも夢十夜の様なものとの註文だから毎日一つ宛かいて大阪へ送る積りである。僕が原稿の催促を受けて書き出すと相撲が始つて記事が不足しない様になる。社の方では氣が利かないと思つてゐるだらう。以上 「うっし」

正月十日

坂元三郎様

五八八
金之助

七七三

明治四十二年一月十二日 朝 牛込區早稲田南町七番地より牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

拜啓昨夜寐る時下女が信書函からあなたの御手紙と雑誌を持つて來ました。手紙はすぐ拜見しました。坪内先生のも拜見しました。色々御事情のある事と御同情申します。私も別に主管してゐる雑誌のある譯でもなし夫から本屋に大勢力のある譯でもないから、こんな場合にはいつでも困つてゐます。然し御作を拜見した上で何とか御相談も致しませう。

只今は少々取り込んだ用事があつてゆる／＼御作をよんでゐられませんが其上正月から用をしやうと思ふとはからぬ人に襲はれて無暗に時をつぶして仕舞ひます。是非やらなければならぬ大阪へ日々やる原稿をかくかかゝない位です。夫であなただけのものももう少し待つて頂きたいがどうでせう

尤も木曜は面會日ですから何時でも御目にかゝります人がゐる時がいやなら朝のうちでも入らつしやい。今日の午後御出の由だが右の譯だから出来るなら木曜にのぼして下さい。木曜に入らしてもまだあなたの中の生きてゐるのだから御互に譲り合はなくては不可ない。随分窮窟原の至です。先は御返事迄 草々
十二日

飯田政良様

夏目金之助

七七四

明治四十二年一月十三日 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

拜啓御預けの預金帳のうちで金五拾圓を明十四日受取り明後十五日高須賀君に御渡し被下度候

印形は封入致候
手紙は淳平氏持參致候

先は右御願迄度々御面倒相願恐縮致候 草々頓首

一月十三日

夏目金之助

小宮豊隆様

七七五

明治四十二年一月十七日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より相模國小田原小峯梅林大久保神社内林原(當時岡田)耕三へ [はがき]

暮から病氣がよくない由御大事の事。毎日人が來て時間を奪はれるので仕事を出来ず閉口なり。胃病よろしからず。南方に旅寐して梅花を見たし

七七六

明治四十二年一月二十一日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より府下東鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ [はがき]

拜啓石菖屋の婆さん拜見あれは破甕よりは數等上等の作、御進境、嬉敷存候。たゞ時々同材料を引つ張

五八九

りスギテ、クドイ所あり。今少シ短カク隙間ナクスル方モ考ヘラルベシ。トニカク大體ニ於テ、此調子ハ本物也。

五九〇

七七七

明治四十二年一月二十四日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より千葉縣成田町吾妻屋鈴木三重吉へ

御手紙拜見致候酒を御やめの事當然と存候、酒をのむならいくら飲んで〔も〕平生の心を失はぬ様に致したし君の様に一升にも足らぬ酒で組織が變つては如何にも安つほくつてへらくして不可ない。のみならずはたのものが危険不安の念を起す。

黒髪は何だか氣乗がしなかつた。君自身あきがきたといふ。夫が正しい所ぢやないかと思ふ。精々勉強して御互に書かなくては不可ない。

虚子へは序を以て貴意を傳ふべし 以上

二十四日

金之助

三重吉様

七七八

明治四十二年一月二十四日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村翁へ

拜啓煤煙が二三日出ない様に候がどんな事情に候や。是迄朝日の小説は一回も休載なきを以て特色と致し候に森田草平に至つて此事あるは不審也。本人の不心得の爲とも存じ候へどもわけを一寸御報知願度君

が一番森田に就て近い關係があるから御尋する。もし本人の不都合から出たなら僕は責任がある實に困る

金之助

中村翁様

序に露國二葉亭の宿所を知らして呉れ玉へ

七七九

明治四十二年一月二十六日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

草平今日の煤煙の最後の一句にてあたり好小説を打壞し了せりあれは馬鹿なり。何の藝術家かこれあらん

七八〇

明治四十二年二月三日 午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓文學評論原稿（活版に廻したるもの）413と414とつけたる中間一枚紛失致し居り。活版屋は夫に御構なく先を組み候。一先づ御とめ下さい。さうして捜して組直しを御命じ下さい。紛失と事が極れば新たに原稿を書いてあげます。（（そこが片づかなければ、さきを直し）ても駄目だから校正を見合せます）

七八一

明治四十二年二月七日 牛込區早稻田南町七番地より牛込區横寺町正定院内森田米松へ

五九一